
パラソルワールド

和音にほへと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラソルワールド

【Nコード】

N8984N

【作者名】

和音にほへと

【あらすじ】

青空の下、雨がずっと降り続けている世界。国家面積のほとんどが海で占められていて、人々は傘を雨除けとしてだけでなく、逆さに水に浮かせて舟のようにも使っている。

ある日アマヤは、幼なじみの王女さまである姫ちゃんから届いた手紙をきっかけに、おとぎ話のなかにしか存在しないはずの雨が降らない世界 パラレルワールド 平行世界を巡る大冒険を繰り広げることとなる。

窓の外を見れば、空は雲ひとつない快晴だったけど、雨が土砂降りだった。

もしも小雨ならひなたぼっこができたのに……。

家の揺れが大きいせいで、本を読むのも気持ち悪くなってくる。

ボクは散らかった本やゴミを押しつけて、フローリングの床にごろんと仰向けになった。

低い天井だな、と思う。

狭い部屋だな、と実感する。

ひとり暮らしはお気楽だけど、休日に身動きが取れないほどの大雨が降ると、話し相手もないし気が滅入るものだ。

「おい、アマヤー！ いるかー？」

玄関から聞き慣れたでっかい声がひびく。カイドウが遊びに来たみたい。

渡りに傘とはこのことだけど、よくこんな大雨のなか来る気になつたな。

ボクは玄関まで行ってドアを開けた。

「おはようカイドウ。……うわあ、ズブ濡れじゃん」

カイドウが着ている白シャツは透けて乳首が浮き上がり、盛り上がった筋肉には水がしたたり、太陽が反射してテカっている。

見ているあまり気分のいいものじゃなかった。

「しかたねえだろ。持ってこれた傘はこれ一本だけなんだ」

カイドウは口元をゆがめ、その巨体に似合う無骨な銀色の大傘で床をこづく。

「ほら拭いて。最近あたたかくなってると、そんなんじゃ風邪ひくって」

「バカは風邪ひかねえ」

ボクが渡したタオルで刈り上げ頭をふきながら、カイドウは言い

きった。

まあ……たしかにおまえが寝込むすがたなんて想像できないけどさ。

「アマヤ、いまヒマか？」

「ヒマヒマ。せっかくの休みなんだしのんびり読書でもしようと思つてただけだね。ご覧のありさまだよ」

「うおつとー！」

家が大波で激しく上下し、カイドウはバランスをくずした。

「なるほど、さつすがボロにボロをきわめた浮き小屋だけあるぜ。いいかげん引つ越せよ」

セメントは劣化し、屋根や壁のいたるところに鉄板のつきはぎがあつて、制揺機構もまともにはたらいしていないボクの住まい。

でも小雨のときは波にプカプカ揺られて心地いい。小屋を水上に浮かせている古びたマルタをはじめ、家全体に歴史が感じられて逆におちつく。管理人さんも怖いけれどもいい人だ。

「うーん、引つ越すつもりはまったくないんだけど。お金もないし。まあ熱いお茶ぐらいは出せるからゆっくりしていきなよ」

ボクの言葉にカイドウは首をひねる。

「あん？ おまえにやとどいてねえのか、フロートボール流れる宅配便。姫ちゃんから召集かかつてんぞ」

「あれま、それは失敬。こんな大雨だし、まだ今日は宅配受けのチエックしてないんだ」

姫ちゃんはバランスワールト雨傘王国の王女さまだ。ボクらと同じ年の十三歳。昔からよく遊んできた幼なじみで、あんまりお偉い人つて感覚はない。王女だから王女以外の名前がなくて、ボクらはいつても『姫ちゃん』って呼んでいる。

立场上、姫ちゃんは城の外に出ることができないから、フロート流れる宅ボール配便をつかつてボクらに手紙を送るのだ。

「手紙の内容はいつもどおり、『城に遊びにきて』かな？」

「んー、文面はだいたいそんな感じだけどよ、ちっと妙なんだわ」

「なにが？」

「手紙の等級が“私用”じゃなくて“勅命”になってんだよな」

ふむ、宛てられた本人以外は読むことができない勅命等級の手紙か。

なにかじかに会って相談したい深刻なことでもあるのかな。

姫ちゃんの性格からして、どうでもいい理由で勅命にした可能性もいなめないけれど。

「とりあえず宅配受けを見に行こう。カイドウのと同じのがきてると思うけど、もしなかったらボクは関われないし」

「ありえねえよ。オレら三人、いつも一緒だろ」

カイドウは笑い、手持ちの銀傘を広げた。傘を逆さにして玄関口の水面に浮かべ、その上に乗った。

「ほら、おまえも乗りな」

「この前みたいに沈まない？」

手を差しのべて言うカイドウに、ボクはいちおう確認をとった。

「大丈夫だって。アメニウムなら出発前にたっぷり補充しといたからよ」

「おっけ、信じる」

自分の赤とオレンジ色混じりの傘を広げて、カイドウの傘に飛び乗った。

ボクの傘を雨除けに、カイドウの傘を舟にして家を出る。男同士のダブル相合傘だ……。

外に出てみると予想以上の豪雨だった。

ボクが住んでいる〇四四号室を含めぜんぶで六十六棟ある一人暮らし用の浮き小屋は、強い雨に打ちつけられて今にも壊れてしまっそう。

まわりを囲むテトラポッドのおかげで多少は抑えられているものの、波はかなり激しい。どの浮き小屋も荒波に大きく揺さぶられていた。

これで視界が悪かったらかなり危ないけれど、空が晴れているぶ

んまだマシか。

アパート周辺には大地がない。それどころか浅瀬も少ない。小屋のマルチにぶつかからないよう気をつけてさえいれば安全だ。

カイドウは荒波のなか、傘の手先（手でにぎる部分のこと）を器用に動かして、宅配受けがある管理人小屋のほうへとすすめていく。ふつう雨が強いときは傘に乗らないものなのに、カイドウはとても手慣れた感じだった。さすがは自他ともに認める冒険好きだ。

管理人小屋の前まで傘を寄せると、カイドウは自分の傘の手先をグイッと伸ばした。

ジャラン　と、中棒の手先にちかいところが鎖くさりに変化する。カイドウは鎖鎌の要領で手先を岩にひっかけた。

ボクらは鎖をささえにして危なげなく管理人小屋の岸に到着する。宅配受けの網を引き上げて、水面に浮かぶ流れる宅配便フロートボールを回収した。

流れる宅配便フロートボール　人の頭ぐらいの大きさがある、アメニウム鉱石を加工した球。

その突起についているダイヤルを回して暗証番号に合わせると、カチリという音とともに球が開く。

なかの手紙にはカイドウが言ったとおり、城にきてほしいという旨が姫ちゃんの筆跡で簡単に書かれていた。

ボクは手紙に受領のサインをしてから流れる宅配便フロートボールに入れなおし、また海に投げこんだ。

カイドウはうれしそうに言った。

「よっしゃ。そんじゃこれから直行で、姫ちゃんに謁見と行きましょうや」

「この大雨のなかを？」

「午後から雨が弱くなるっておふくろがうるさかったからな。急がねえと」

「……あー、スリルを楽しみたいだけか」

カイドウの両親は国家直属の天気予報士だからその予報は間違いない。ボクの家に来たのだからって親の目を盗んでぬけ出てきたんだろ

う。

「オレのなかで燃えたぎる冒険心はだれにも止められねえ。行こうぜアマヤ、オレたちはすでに運命共同体だ」

芝居がかった口調でカイドウは言っつて、ボクの両肩をガシツとつかむ。

「仕方ないなあ、行くよ。勅命になつてるのがちよつと気にもなるし」

「テンション低いな……。こんな大雨、すっぱーワクワクなのによー」

「ザーザー降りの雨でテンション上がるのはカイドウだけ。いったいなにがたのしいのさ」

「強い雨に身体を打たれるのは気持ちいいし、大波のなかのドライブつて刺激的じゃね？ あと、傘で雨を除けきれないから、どうしても服が濡れちまうよな。たまに外で会う女子の服も透けて見える。あれがエロくていい」

「代わりに自分の肌も透けて見えるじゃん。恥ずかしいからボクはイヤだ」

「んなこと気にすんなよー」

「……まあ透けることを抜きにしても、やっぱりボクは小雨なほうが好きだよ。ひなたぼっこをするには雨が少ないほどいいからね」

激しく降りつける雨のなか、ギラギラかがやいてる太陽に手を伸ばしてボクは言った。

「ひなたぼっこは最高だ。ああ、一度でいいから雨の降らない空の下で、ひなたぼっこをしてみたいよ」

「ははっ、それができるならほんと夢みたいな話だけどなわかつてる。」

この世界のどこを探しても、雨の降らない場所や時間なんてないんだ。

そんなものはおとぎ話のなかにしか存在しない。

雨が降らない世界を、ボクらは平行世界パラレルワールドと呼んでいる。

「わたし、脱ぎますっ!」
ボクらを見るやいなや、パソルワールド雨傘王国の王女さま、もとい姫ちゃんは宣言した。

とおされた場所は来客の間。部屋は石造りだし隣室まで距離があるから、側近のシオザキさんを含めたボくら三人以外に聞かれてはいないはずだけど……いきなりなんてことを言い出すんだ。

となりのイスに座ってるカイドウはぽかんと大きな口をあけて呆けている。

姫ちゃんの後方にひかえるシオザキさんは、ハンカチで額の汗をふきながら困ったような顔をしている。もともと年季のはいつていた頼りなくもやさしそうな顔に、深いしわが増えたように見えるのは気のせいだろうか。

ボクは天を仰いだ。城の天井ってすごく高いよなあと、どうでもいいことを思った。

「わーお……わたしの一世一代の大告白、めちやくちゃ微妙な反応されちゃったよ。ていうかアーミヤ、せめてわたしの目を見てほしいな」

視線をもどすと、姫ちゃんは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら、上半身を机にぐてーんとすべらせていた。

ちなみに『アーミヤ』はボクの愛称。姫ちゃんはボクをアマヤではなく『アーミヤ』、カイドウを『カイドウ』と呼ぶ。

シオザキさんがクラシックスーツのえりをなおして姫ちゃんのおしりに歩み寄り、渋みのあるしわがれ声で言った。

「王女さま、高ぶる気持ちはおさえて順序立てて説明しなければ、彼らには意味がわかりませぬぞ」

「あちゃ、それもそうよね。ごめんごめん」

かるい感じで姫ちゃんはあやまって、また背筋をぴんと伸ばした。「わたし、レインコートを、脱ぎますっ!」

改めての宣言。

……いやいや、わざわざ目的語をおぎなつて言い直さなくても、そこまでは第一声でわかりきっている。問題なのはその先だ。

レインコートとは、世にもめずらしい水をはじく衣服のこと。とても希少なもので、王族以外でレインコートを着られる人はほとんどいない。

逆に言えばレインコートを着ていることが王族であることの証なのだ。

姫ちゃんがそのレインコートを脱ぐってことは

「つまり、王族をやめるってこと？」

ボクの質問に、姫ちゃんは首を横に振って答えた。

「うっん違うよ。あっ、微妙な反応されちゃった原因はそれか。やあね、王族をやめるなんて、そんなことできつこないわよ。できたらしいのにな。レインコートを脱いで王族じゃないフリをするだけだから、大丈夫なの」

姫ちゃんは立ち上がり、レインコートのフードを取った。青いしなやかな髪が肩にかかる。

つぎにレインコートのボタンを外すと、なかから見覚えのあるスカートが見えた。

「じゃじゃーん！」

両手を広げてくるとまわる姫ちゃんの服装は、セーラー服。

ボクらが通う学校の、女子の制服だ。

紫一色で暗い感じがしてたレインコートとは対照的に、白と明るい青系色が基調となってるセーラー服は、姫ちゃんによく似合っている。

「なんだ。勅命で呼び出したあげく、ただのファッションショーかよ」

カイドウがやれやれといった様子で息をついたけれど……それはちがうんじゃないかな。

「ちっちっち、カイドウのダンナァー。そうは問屋がよろしませ

んぜ」

思ったとおり、姫ちゃんが怪しげなしたり顔で言った。

「明日からわたし、カイドウとアーミヤのクラスメイトになっちゃいます」

「は？ クラスメイトっておまつ、なにいい！？」

カイドウのでかい口がさらにでっかくなった。

「そうそう！ そういう『ガチヨン！』って感じのリアクションがほしかったの。ほれほれアーミヤも驚け驚けえ！」

「充分驚いてるってば。よく許可がおりたね。王族って城の外に出ちゃいけない決まりなんでしょ？」

「うん、祭典とか特別なときを除いてね。大変だったのよ。『学校行きた〜い』なんてそのまんま言っただけ入れられるわけないもん。議会の席で『王族といえど一般民衆と日常的に接し普遍的感性を養うべしであり云々』なんて堅っ苦しい理屈をこねまくってなんとかゴリ押しできたんだ」

「私は反対したのですがね。少しは王子さまを見習っておとなしくしてほしいものです」

シオザキさんは白髪の混じったあごヒゲをさすりながら、不満そうに愚痴をこぼす。

「お兄ちゃんはお兄ちゃん、わたしはわたし。へっへっ、ダメだよシオザキ、今更なに言っただけ。もう決まったことだもん」

「しかしですなあ……身体検査も受けていない不特定多数の輩が群がる場所へ、我ら三側近の護衛もなしに王女さまを投げ出すなど……危害がおよんでからでは遅いのですぞ。まったく議会もなにを考えているのやら」

「平和だつてことよ」

姫ちゃんがウインクでかえし、シオザキさんはつまらなそうにそばをむいた。

コンコン とドアのノックが会話をさえぎる。

「王女さま、そろそろお時間です」

「あら、少々お待ちになつてくださらない？」

ドアの向こうにいる男にたいして、姫ちゃんはいままでとちがうかしくまった口調で答えた。

手早くレインコートを着なおして、身だしなみをととのえる。

「ごめんねー、とボクらに手だけでサインをおくり、フードで目元をかくした。」

「主賓をながく待たせてしまつては失礼ですものね、ごめんあそばせ。それでは参りましょうか」

むかえにきた男と丁重に言葉をかわし、姫ちゃんは部屋を去つた。

いつも思つけど通常モードと王女モードの切り替えが早いよな。

疲れないのかなあ、あれ。

「そういえば姫ちゃんが学生やつてるあいだ、王女としての業務はどうするんですか？」

ボクはふと気になつてシオザキさんに訊いた。

「前後にスケジュールを詰めさせていただき、一週間ほど猶予をつくりました。ゆえに王女さまが学生であらせられる期限も、一週間でございます」

「一週間……短いですね」

「私はむしろ長すぎると思つておりますぞ！？ ああつ、そのあいだに万が一のことがあつてはと気が気でなりません。外では王女さまの身近な顔見知りがあるただけになるのですから、くれぐれもどうかよろしく願ひしますッ！」

シオザキさんは額に頭をこすりつける勢いで懇願する。心配性はあいかかわらずみだいだ。

「ええ、わかつてますよ」

「そういうことなら任せてくれて、シオザキのおっちゃん」

カイドウも安心させるように力強く胸をたたいた。

「あははははっ！ 頼もしいじゃないか、色黒チビ助ブラウン・ミニマムに脳みそ筋肉マッスル・フレイン」

軽快な笑い声がドアを開ける音と同時に聞こえてくる。

こんな独特のあだ名でボクたちを呼ぶのは、あのヒトしかいない。

ハープを勢いよくジャキーツンと鳴らしながら、タキさんが部屋に入ってきた。

タキさんはシオザキさんと同じ姫ちゃんの三側近のひとりだ。お偉い身分のくせに城内をいつも着崩したパープルピンクのシャツで過ごし、ヒマを見つけてはハープを荒々しく鳴らしている、格好も拳動も言動も変なヒトである。

真つ黒い傘の先端をシオザキさんに向けながら、タキさんは言う。「じじいもお堅いな。かわいいガールには旅をさせるべきなのさ」「タキくん、じじいはやめてくれんかな。まったく、きみがおらねば王女さまは……」

「俺が賛成派、じじいが反対派、ヒガシカワが中立派で、バランスはとれていたと思うけどねえ。許可がおりたのは、結局のところプリンセスの強い御意志と時代の流れさ」

ロン毛をかきあげながら、タキさんはニヒルに笑った。

シオザキさんをじじい呼ばわりしているけれど、ふたりとも中年の妻子持ちで、年齢差はほとんどない。ただしタキさんは格好といふるまいといい、若々しい感じではある。

「さてボーイズ。プリンセスからシークレットな言づてだ。『早めに終わらせちゃうからお城で待機しといてね』だとさ。うわっ、とてもじゃないけど賓客には聞かせられないセリフだねえ」

タキさんは楽しそうに手のひらを上に向けた。

「なにもせずお待たせさせちゃ悪いから、詫びに俺の演奏を聴かせてやろう」

「罰ゲームじゃねえスか」

カイドウが突っ込んだけれど、タキさんはなにも聞こえていないかのようにハープに手をかける。

シオザキさんは「仕事が残っていますので」と言いのこし、そそくさ部屋から逃げ出した。

ああ……聴き手がボクらしかないんじゃないじゃ脱け出しようもないじゃない。

ボクはカイドウと視線を合わせ、ひきつった笑いを交わした。

「いいから聴けよ。ハーブでロック！それが俺のマイソウルだ！」

ジャキユドキュイーン！

素人には絶対に出せないだろう芸術的な不協和音が、ハーブからまろび出る。

タキさんの独奏会はお昼すぎまでつづいた。

昼食をごちそうになれたのだけはよかったけれど……もし次の機会があっても勘弁してください。

終わったあともなお耳にのこる壮絶なメロディーにふらふらしながら待っていると、姫ちゃんが仕事を終えてもどってきた。

ボクら以上にふらふらした危うげな足取りで。

「ちよつと姫ちゃん、どうしたの!？」

「……議会のお茶うけに、大量の、お菓子が……並んでたのよ……」
姫ちゃんは石の壁にもたれながら、手で口をおおってうめく。

「お城の料理としばらくお別れだと思つと……もったいなくウエエ、げぷうー」

自業自得だった。

机の上にはタキさんがデザートに出してくれたマリンマロンのこつていたけれど、姫ちゃんは見向きもしない。

普段なら『甘いものーは、べつつばらー』などのたまいながらボクのぶんまで奪う勢いなのに。

「ちよつと太つたかもしれぬですよ、ははっ……」

姫ちゃんは乾いた笑い声を立てながらイスに座る。

食べすぎたせいなのか王女モードの反動か、姫ちゃんはいつも以上の脱力状態で机に上半身を倒した。

カイドウも、あごに手をつけ机にヒジつけの楽な体勢になる。

「せつかく城の外に出られんだから、傘カサーフィンでもやってみるか

？ スリムになるぜ、マツチヨになるぜ」

「マツチヨはやだな。今日は引越しの準備で体力つかうから、それでプラマイゼロってことにしておくわ」

「へえ、たった一週間なのに引越しまでするんだ。本格的だなあ」

「まーね。今回の一週間ってのはただの布石だから。ひとまず前例を作っちゃうの。最終的にわたしは無期限で、うまく時間のやりくりをしながら学生と王女を兼ねるつもり」

「姫ちゃんはフードを引っぱり片目だけ伏せながら、したたかに笑う。」

「そうだそうだ、よろこべアーミヤ。引越し先はアーミヤと同じアパートなのよ」

「思い出したように言って、姫ちゃんは契約書と思われる紙を取り出した。」

「デビルズマンション第〇四五号室の賃貸契約をここに結ぶ」

以下、契約文面がずらずらとならび、

「契約人・レイ（右に姫ちゃんの筆跡でサイン）」

「保証人・シオザキ（右にサイン）」

「アパート管理人・悪亜（右にサイン）」

「で締めくくられている、ボクが入居時に交わしたのと同じような書類だ。」

「同じアパートで、しかも隣室だった。まあ半数以上が空室の不人気賃貸だから、指定すれば簡単に取れるよな。」

「……これは、姫ちゃんが無茶しないよう監視してることか、シオザキさん？」

「デビルズマンションってすごいネーミングよねえ」

「姫ちゃんが呆れたような感心したような微妙な様子で言った。」

「そうだね、悪亜アクアさんのセンスは色々と最悪なんだ。自分の名前に古体字をつかってる人なんて、ボクは悪亜さん以外に知らないし。」

「……この『レイ』ってのは？」

「『レイ』はわたしの偽名。安全のために身分は伏せてるからね。」

さすがに『王女』って書くわけにはいかないもん」

カイドウが後頭部に両手を重ねて、イスを後ろにかたむける。

「めんどくせーな。そこまでしてオレらの生活にまじりたいもんかね」

「まじりたいものなのよ」

姫ちゃんはきっぱり答えて、「でもね」とつづける。

「じつはそれだけが目的じゃないんだ。ねえねえ、アーミヤ、カイドウー、」

きよろきよろとまわりを見回してボクら以外に聞いている人がいないことを確認する。

身乗り出して顔を近づけ、右手を口の横に当てた。

さながら秘密のいたずら話をする小さな子どものように。

「平行世界に、一緒に行こうよ」

「……!?」

緊迫感たつぷりの小声で、姫ちゃんはたのしそうに言うのだった。

お城の裏の出入り口前で、シオザキさんが姫ちゃんにつやうやく差し出したのは、何色にも染まっていない真っ白な傘。

セーラー服姿に大きなリュックを背負った姫ちゃんが、はじきを押しして傘を広げる。

「たのしみだな。わたしの傘は、どんな色に染まるのかしら」

いつも城のなかについてレインコートを着ている王族に傘はいらない。

姫ちゃんは今日、初めて自分用の傘を持つことになる。

傘がどんな色に染まるのか、どんな型があらわれるのかは、まだだれにもわからない。

「それじゃシオザキ、行ってきまーす」

「行ってらっしゃいませ。くれぐれも御身をお大事に」

はやく、はやく、とボクは心のなかで姫ちゃんを急かす。

タイミング悪くシオザキのじじい（今だけそう呼ばせてもらう）
がやって来たせいで中断された話 平行世界パラレルワールドについて、はやく詳
しいことが聞きたかった。

雨が降らない世界。

そんなものは存在しない。

世間一般に言われていることだ。

パラレルワールド平行世界に行こうなんて、世間ずれした王女さまゆえの妄言なの
かもしれない。

でも、でもでも！

姫ちゃんの言動は本気っぽかった。

王女さまだからこそボクら一般民衆が知らないような裏情報を持
ってることも考えられる。

シオザキさんに秘密ってことは、パラレルワールド平行世界は知ってても行っちゃ
いけない場所なんだろうか。行くのに危険があるってことだろうか。
いや、上等っ！ それだけの価値はある。

とにかく姫ちゃんの情報待ちだ。もしもつまらない情報だったら、
もうマリンマロンはゆずってあげない。

はやく、はやく、はやく！

シオザキのじじいめ、見送りなんてどうでもいいから、はやくど
こか行っちゃえーっ！

「おっと姫ちゃんよ、傘にはひとりで乗れるんだろうな？」

姫ちゃんが入り口の水面に傘を浮かべるのを見て、カイドウはか
らかうように言った。

「ふふん、カイドウに乗れてわたしに乘れないわけがないのだ」

姫ちゃんは自信たっぷりな返答で、傘に乗った。

乗った反動で大きく揺れる。けれどもすぐにバランスをとりもど
し、傘は安定した。どうやらしっかり練習してたらしい。

姫ちゃんはゆったりと手先を動かす。

傘はズブズブ沈没していく。

「え？ あれ？ キヤー！ ギャーッ！ ばびででえ……」

抵抗むなしく、姫ちゃんは悲鳴とともに水のなかへと沈んでいった。

あー、さては傘にアメニウムを入れ忘れたな。この前のカイドウと同じようなミスだ。

「ふ、太ったせいかな!?」

「ぶはあッ　!?!」

カイドウがとんでもないことを言った!

水中からなにやら殺気めいたものを感じた瞬間、

「のわあああああ……」

カイドウは足を取られ、水中へと引きずり込まれていく。

うおーい!?　はやく平行世界の話^{パレルワールド}を聞きたいのに、なにやってんだ!

ぎゃー、シオザキさんがこつちに駆け寄ってくるッ!

「これはいけませんなあ!」

シオザキさんは大声を張り上げた。

「外の世界には危険がいっぱい!　さあさあさあ王女さま、今からでも遅くはありません!　お考え直してくださいませ!」

「げほっ、わたしの傘にアメニウムを入れるのは、シオザキの仕事だったはずよね」

「はっ……はてさて、なんのことですか?　事前に確認しない王女さまが悪いのでは?　他力本願、断固反対っ!」

シオザキさんの目が泳いだ。

犯人はお前か、じじい。

大地の主成分であるアメニウム鉱石。

それを液化し布に染み込ませると、布は水をはじく特性を得られる。

レインコートという例外を除いて、もともと布はすべて水を吸ってしまう性質を持つ。だからアメニウムはとても重宝されている。

傘をただの雨除けにするだけならアメニウムは微量でも充分。けれども、船に使用して浮かせる場合はたくさん必要だ。

少なくなってるのにうっかり補充を忘れてて、沈んでしまうことがよくある。

「わーお、アーミヤの傘ってなかなか便利ね」

ボクの傘から出してる熱で暖をとりながら、姫ちゃんは言った。カイドウとシオザキさんは着替えを取りに行つてて、今の姫ちゃんはびしょ濡れのセーラー服で待っている。

服が肌にひつついて、強調されるボディライン。

最近微妙に膨らんできた胸に視線が飛んで、あわてて逸らす。

出発前にカイドウとアホな会話をしたせいで、なんだか余計にいたたまれない。

ボクは傘をくるくる回して、熱の放出に神経を集中させる。

「わたしもアーミヤと同じ火型だといいな」

ボクの心中をよそに、姫ちゃんはうらやむように言った。

アメニウムには人の血液と化学反応を起こす性質がある。

“雷・火・水・鋼”と呼ばれる四つの型があつて、人によってどの反応が起こるかはまちまちだ。

血液とアメニウムは近づけすぎると危険なので、衣服にアメニウムを浸すことは禁じられている。

傘で持ち歩くぐらいの距離がちょうどいい。

だからボクたちはみんな、アメニウムの入った傘を一本以上持っている。

傘にアメニウムを貯めて持ちつづけていると、自分の血液とアメニウムがなじんでくる。そうになると傘に独自の模様や色が出てきて自在に化学反応をつかえるようになるのだ。

ボクは火型。アメニウムを熱に変えることができる。

カイドウは鋼型。アメニウムを浸した物質の硬度を上げたり、変形させたりできる。さっき使ってた鎖鎌も、鋼型の化学反応の応用だ。

他に、雷型はアメニウムを浸した物質の遠隔操作ができて、水型は水を操作することができる。

にしても姫ちゃん、よりによって火型なんかがいいのか。

「こんなときと料理の火起こしぐらいにしか使えないけどなあ。しかも火型の人って全体的に多めだし」

「だからいいんじゃない。普通なのが一番いいのよ」

「ふうん……」

王族という特殊な立場にいるせいか、どうも姫ちゃんは“普通であること”にとってもあこがれている感じがある。

今回の外で学生をやる件だって、そういうのが動機のひとつだと思っ。

パラレルワールド
……平行世界に行きたいってのも、普通の人にありがちな夢だ。

だからどうというわけでもないけれど。

そついうのとは関係なしに、ボクはものすごくあこがれているわけだし。

「話が変わるけどさ、パラレルワールド平行世界の件、本当に行くあてがあるの？」

「まあまあ、そうあわてなさんな。カイドウがきて、シオザキがいなくなったら　そだね、引越先で落ち着いたらすっかり話すつてば」

じらすように、ふざけるように、ひとさし指を口元に当てて姫ちゃん言う。

もしかしたらこれはボクをからかうための狂言なんじゃないかと少しだけ不安を覚えた。

けれど結論から言えばそれはまったく的はずれだった。

姫ちゃんの話は紛れもなく本物で。

ボクたちは“知ってはいけないこと”を、後に知ることとなる。

お忍びということ、ボクらは正門ではなく裏口から城を出た。天気予報どおり、昼すぎから雨は小降りになっている。

タオルを一枚、頭にかぶるだけで雨は充分にふせげるので、傘の上下二本差しをしなくてもすんだ。傘に不慣れな姫ちゃんでも、問題なく舟を乗りこなせている。

セーラー服は濡れてしまったから、今の姫ちゃんは王女らしからぬあられもない服装。具体的には薄手の水色ワンピース になつていた。

手先をグイッと前に倒し、すぐ後ろに戻す。その動作を繰り返して、傘の舟はすすんでいく。

城の全景が見渡せる距離まですすむと、姫ちゃんはずしろを振り返り、わーお、と嘆声をあげた。

「でっかいねえ」

自分が住んでた城に対して、そんな感想を漏らす。

アメニウム鉱石の大地の上にそびえ立つ、がっしりした石造りのお城。どんな大波にも浸食されることはなく、また揺れることもない。

姫ちゃんは今までの人生のほとんどをこの城でおくっている。

「初めて見るわけじゃねえだろ」

カイドウが少しあきれたように言った。カイドウの服は濡れた白シャツのまま。ぞうきんみたいに絞って乾かし、再利用している。

「そうだね。でもいつもはさ、フードで目元を隠してさ、すまし顔で通らなきゃいけないんだもん。こういふふうにじっくり見るのって、初めてじゃないかな」

姫ちゃんは王都に出てきたばかりの田舎者のように、落ち着きなく視線を動かす。

「あれが不死山で、こっちが凍氷タワー。へえ、下から見るとだ
いぶ雰囲気変わるねえ」

アメニウム鉱石が含まれないめずらしい大地、世界で最も高い山、
不死山。

氷で覆われている赤い鉄塔、古代の遺物で最も高い建物、凍氷タ
ワー。

姫ちゃんがいつもは城の屋上から見ている二大名所も、海上から
ながめるとまた趣が異なるものらしい。

なるほど、シオザキさんの反対意見はわからないでもないけれど、
やっぱり姫ちゃんにとって城の外に出る意義は大きいと思う。今の
ハシャいでる姫ちゃんを見ると、それだけでボクまでうれしく
なってくる。

ボクたちは大地の上に建物が建っている高級住宅街を抜けて、浮
き屋台がならぶ市場の大水道へ出た。

世界の面積の九割以上は水面が占めていて、大地は一部の公共施
設やお金持ちの住居にしか使えない。市場の大水道まで出てしま
うと、ほとんど大地は見当たらなくなってしまう。

大きな浮き屋台そのものは無事だけれど、浅瀬に引っかけてある
軽い浮き道は、さっきの大雨でだいぶ流されてしまったみたいだ。
市場のお客さんはみんな傘の船に乗ったまま、ちよつと不便そうに
買い物をしていた。

お客さんはたくさんいたけれど、王女さまの存在に気づく人はい
ない。

もともと顔を知ってる人は少ないし、いつもの荘厳なレインコー
ト姿と今の明るいワンピース姿じゃ、雰囲気が違いすぎるせいでも
あるんだろう。

「夕飯の材料、買っていこうぜ」

カイドウがシオザキさんから渡されたらしい大袋を開けながら提
案した。

「ズブ濡れにした詫びってことで、おっちゃんに色々貰っちゃまっ

たんだ。この食材にいくらか買い足せば鍋ができるだろ。姫ち……
レイの引越祝い祝いで鍋パーティー、どうよ？」

大勢に正体がバレるとマズいので言い直しつつ、カイドウは袋の中身の一部を取り出した。

出てきたのは、蒼人参とサブマリンド大根。

シオザキさん……王務員ならもつと格好がつく品を用意できただろうくに、根菜類なんて渋すぎるよ。

「鍋パーティーかぁ。いいねカイドウー。わたし大賛成」

「ボク反対」

「ホワアアアツツ！ アーミヤ、何一故にい！？」

姫ちゃんがオーバーリアクションでボクを問いただす。

えーと……まさか買い物すればその時間分だけ、平行世界の話^{パラレルワールド}を聞くのがおそくなるからなんて本音は言えないよなあ。

「いや、わざわざ買い足さなくても、ボクの家にあるものと合わせればなんとかなると思ってさ」

しかしカイドウが疑わしげに訊いてくる。

「大丈夫か？ おまえん家の保存庫って、前に見たときはありえねえぐらいスツカラカンだったぞ。普段なに食ってりゃああなるよ？」

「普段というと……^{パフルオート}泡沫の粟のご飯にいそ汁^{うま}ぶっかけて、魚まんまかな」

「……それだけか？」

「たまに父さんからおくられてくるカニ缶を加えることもある」

カイドウはガクツと肩を落とし、とても大きなため息をついた。

「決めた。とびっきりの食材を買いそろえて、とびっきりの鍋をおまえに食わせてやる」

「ええーっ！？」

正直に答えるんじゃないかな！

買い出しの流れは、もう止められない。

「じゃあさ、じゃあさ、あっちの水白菜なんていいんじゃないかな？
わたしに買いに行かせてよ。あこがれてたんだ、はじめての

お・つ・か・い！」

はじめてのおつかい……不吉なフレーズ。

なんだかトラブルを起こして余計に時間を長引かせてしまいそう
な……。

「というわけでカイドウー、お駄賃ちょうだい」

「なんだよ、持ち合わせてねえのか？ 後で割り勘だぞ」

「お駄賃もらわないとおつかいにならないじゃん。それでね、それ
でね、わたしは誘惑に負けて水白菜じゃなくて隣のお店の湖畔バー
ガーを買ってきちゃうの。ミッション・インコンプリート！ ズガ
ガンツ！ 落ち込むわたしにふたりは優しく語りかける。『気に
スんな、そのバーガー、オレたちがおごるから（キラーン）』……
わーお、格好いい」

「あえてトラブル起こす気満々！？」

「つーかおごらねえしありえねえ！ 欲しけりやてめえの銭で買え
やー！」

姫ちゃんの夢想世界を、ボクらは総ツッコミで現実に引き戻した。

姫ちゃんは口をとがらせながらスネたように言う。

「乙女の純情（まじまじ）がわかんないやつらめ。まあそれは置いて、いま
一万円硬貨しか持ってないのよ。崩すと迷惑がられるから、細かい
のちょうだい」

「おまえ、そこらへんの常識はわきまえてんだなあ。ほらよ」

カイドウは十円硬貨を指ではじいて、姫ちゃんに渡した。

「平成二〇年度！ 古い硬貨だねえ。使うのがちよつともつたいな
いかも」

「かまわねえよ。王貨も古貨も価値はいつしよだろうが」

「それもそだね。んじゃ、行ってきま〜す」

姫ちゃんは傘の上で小躍りしながら前へすすみ、水白菜を売って
るおばちゃんにブイサインして「二束！」と威勢よく声をかけた。

金銭のやりとりをしたあと、おばちゃんから水に浸してある水白
菜を紐でくくって渡される。

姫ちゃんはお釣りの五円玉を見つめつつ、となりのバーガーショップの値段表をチラリ。

目をキラーンとかがやかせ、湖畔バーガー・ミニを購入。

「ぐおおおおっ！？ ウソだろあいつ、本当にやりやがった！」

「さっきまで食べすぎで死にかけてたのになあ……」

もどってきた姫ちゃんは、顔をうつむけ申し訳なさそうなポーズでボソボソと言った。

「民が食すなるジャンクフードというものを、姫も食ってみんとて買うなり」

言うだけ言って、モグモグと食べ始める。

「ふ、ぎ、け、ん、な。その五円分は後でかつちり請求するぞ」

カイドウが眉間にしわを寄せて言うが、

「うっはははは！ さく、つぎはなにを買うのかな」

姫ちゃんは豪快に笑い飛ばして、鼻歌まじりにスイスイと傘をすすめる。

カイドウはあんぐりと大口を開けて呆けた後、やけっぱちになって叫んだ。

「ちくしょうめ、オレらもバーガー買い食いだ！ でっかいやつを

！ 姫ちゃんに、見せびらかして挑発するんだ！ バーカ、バーカ、

バーガー、バーカってなあ！ うおおおおお！！」

足元の水に八つ当たりするような激しさで手を洗い、バーガーショップへと向かう。

ボクは苦笑いしながらも、カイドウに付き合うことにした。

ひととおりの買い物を終えて、ボクらはデビルズマンション〇四五号室、姫ちゃんの住居に到着した。

部屋のなかには家具がなくてからっぽだ。姫ちゃんが背負ってきたリュックサックには最低限の荷物だけ詰め込まれていて、残りは大型の流れる宅配便フロートボールでおくられてくるらしい。

なにもない部屋の真ん中を、ボクら三人は囲むように座る。

「そんじゃ落ち着いたことだし、さっさと平行世界パラレルワールドの話をやっちゃおう。あんまり延ばすとアーミヤに怒られちゃいそうだ」

姫ちゃんはいじわるそうにボクを見て、次にきよとんとカイドウを見た。

「カイドウはけっこう落ち着いてるよね」

「まあアマヤほど極端にあこがれちゃいねえからな。それにこの手の話って、眉唾物なら探せばいくらでも出てくるし、中身を聞かなきゃどうとも判断つかねえよ」

「んん、眉唾物ねえ……そのなかでもやっぱり、凍氷タワー関連の話って多いの？」

「凍氷タワー？」

ボクとカイドウはそろって訊き返した。

なんの目的で建てられたのか、どうして氷でおおわれているのか、わからないことだらけの赤い鉄塔。

現代の技術ではあんなに高い建物を建てることはできない。

その神秘性からか、信憑性の高いものからゼロのものまで、凍氷タワーにはさまざまな逸話や迷信が残されている。

「古代の王の墓として造られた凍氷タワーは、てっぺんにブラックホールを作り出す機械があつて、不毛の冥界へ繋がっている。つてやつとかか？」

「ボクが真つ先に思い浮かぶのあの話かな。“雨を降らす物質”というものは空のなかでも低い位置にあつて、高度でいうと凍氷タワーの中間地点にあるから、タワーでそれより上のところまでよじ登ると、そこは平行世界も同然だつて話」

「うんうん、そんな感じの。でもそつう話つて嘘つぱちだつてことになつてるわよね。なんでだつて？」

姫ちゃんの訊き方は質問というより確認だ。

ボクは思い出すように目を上に寄せながら答えた。

「たしか、実際にタワーをよじ登つて確認した人たちがいるからでしょ。名前は忘れたけど、たしか調査団がぜんぶで三回、人数で言うと合わせて十人ぐらいいたつて。タワーの頂点にはブラックホールも平行世界もなかつたつて、みんな証言してたはずだ」

「“みんな”の証言そのものが嘘つぱちだとしたら？」

「え……？」

ボクは声を詰まらせる。

話の意外性からじゃない。あまりにも聞いたような話だつたからだ。

姫ちゃんは、それをさも新事実だと言いたげな顔をしていた。

「知らねえのか、姫ちゃん？ 調査団のねつ造説つてのは昔から一部ではささやかれてたんだぜ？」

タワーの高いところは雲で見えなくなつているため、実際に調査団が頂上まで行けたかどうかを下からは確認できない。

「でも、タワーの頂上に行つたつていう確かな証拠はあるんだよ」
たしか、水型の職人がつくつたつていう泡写真だつて。シャボン液にアメニウムを混ぜて、膨らませたバブルが周囲の光景をそつくり写して保存するつていう特殊技術。

不鮮明ではあるけれど、その写真は間違いなくタワーの頂上から撮られたもので、また加工された痕跡もなかつたことが科学的に証明されているらしい。

「うん、知つてる」

「姫ちゃんは表情を崩さなかった。」

「調査団の人たちがタワーの頂上に行ったことはたぶん真実なの。問題は、行くための手段。さて、彼らはどうやって凍氷タワーを登ったでしょう?」

「は? んなもん決まってる。タワーの外側の氷壁を、地道にロツククライミングする以外ねえだろうが」

カイドウの言うとおりだ。

火型や水型のアメニウムをうまく使えば、そのエネルギーを利用して一時的に空を飛ぶこともできるけど、途中でどうしてもガス欠になってしまう。」

結局、人間の体力そのものに頼らないとタワーは登り切れない。

「姫ちゃんはおもむろに、リュックサックのなかから方位磁針のようなものを取り出した。」

「これ、タキに頼んでこっそり内緒で手に入れた、小傘発信機の受信機」

小傘発信機 他人の居場所を探る機械。一部の雷型の職人だけが開発できる、闇市場でしか流通してないブツだ。

「……待て、話が見えねえ」

不穏な話の切り替えにカイドウが怪訝そうな表情を浮かべるが、姫ちゃんがかまわずつづける。

「本当は別のことで使うつつもりだったんだけど、その前の試用っていうか……ただのいたずらで、たまたま休暇を一日取ってたシオザキの靴に発信機を仕込んで、その日どこへ行くのか探ってみたことがあるんだ。あの人なら、まさか探られてマズいような場所には行っていないだろうって信用してたし」

「ただのいたずらって、それ思いつきりプライバシーの侵害じゃ、」
ボクの文句をさえぎって、姫ちゃんは声をひそめて言った。

「受信機の針が、凍氷タワーの頂上を指したのよ」

「っ」

バカな。

凍氷タワーの頂上？

そんなことはありえない。

絶対に、ありえるわけがない！

凍氷タワーはタワー協会という団体が管理していて、観光地としてそのまわりの水面は一般に開放されている。

万が一、凍氷タワーに登って落ちる人がいれば非常に危険なのでタワーによじ登ることはふつうは禁じられている。

登ろうとすれば周囲を封鎖しなければならず、認可は滅多に下ることがない。数少ない認可が、三度の調査団というわけだ。

認可はもう、少なくとも最近十年間は下りていないはず。

仮に無認可で誰にも見つからず登ることができたとしても、頂上までよじ登るのにどれだけの時間がかかるやら。

とてもじゃないが一日かぎりの休暇で行けるような場所じゃない。考えられるのは、シオザキさんが凍氷タワーに登ったんじゃないかと、発信機のほうが誤作動を起こしたということだけ……。

「もちろん最初は誤作動だと思ったのよ？ 受信機に故障はなかったから、ありえるとしたら使い捨てで回収できない発信機のほう。確認のために、後でシオザキにその休みの日に何をしていたのか、怪しまれないようそれとなくは訊いたんだ。けど、はぐらかされちゃったのよね。どうも答えたくないような感じだったの。それが気がかりで、また同じような条件でシオザキに発信機を仕掛けてみたんだけど…… 血の毛が引いていったわ。仕掛けた四回中、三回も針は凍氷タワーの頂上の方角に動いちゃったんだから！」

「おいおいおいおい、冗談きついぜ姫ちゃん！？ それが本当ならシオザキのおっちゃんは休みの日、頻繁に、お手軽にタワーを登っていることになるだろうが！」

「そうなの。調査団の存在は、タワーを外からよじ登ることしかできないと世間に思い込ませるために、タワー協会が用意した力モフラージユ。頻繁に、お手軽に、誰かに見られることもなく、凍氷タワーを登る方法があるのよ」

「その方法って？」

当然出てくるだろうボクの質問に、姫ちゃんはやりと笑って答える。

「タワーの内部に入るための秘密の出入り口があつて、内部の階段を使うこと」

「内部！？ はああ、マジかよ……そいつは盲点だったぜ」

カイドウは衝撃を受けているようだ。けれどもボクは、首をかしげた。

「うーん、その考えは微妙だと思うなあ」

発信機の件は怪しいけれど……タワーの内部って発想はいかなもんか。

タワーの内部は氷漬けになつてゐるのが定説だ。とはいえ、外のブ厚い氷が邪魔で、実際に内部を確認することはできない。

たしかに階段があるのなら速さも疲労度も段違いだ。日帰りで行復も余裕だろう。

ただ、秘密の出入り口つてのがありえなさすぎる。

タワー周囲の水面は開放されているんだ。そんなものがあつて頻繁に出入りもあつたなら、とつくに一般客にも発見されていて、みんなが知ることとなつてゐるだろう。

「根拠ならあるわよ」

姫ちゃんはそう言つて、受信機の針を指で動かす、タワーの方角へと向けた。

そのまま針の先端をぐつと下に押しつける。少しずつ押す力を弱めていき、針が平行線にもどると今度は逆に針をひっぱり上げて、タワーの頂上を指させた。

「シオザキがタワー頂上へ行くときは、いつもこういう動きかたをしていたの」

タワーに登る前に、いったん下へ向かう……？

「海底かつ……！」

思い当たつて、ボクは叫んだ。

もともと小さな陸地があるだけなはずのタワー海底付近を調べる価値は建物そのものと比べてずっと低い。さらに水面が一般解放されてたくさんの人が来るのなら、足元の海底は完全に立ち入り禁止にするしかない。

出入り口が海底にあったとすれば発見されづらいし、知ってる人なら潜水風船サブマリナーで隠れたまま侵入もしやすくなる。

「そう、海底に目を向けさせないために、あえて水面を一般開放してるのよ。これ、タワー協会が怪しいと思わない？」

「突拍子もないけれど、今のところそれ以外に発信機理由は説明できない、か。……けどそれが本当なら、なんのために？」

尋ねると、姫ちゃんは逆に訊きかえしてきた。

「なんのためだと、アーミヤは思う？」

「……………」

もしも本当に秘密の出入り口があつて、それが世間に明らかになつた場合を想像してみる。

氷面をよじ登らずに、海底から入って内部の階段を上るだけで済むなら、本人にも周りにも危険はほとんどない。

観光名所として、みんなが凍氷タワーの頂上に行けるようになる……………のか？

いや、凍氷タワーは貴重な古代の文化財だ。まわりから眺めるだけならいいが、誰もが行けるようになると、凍氷タワーの劣化が激しくなってしまうだろう。

それを嫌つて、協会はタワーに簡単に行ける方法を公表したからない……………？

いやいや、劣化するデメリットをしつかり説明すれば、タワーが一般公開されてしまうことなんてないはずだ。

せいぜいが限定的な公開。

やっぱり選ばれた一部の人がしか行けないんじゃないだろうか。

危険もないんだし、さすがに今まで行ったとされる十人前後つてのと比べれば、人数は一気に増えるだろうけれども。

…… 人数が、増える？

…… 増えるのが、困る？

…… 知ってる人数は少ないほうがいい？

…… たったの十人前後なら…… 口裏を合わせることも可能！？

「なにかタワーの内部か頂上に、世間に知られるとマズいものがあるって言いたいの？」

「うん、それが一番自然な考えよね。利権がらみか、歴史がらみか、ひよっとすると世界の常識を覆すなにか」

「何がタワーに隠されている。そうなる、協会が過去に否定してきた眉唾物の話が、逆に怪しい。」

不鮮明な泡写真では、頂上まで行ってきたことの証明にしかならず、本当に雨が降ってたかどうかもわからない。調査団の証言がすべてなのだ。

「つまり、パラレルワールド平行世界があるかもしれない……！？」

ボクが言つと、姫ちゃんはゆっくりうなずいた。

「うん。あくまでも可能性のひとつとしてだけだね。どうかな？

隠す理由も、シオザキが頻繁に足を運んでる理由も今のままだとわからない。調べてみる価値はあ

「誰だ！！」

突如、カイドウが叫ぶ。

玄関口に猛然と駆ける。

ドアを勢いよく開けて、外をにらみ、そして言った。

「…… すまん、話をつづけてくれ」

申し訳なさいっぱいの声で。

「どしたの、カイドウ？」

刈り上げ短髪を掻きながら、苦い顔でカイドウは帰ってくる。

脇にかかえているものは…… フロートボール流れる宅配便？

「わりーわりー。外に気配を感じたように思ったんだけどよ、ただ

フロートボールの流れる宅配便だったわ。これって姬ちゃんの引っ越し荷物だよな？」

まあ、たしかに今の話は他人には聞かれたくないものだ。

姬ちゃんの推測が間違っていないなら、これは調査団まで用意して協会が隠そうとした事実。その裏側で大きな陰謀が働いていないとも限らない。

知られれば暗殺！ なんてのはさすがにありえないだろうけど、話が漏れて大きな騒ぎになる可能性は充分あるから、カイドウが外の気配に過剰反応するのも仕方ない。

まったく、それでも小さな流れる宅配便フロートボールごときに、ビビることなん……え？

“小さな”？

引っ越し用は大型じゃない？

待てよ待て待て……その前に

このアパート、宅配受けは管理人小屋前にしかないんだぞ！？届かないはずの玄関先に、流れる宅配便フロートボールが着いた理由はまさか！

「開けるなッ！！」

ボクは叫んだ。

目を見開くカイドウのかたわらで、流れる宅配便フロートボールが力チリと音を鳴らす。

暗証番号を合わせることもなく、ひとりでにロックが開く。

カイドウはボールを落とす。

中身が転がる。

折りたたみ傘爆弾っ！？

雷型の使い手が遠隔操作で爆破できる、小型の爆弾だ！

はああああ！？ そりゃ怪しいとは思ってたけどさ、ここまで物騒なものが出てくるか普通ッ！？

「っ！ くそっつたれええ！！」

カイドウは悪態をつき、ボクらのほうへ走る。

その背後に白い閃光　　ば、ばば爆発寸前ッ！？

陰謀！？　暗殺！？　そんなっ、そんな冗談みたいなことを本気でッ！？

カイドウが言ってた外の気配！　フロートボール流れる宅配便だけじゃない！

だれかがいたんだ！！

ものすごい形相でカイドウは齒噛みして、閃光を振り返った。

鋼型の特性。アメリウム硬化。己の銀傘を強固な盾としボクらを護るため、カイドウははじきを押した。

銀の大傘が広がっていく。

広がりきる前に、折りたたみ傘爆弾は、破裂したッ！

爆音とともに、もうもうと広がった灰色の煙。

周囲の様子はわからないけど、少なくとも自分の身体に爆弾の被害がおよぶことはなかった。せいぜい煙が染みて目が痛いぐらい。

ギョツ　と手首をつかまれる。

「……アーミヤ」

姫ちゃんがおびえた声でボクを呼んだ。

「わたし……どうして……こんなこと……」

「おちついて。大丈夫だから」

ボクは姫ちゃんの背中を水色ワンピース越しにさすって言った。

よかった、姫ちゃんも傷を負ってるようには見えない。

煙が薄まり、視界が晴れる。

カイドウが落とした折りたたみ傘爆弾を中心として、円を描くように焦げ跡が床のフローリングに残っていた。カイドウが盾で防いだ部分は焼かれていないため、焦げ跡の形は円じゃなくて、欠けた月に近い。

床や壁にヒビが入ったりはしていない。音と煙がすごいだけで、威力は小さなこけおどしの爆弾だったようだ。

それでもこいつは戦慄ものだ……！

間近に喰らえば火傷ぐらいは負っただろう。ボクらが無傷で済んだのは、カイドウが傘の盾で護ってくれたおかげだ。

……肝心のカイドウはどうした？

部屋のなかにすがたが見あたらぬ。

「どこにいるんだ、カイドウ！」

家の外から、バシヤ、バシヤと二回。ボクの呼びかけに応じたのは、水がはねる音だった。

玄関まで走り寄ると、ドアの向こうで傘の船に乗ったカイドウの

後ろ姿が見えた。さらにその奥には、もうひとり。

不審な男のすがたがあつた。

その男はマスクをかぶっていて顔が分からない。

舟として一本、手持ちに一本の計二本の傘を持っているけれど、その両方に保護シートがかけられていて傘の色も判別がつかない。全身を黒服でつつみ、手袋だけは白かつた。

「やってくれやがったな！ このオレをカイドウと知って売ったケンカなら、てめえ、いい度胸してやがんぜ、へへっ」

カイドウが怒り半分、たのしさ半分といった調子で吠える。

待て、たのしさ半分て……。

なんだかんだでボクラ三人のなかでは一番しつかり者なカイドウでもその本質はケンカ好きの冒険好きだ。タキさんをして「三側近クラスでも一対一のタイムンじゃ敵わない」と言わしめたお墨付きの実力を持っている。

突然襲われてケンカできる現状を喜んでるのか、あいつ。状況が状況だけにそんなふざけた感情は抑えてるつもりだろうし、怒っているのもマジだろうけど。

いや、でも、この急事には頼もしい……！

マスクの男が傘を広げた。

露先（つゆみき）（広げた傘の外周に六〜八個ついている、親骨を留める部分のこと）が外れ、宙に浮く。露先は八エのように男のまわりをヒュンヒュンと舞う。

男がカイドウを指差すと、露先は指された方角をめぐけて、一斉に突撃ッ！

カイドウは手先をすばやく倒し、露先を回避した。

ズダダダッ！ と露先は水面を激しく打ちまくる。

この攻撃方法は雷型の使い手のものだ。折りたたみ傘爆弾を仕込んだのと同じ人物か？

カイドウは自分の傘の手先を伸ばして、鎖鎌を作り出す。切れ味鋭くなつた手先をアパート側に投げて、マルタの接合部を切つた。

海上に切り離された一本のマルタにカイドウは傘をたたんで飛び乗る。

バンドで銀傘を細くしぼり、剣の構えを取った。

「さあ来いよ、顔も見せらんねえ臆病野郎が」

カイドウはマスクの男を挑発する。

露先がばらばらと男のまわりに再び集まり、すべて集まり終えるとまたカイドウへ指をさした。

突撃する露先に対して、カイドウは銀傘をひと振り。

「うらあつ！」

「ッ!？」

マスクの下からでも、男が動揺しているのが分かる。

露先はすべて、カイドウのひと振りのもと叩き落とされていたのだ！

同時にカイドウは、マルタの本体さえもぶつた斬っていた。半分になったマルタの片方を、カイドウは思いつき蹴り飛ばす。すぐに蹴り飛ばしたほうのマルタへと飛び移る。

蹴り飛ばされたマルタは、その勢いで急速にマスクの男との距離を詰めた。

男は広げた傘に身体をちぢこませ、防御体制をとる。

カイドウは傘の盾を広げたマスクの男に対して銀傘を振り下ろす。

ジザアツ　と男の傘が裂ける。

しかしカイドウは笑わず、舌打ち。

「逃げの一手かよ、くだらねえ」

裂けたのは傘の布部分だけ。本体じゃない。

マスクの男は傘の上半分を分離させておとりにし、すでに距離を置いていた。

なんて器用な使い方をするんだ。まるであのシオザキさんを思い出させるような……シオザキさん……？

裂けた傘の上半分ははるか上空へ飛び、ゆらゆらと弧を描いて男の手元に戻る。そして男は後退し、すぐに見えなくなってしまう。

男が去って行ったほうをギロリとにらみつつ、カイドウはボクに尋ねた。

「なあアマヤ！ 追ってもいいか!？」

「やめておいたほうがいい！ 追った先にどんなトラップが仕掛けられてるか、分かったもんじゃない!」

「……だな。最初の傘爆弾はやばかった」

「どれだけ興奮しているように見えても、カイドウの思考は冷えるみたいだ。いさぎよくアパートに戻ってくる。」

よく見るとカイドウの身体のところどころに軽い火傷の痕があった。

「姫ちゃんは顔面蒼白。けれどカイドウは、にかつと笑って両手を振りながら、大したことはないとアピールする。」

「ボクは姫ちゃんにいちおう確認をとった。」

「今の襲撃に心当たりは?」

「姫ちゃんは気まずそうな表情で、首を横に振る。そりゃそうだ。もし襲撃を予想してたり心当たりがあったなら、こんなシヨックを受けるわけがない。」

「少し落ち着くまで待ったほうがいいか?」

「いや、姫ちゃんのことを思うならむしろ、無理してでも対策は早めに立てるべきだ。」

「考えられる可能性は、大きく分けてふたつ」

「状況を整理するため、ボクは二本指を立てて言った。」

「ひとつめは『王族狙い』。なんらかの目的で王族の命を狙ってるやつが、一般人に溶け込んで警備が薄くなった姫ちゃんを襲ったっていう可能性だ」

「出発前、シオザキさんがやたらと心配していたことでもある。」

「圧倒的なカリスマをもって世界を統一した初代の王から脈々と受け継がれている王族の血筋。それを絶やさんとする不屈き者が昔はたくさんいたらしい。」

「……ただ、平和な現代、狙われる危険性が薄いとみたら議会も

姫ちゃんの外出を認めたんだろうし、襲撃するタイミングにしてもボクやカイドウが離れた後のひとりきりをねらえばいい。自分で言っておいてなんだが、この可能性はちよっと考えづらい。

「もうひとつは凍氷タワーの件の『口封じ』。姫ちゃんが凍氷タワーについて嗅ぎまわっていることを不審に思っただれかが、ボクらを尾行していた可能性だ。姫ちゃんがボクらに話したことを盗み聞いていて、真実かそれに近いものだったから、ボクら三人を口封じに襲った」

どちらかと問われれば、こちらが本命だ。というよりも、これ以外に納得できそうな理由が思いつかない。襲撃するタイミングも、タワーの話をしている最中だからピッタリ一致している。

同時に、姫ちゃんの話がただの与太話ではない線が濃厚になった。「……『不審に思っただれか』……？」

姫ちゃんが恐々と、ボクのセリフを繰り返す。

言いたいことはわかる。姫ちゃんが凍氷タワーを調べてたことを察知できる人物は限られてしまうから。

「犯人は城の人間だ」

「……っ！」

ボクの断言に、姫ちゃんは息を呑む。

「そうでなきゃ、『王族狙い』『口封じ』どちらの可能性にしても、お忍びで出てきた姫ちゃんをこんなに早い段階で襲うことはできない」

「アマヤ！ 犯人さがしは後でいいだろ。オレらが最優先でやらなきゃならないことは」

カイドウがボクの推理をさえぎって言う。

「姫ちゃんを城に連れ戻して、保護させることだろうが。いくら城のなかに怪しい人物が紛れてるつつつても、外よりは絶対に安全なはずだ」

カイドウの指摘は的確だった。ケンカ好きといえど、あくまで自分のケンカだけだ。他人が意思なく巻き込まれるなら、極力それを

避けようとするのは当然のこと。

「うっ……でも……」

しかし姫ちゃんも表情をゆがめ、苦しげにうめく。

「……もしも『口封じ』が目的なら……逆にタワーのことみんなに言いふらしちゃえば狙われなくなるんじゃないのかな？」

未練に満ち満ちた提案だった。

外に出るために、姫ちゃんはだいぶ下準備をしてきたんだろう。

そう簡単にあきらめきれないものじゃないかもしれない。

「言いふらしたことが敵さんの逆鱗にふれて、報復つても充分ありえるだろ。それに『口封じ』だと決まったわけじゃねえ。確率が低いにしても、『王族狙い』だった場合、それじゃあ無策と同じになっちゃう。危険すぎると思うぜ？」

「話したところで信じてもらえないかが微妙だしね。発信機のことも含めて話すならいいけれど、うまくやらないと後々、風評被害で面倒なことになるよ？」

ボクらふたりの反論に、姫ちゃんはしゅんとなって顔を伏せる。

……そういう表情は、見てて辛い。

ボクはパンツと手をたたき、肩をすくめて言った。

「ま、言いふらさず城にも戻らず、はじめの予定どおりに外で一週間を過ごすのもアリだとボクは思うけどね」

「えっ？」

「おいおいおい！？」

カイドウが、ありえねえと言わんばかりにボクを見下ろす。

「ボクらは三人だったのに、襲ってきたのはマスクの男ひとりきりだった。仮に爆弾がうまくいってても、だれかに逃げられてしまう危険性は高い。本当なら複数で襲うのがセオリーのはずだ」

「敵は単独犯だろうから、過剰に用心する必要もねえってか？」

カイドウの声にあからさまな険が混じった。

ボクがこの問題をわざと小さく見せようとしてると思ったんだろう。

「姫ちゃんを悲しませたくないから、一緒にいたいから、一緒に学生生活をおくつてみたいから、一緒にタワーの出入り口を見つけて平行世界に行けるかもしれないから、そんな自分勝手な欲求の押し付け。」

否定はできない。

「今、一番に考えなきゃならないのは姫ちゃんの安全だということもわかってるつもりだ。」

外に残るという選択はどうしてもリスクを高めてしまう。

けれど、リスクを承知のうえで確かめたいこともある。

「カイドウ、姫ちゃん、あのマスクの男の正体　シオザキさんかもしれないって少しも思わなかった？」

ボクの問いかけに、ふたりはギクツとなって沈黙する。

今回の姫ちゃんの秘密話のきっかけとなった人物で、しかもアメニウムは雷型。

密かにタワーに登っていた件や、立場上姫ちゃんの行動を察知しやすいという点から、状況だけ見るとこの上なく怪しいのは確か。

しかしボクらにとってシオザキさんは、小うるさいけど親しみのあるヒトだ。三側近のなかで一番の古株で、付き合いも長い。

たぶんふたりとも、シオザキさん犯人説が頭を一瞬よぎったところで、すぐにありえないと打ち消したんだろう。

あのシオザキさんが口封じにボクらを襲うなんてこと、できるわけがない　と信じたい。

カイドウが思案げに答えた。

「マスクの野郎、かなり腕は立つたな。城のやつらに限定するなら、王・王妃・王子・姫ちゃんそれぞれの三側近か、兵団長たちくらいだろうぜ。雷型って分かっているからその中でもさらに絞れる……けど、首謀者が城の人間ってだけで、あいつはただの刺客ってことも考えられるだろ？」

「刺客をひとりだけにした理由は？」

「雇ったための金か時間……あるいはツテがなかったただけかもしれないね」

えだろうが！」

カイドウは怒鳴って反論。本当にそう思っているというより、必死に否定できる材料を探している感じた。

「わたしも、タワーの隠しことはまた別の話で、シオザキはそんなことまでしない、と思う」

気持ちは姬ちゃんも同じ。……口には出さないけれど、ボクも同じ。

「でも思うだけじゃ、このモヤモヤ感は消せない。冷徹に見れば最有力の容疑者候補だしね。でも、城に戻ったら姬ちゃんの安全が保証されるのは間違いないけど、同時に犯人の正体についてうやむやのまま終わりがねない。だったら、いつそのことボクは」

「あっ！」

びっくりしたように声を上げる姬ちゃん。その目から、光が戻る。らんらんと瞳がかがやく。

「そつかそか、アーミヤの考えてること、やーっとわかったわ。いいんだね？ 大変なのはアーミヤもだけど、いいんだね？」

獯猛に、妖しく、くつくつと姬ちゃんは笑い始めた。

「うふふつ、いいね、それ。やられっぱなしの逃げっぱなしより、ずっといい……！」

この立ち直り様。

受身で状況に流されるより、自分からなにか動いたほうがよほど性に合ってるらしい。

まったく、姬ちゃんはつくづく女王に向かない女王さまだ。

「わけ分かんね……オレにも分かるよう説明してくれ」

困った様子のカイドウに、姬ちゃんとボクは交互に矢継ぎばやで説明した。

「だからね、あぶり出すのよ。マスクの男が嫌がることをして！」

「もちろん危険ではあるけれど、下手に待つよりずっと相手はやりづらい」

「不意をつかれなきゃ、カイドウのほうがマスクの男より強そう

だし」

「それで捕まえられれば言うことなしだ」

「あぶり出してだれもあらわれないなら、それはそれでいいのよ」

「行ってる理由さえつかめれば、シオザキさんをもう疑わなくて済むだろうからね」

「そもそも最初は、そのつもりでアーミヤとカイドウに話したんだから」

「ボク個人としては、パラレルワールド平行世界の有無はぜひとも確認しておきたいし」

「凍氷タワーの秘密を、暴きに行こう！」

最後はハモっていた。カイドウはピヨツていた。

「……………おまえら、

正気か？」

「カイドウー、お願い！」

「ボクらふたりだけじゃ無理だしね。カイドウの強さが頼りの作戦だから」

「……………作戦じゃねえだろ。おまえらがそうしたいだけだろ。まったく

……………」

凶星だ。

カイドウとボクの違いはただ、姫ちゃんの“安全”を最優先に考えたか、“希望”を最優先に考えたかだけ。

カイドウは正しい。ボクは甘い。

あれこれ理屈はつけたけど、この提案は相当リスクだ。

けれどボクは姫ちゃんを落ち込ませたくないし、マスクの男の正体がだれであれ、はっきりさせるべきだと思う。

そのためにはやはり、ボクら自身で動くことこそ最大の有効策となる。

カイドウは手を頭につけて、顔を伏せた。

大きな嘆息。そのまま沈黙。

やがて 笑いが漏れる。

「くくっ」

それは間もなく大爆笑に変わった。

「あは！ ははははははっ！！ つくく、ふはははは八八八八ハッ ……！！」

カイドウは狂ったようにゲラゲラと笑い転げる。

「ど、どしちゃったの……」

姫ちゃんが若干引き気味に後ずさった。

……いや、ただ吹っ切れただけだと思うよ。

今回はめずらしく制止役だったけど、本来のカイドウはどこまでもケンカ好きの冒険好きなのだ。

ボクらがここまで言うのなら自分の意見は取り下げざるをえない。それに腹が立ちつつも嬉しくてたまらないといった、そんな相反する感情をない交ぜにしたような表情で、

「仕方ねエ……！ オレも、乗ったッ！！」

野獣のように鋭い笑みを浮かべてカイドウは言い放つのだった。

できるかぎり三人一緒に行動すること。

昼夜問わず、周囲の警戒役を三人のうち一人があたること。

以上、簡単にふたつの取り決めをして、ボクらは一週間をすごすことにした。

カイドウは実家に手紙だけおくって帰らず、ボクらとともに寝泊まりをする。

今日はもう太陽が傾きかけているので、凍氷タワーの調査は明日、学校が終わってから始めることにした。

ボクらは当初の予定どおり、鍋パーティーの準備をスタート。

「カイドウ、危ない！」

姫ちゃんはわざとらしく言って、警戒役で外を見張っているカイドウに対してサブマリン大根を投げつけた。

「うおっ!？」

びっくりしながらも、カイドウは超反応。

銀傘を抜いて、スパパパパツ　と迫りくるサブマリン大根を切り刻んだ。

「わーお、格好いい！」

「つまんねえもの切らせんじゃねえ……」

「でももうちよっときれいに切ってほしかったかな」

「あげくダメ出しかよっ！」

わめくカイドウを華麗にスルーしつつ、姫ちゃんは不揃いに切り捨てられたサブマリン大根を拾い上げ、汚れを水で流したあと、形を整えるよう切り直す。

つづけて蒼人参や塩ゴボウなど他の食材も洗って切っていく。

ボクはとなりの自宅から鍋を持ってきて、火の準備を始めていた。炉に傘の先端をくつつけて、くるくるとまわすようにこする。火

型のアメニウムを利用して着火させるためだ。

火がつくまでの労力は段違いだけど、今のボクの動作は、原始人が木の摩擦熱で火を起こすのと似ている。

「姫ちゃんはボクの肩に手を置いて、しみじみと言った。」

「アーミヤ、格好わるい」

「ほつといてくれ……」

「なんだかすつかりいつもの調子だ。」

むしろ緊張感が足りないぐらいな気もするけれど、まあ暗く沈んでるよりはいいだろう。

着火が完了して、警戒役をカイドウからバトンタッチ。ボクは玄関口から外をながめる。

「だいぶ暗くなってきたし、そろそろ明かりを灯そうかなと思いつめたとき、」

「ん？」

遠くからなにかがやってきた。傘の舟に乗ってる人間とはちがう、ぶかぶか揺れている影。

「いや、あの特徴的な二本角の生えたシルクハットは悪亜さんだ。さつきまで留守だったのに、帰ってきたんだ。」

傘の舟じゃなくて、ペットの遊泳する羊、ヤギに乗っている。フカリングシープ

ヤギの後ろではヒトが入れるぐらいに大型の流れる宅配便が引張られているから、姫ちゃんの引越し荷物を届けにきてくれたんだろつ。

「おんやあ、アマヤくんではありやせんか。どうしてこちらに？」

「悪亜さんがいつもの低いこぶしがきいた声で尋ねてきた。」

「レイは昔からの友だちなんですよ。カイドウも来てて、一緒に引越し祝いの鍋パーティーをやるどころなんです」

「ヒツヒツヒ、いいですねえ。新しい環境ってのは慣れるまで大変でしょうから、色々支えになってあげてくだせえ。そうそう、ちよいとレイさんを選んで挨拶させてくださいやせんか。じつは契約を書面のやりとりだけで済ませていて、今日が初顔合わせなんですよ」

「わかりました。　　おーい！　管理人の悪亜さんが来たーっ！」
「わかったーっ！」

すぐに応じて、姫ちゃんはこちら側に向かう。
悪亜さんを見るや、姫ちゃんは一瞬固まった。

「きよつつゆわあああああああああああああああああああ！？」
間を置かず、あれもない絶叫が響きわたる。

瞬間風速でボクの背中に隠れ、ガクガクブルブルと震えながら、
「なん、な、な、なんっ」

口をパクパク、お魚になった。

二本角のシルクハットの下には、目のクマが強調された痩せこけた顔。どうひいき目に見てもダサイジャージの上着。ズボンは履いてない。

今日のパンツは、水玉パンツだ。

……しまった。普段からよく会うボクには慣れっただけど、知らない人から見れば悪亜さんの格好はセンス最悪でとんでもないんだっつた！

「ひぐっ……怖いよアーミヤ、変態さんだよ……」

「どっどっ」

姫ちゃんが本気でおびえている。

「ごめん、事前に警告しとくべきだった。

「惚れちまいやしたか？　ヒヒッ、あっしつてば罪作りな男お」

勘違いもはなはだしい発言だ……。悪亜さんは自分の格好がイケてる为本気で思い込んでいるからな。

タキさんの音楽性並みにセンスが狂っているというか、自覚がないぶん悪亜さんのほうがタチが悪いかもしれない。

それ以外は、怖いけれどぶつうにいい人なだけだなあ。親身になつてボクのくだらない悩みに付き合ってくれたこともあるし。

「改めましてはじめまして。ヒヒッ、あっしがデビルズマンション管理人の悪亜です。以後お見知りおきを。わからないことがあったら気軽に声をかけてくださいな」

「じつ、じつ丁寧にどうも。わたしは、えっと、レイです。その、あの、……よろしくお願いしましゅ」

大衆の前でもクールでいられる姫ちゃんが、ここまでキョドるのはめずらしい。

「どうも、レイさん……レイ？ 霊……礼……麗……冷……はて？」

何故か姫ちゃんの偽名を繰り返す悪亜さん。

その様子がまた不気味だったようで、姫ちゃんはボクの背後に身をちぢこませた。

「おっと、忘れてやした。こいつも紹介しときやす。あっしのかわいいペットのヤギイでさあ」

悪亜さんは横を向き、玄関口の水面に浮かぶモコモコした白い毛のかたまりを示す。

「んめえ〜」

毛のかたまりのなかからひよっこり顔を出して、ヤギイは鳴いた。「ヒヒッ、ヤギイというネーミングはね、ヒツジなのにヤギというギャップ萌えを狙ってみたんですぜ」

「そ、そうですか……」

引きつった愛想笑いを浮かべる姫ちゃんに、ボクは小声で尋ねる。
フカリングシープ「遊泳する羊、見たことある？」

衣・食の方面でボクらの生活に欠かせない遊泳する羊。フカリングシープ悪亜さんのようにペットとしているのはめずらしいが、家畜として飼われているものは外でよく見かける。しかし城内だとそんな機会にもめぐまれないだろう。

「こんなに近くで、生きてるのを見たのは初めてよ。お肉ならたまに食べるけど」

「羊肉か。今日の鍋にも入ってる」

「んめえ!？」

姫ちゃんとの内緒話がヤギイにも聞こえてしまったみたい。

ストレスで毛から脂が抜けていき、浮かぶ力を失ったヤギイは水中へと沈んでしまった。

「おつといけねえや。かわいいヤギイのためにも長居は無用。この荷物、あつしが部屋んなかにお運びしときやすぜ」

「は、はい。よろしくお願いしま あっ!？」

悪亜さんがさっさと部屋へと上がってしまい、ボクたちは止めることができなかつた。

爆破の名残、床の焦げ痕が悪亜さんの目に入る。

「なっ、なんですかい、こりゃあ……!」
ぶるぶると震えてわななく。

「あつ、あつ、あつしの愛するデビルズマンションに、見るも無惨な焼け痕があ! おああ!？ あつちにも、こつちにも! んぎゃああああマルタもギツチョン!？ ア、アマヤくん、レイさん、あなたたちの仕業すか!？」

ギンツと目をむいて悪亜さんが詰め寄つた。

毒々しい目のクマ! 禍々しい二本角! 迫り来る水玉パンツ!!

あばばば、と姫ちゃんは泡を吹く。

ボクも心臓ばっくんばっくん !

下手なごまかしは逆効果だろうとか、悪亜さんのアパートに対するこだわりは尋常じゃないとか、そういうことを考える以前に、悪亜さんのあまりの迫力に気圧されて

「失礼しやしたああ! 王女さまとはつゆ知らず、みつともねえパンツ姿ですみませんでしたああ!」

ボクらはすべての経緯を吐かされてしまった。

最初はもちろん、マスクの男に襲われたことだけを上手く切り取って話そうとはしたけれど……いつの間にか、なし崩し的に姫ちゃんの正体まで……。

事態を把握した悪亜さんは、まず自分の格好を恥じて平謝り。

「というか、みつともないって自覚あつたんだ。自覚した上で、惚れちまいやしたか」なんて発言かましてたんだ。

「いいえ、よろしいのですよ。もとより秘密裡にすすめていたこと。お顔を上げてください」

悪亜さんに慣れてきたらしい赤ちゃんが、王女さまの口調で言った。

「秘密を守るためにも、この事件については表ざたにしたくないのです。ご協力をお願いしますか？」

「へ、へいっ！ 王女さまがおっしゃるのならば、この悪亜、及ばずながら尽力いたししよう！」

悪亜さんは赤ちゃんの前にひれ伏した。

……うわっ、王族の威光つてのはあいかわらず凄い。

普通に接していれば、赤ちゃんなんて学校の女子と大して変わらないんだけど。まあ、そういうふうに考えられるのはボクとカイドウぐらいなもんか。

赤ちゃんは『安全のために身分は伏せてる』って言ってたけれど、きつとこういうことを含めたうえでの判断なんだろうな。

「そうだ。協力ついでにこの爆弾が入ってた流れる宅配便フロントホール、あつしに預けてくれませんか？」

「はい？」

悪亜さんの奇妙な申し出に、赤ちゃんは首をかしげた。

「いえね、あつしのツテを利用すりゃ、流れる宅配便フロントホールの持ち主を割り出すことができるかもしれやせん」

「たしかに、わたくしたちが保管していても仕方ないものですが…

…」

赤ちゃんは慎重に言いながら、ボクに視線を泳がせた。

ふむ、悪亜さんのツテか。

赤ちゃんを城に連れ戻させないためにも、ボクらは事件を公にできないから、兵団に事件の調査を依頼できない。

とはいえ、もともと正規の宅配網を通っていないこの爆弾入りボールは、調べたところで持ち主が割り出せないはずだ。折りたたみ傘爆弾にしても、どうせ闇市場の流通物だから購入者はわからない

だろう。

さらにこんな人目のないアパート群での犯行に、目撃証言は期待できない。

だからこそボクたちは、このままマスクの男が捕まる望みが薄いと考え、自分たちを餌にしつつタワーの秘密に迫ろうと決めたのだ。いやしかし、ムダ骨に終わる確率が高いとはいえ、なにもしないよりはマシだろうか。

ボクらの事情を知ってしまった悪亜さんが、好意で言ってくれているのだから、これはもう乗りかかった傘だ。

「それじゃ、お願いします」

姫ちゃんに代わって、ボクはそう答えておいた。

「ヒヒツ、任されました。ではそろそろ失礼させていただきますね」
「あ、待ってください。最後にひとつだけ」

ボクは悪亜さん呼び止めて、念のために訊いた。

「悪亜さんは、何型ですか？」

「……んんん？」

悪亜さんはいぶかしげにボクを見る。

なにかを考えるようにあごに手を当てた後、持っていたゼブラ柄の傘を、玄関口の水面に近づけた。

傘の先端を発射口に、水面から四十五度ぐらいの角度で、水がホースから出てくるように勢いよく飛んだ。

それはつまり、水の操作だった。

「水型でさあ」

軽妙に答えながら、悪亜さんは傘を肩に乗せて背中を向ける。

よしよし。雷型じゃないなら大丈夫。

城の人間以外でも唯一、悪亜さんはアパートの契約で姫ちゃんがここに来ることを知っていたから、いちおう容疑者候補ではあったのだ。

さっきまで姫ちゃんが王女さまだったことを本当に知らない様子だったので、もともと可能性はゼロに近かったんだけど。

さて、そうなると思オザキさん以外でボクがよく知ってるヒトたちはみんな容疑者候補から外れたことになる。

「姫ちゃん三側近の残りふたり、タキさんは鋼型で、ヒガシカワさんは……えーと、たしか火型だ。あの人は影が薄いからいまいち印象に残らないな。」

願わくば、犯人はボクらの知らない人物であってほしい。

「おっ、やっと行っただな」

ボクと代わって外の監視役をしていたカイドウが、悪亜さんが出ていくのを確認して言った。

「いきなり正体バレなんて、先が思いやられるぜ」

「そんなこと言われても……。カイドウが代わりに説明してくれたらよかったのに」

カイドウはおおげさにため息をついた。

「変わんねえよ。アマヤに無理ならオレにも無理だ。それに、どうもあの人は苦手だ。お近づきになりたくねえっつーか」

「姫ちゃんがうんうんとうなずく。」

「わたしも苦手。格好がアレだもんねえ」

「そういう意味じゃ……。いや、」

カイドウは途中で言葉を切って、ドカツと鍋の前に行儀悪く座りこむ。

そして鍋のフタを開けて、具材をかきませた。そろそろ食べごろだ。

今日はいろいろとありすぎた。せめて夕食時ぐらいはすべて忘れてワイワイやりたいのだから。

仕切り直すように、カイドウは威勢よく言った。

「ひとまず鍋パーティー、始めようぜっ！」

「おーっ！」

「姫ちゃんが元気に返し、ボクらは鍋を囲む。」

ボクの父さんは研究者である。

ボクの父さんは研究者である。ガラス”と呼ばれる幻の溶けない氷をつくりだす研究。遊泳する羊から羊毛を刈り取るとき、脂を抜けさせないようにする“保脂技術”の研究。アメニウムとはべつに、布に染みこませて水をはじかせる“第二物質”の研究。

実現不能と思われるような研究ばかりに節操なく手を出しては失敗している、夢追い人だ。

父さんはボクに最低限の生活基盤と、自由以外はなにも与えてくれなかった。

研究に没頭するあまり、父さんは昔からずっと、ボクのことを疎ましく感じていたんだと思う。

さすがに片親としての責任か、昔は今みたいに一人暮らし用の浮き小屋をあてがって家から追い出してしまっただけ酷くはなかったけれど、それでも幼いころのボクは寂しかった。

ボクは孤独。愛情迷子。誰からも わかってもらえない。幼心にそう思っていた。

ある日、ボクは父さんにお城へと連れていかれた。ボクだけじゃなくて、同じぐらいの年の子もたくさんいた。

そこで開かれていたのは、パルソルワールド雨傘王国の王女さまが主役のパーティー。

なにかの記念日を祝うパーティーだったらしいけど、なんの記念日だったのかはよく覚えていない。ただ、そのパーティーは記念日を祝う以外に、裏の目的として姫ちゃんのお友だちづくりがあったらしい。

子どもがたくさん出席していたのは、そういう理由なのだ。

父さんは研究者であると同時に大学教授の地位にもいたので、その息子であるボクも教育がしっかりされてる確かな子どもだと思われたのだろう。

しかし実際のところ、父さんはいつもボクをほったらかしだった。それが幸いしたのかもしれない。ほかの子どもたちは王女さまがとてとても偉い人だということを知っていたけれど、ボクはそういう先入観無く彼女を見ることができたのだから。

ぶかぶかのレインコートの下で、笑うことなく、同年代のボクたちを見下ろす姫ちゃん。

一目見て湧き上がった想いは、恋慕でもなく嫌悪でもない。共感だった。

彼女は孤独。愛情迷子。誰からも わかってもらえていない。

お城のなかにはたくさんの人がいて、たくさんの人を呼ぶこともできるのに、なぜかボクはそう直感したのだった。

彼女はボクと同じだ。

『あはっ、それはゴーマンというものじゃないかな』

タキさんはそんなボクの直感を鼻で笑った。

『あの子はねえ、王女さまなの。キミみたいなふつうの子どもと、おなじみたいと思うことはシツレーなんだよ』

タキさんは姫ちゃんを遠くから皮肉っぽく見つめて、言葉をつづける。

『お友だちづくりなんてムリムリ。せいぜいみんな、王女さまのいきげんとりをしてればいいのよ』

ボクはたぶん、タキさんの言い草にとても怒ったんだと思う。

『キャハハ！ になよアマヤくん、その目つき。いや〜ん、あたしこわい〜』

タキさんはボクをバカにしたように笑って、さらに泣くフリをした。

ボクがオロオロしていると、タキさんの頭にだれかのゲンコツが

落ちる。

ゴチン　とめちやくちや痛そうな音がひびき、タキさんは本当に泣き出した。

ゲンコツの落とし主は、タキさんを無視してボクの手首を引っばつていく。

『ちよつと、キミは!?!』

『オレか？　オレはカイドウ。あのオンナは、ムカついたからなくつたんだ』

『そっか。ボクはアマヤ。たすけてくれてありがとう』

『おうっ』

その頼もしさ、思い切りの良さ、なにより優しさ　ボクは勇気づけられた。

『……こんどはボクが、たすけるばんだ』

『んあ?』

ボクは引っぱられていた手首を逆に引っぱり返す。

頭にクエスチョンマークを浮かべたままのカイドウを連れて、ボクは王女さまのもとへと歩み寄る。

そんな昔の出来事を、カイドウと姬ちゃんとの出会いの日を、ボクは夢で思い出していた。

結局、年代で姬ちゃんと友だちになれたのはボくらふたりだけ。子ども同士とはいえ、王女さまと一般人のあいだにはやっぱり大きな壁があるのだろう。

言い方こそむかつくけれど、あのときのタキさんの言い分は的を射ている。

寝ぼけた頭で周囲を見まわす。まだ荷物の整理が終わっていない、ここは姬ちゃんの新しい家。

ならべられた荷物を挟んで、となりの布団には姬ちゃんがすやすやと寝息を立てていた。

窓から見える空は白んでいる。もうじき日の出だ。

「カイドウ、交代だ」

「オーライ！」

外で見張りをしているカイドウが、まだまだ元気そうな声で返した。これからカイドウは登校直前まで睡眠を取る。

寝ちやう前にひとつ、気になったことを打ち明けておくか。

「もしかしてさ、今日、タキさんがやばくないかな？」

「は？ タキのおっちゃんか？」

「いやいや、父親のタキさんじゃなくて娘のほうのタキさん」

姫ちゃんの三側近であるタキさんには、一人娘がいる。親子だから、名前はふたりとも同じ「タキ」なのだ。

「なんだ、タキ子のことかよ」

カイドウは苦笑いして言った。

「ややこしいな。おまえもあいつのこと『タキ子』って呼んじまえ」

「そう呼ばれるの、すごいイヤがってたじゃん」

「あだ名なんてそんなもんだろ」

うーん、それもそうかなあ？

タキさん（父）が姫ちゃんの側近になって以来ややこしくなったのはたしかだし……よし、本人が聞いてないところではこっそりタキ子って呼んじゃうことにしよう。

「んで、タキ子のなにがやばいんだ？」

「だってタキ子は昔、姫ちゃんと面識があるじゃない。今日の学校で会ったらバレるんじゃない……」

「面識なんてあったっけ？」

カイドウは不思議そうに訊き返した。

「覚えてないの？ ボクら三人が初めて出会ったパーティー会場で、カイドウはタキ子の頭をたたいて泣かせたじゃないか」

「ええっ？ オレが女に手え上げたってのか！？ いくらタキ子とはいえ……！」

「うん……まあ」

本当に、覚えてないみたいだ。

カイドウはたくましい腕を前に組みながら、眉をひそめて言った。「つーか、すげえ昔じゃね？ それ一度きりなんだろ？ オレだって全然覚えてねえんだし、さすがにタキ子も忘れてるだろ」

「ボクも杞憂だとは思うけどね」

カイドウは大きなあくびをしながら部屋のなかへ戻ってきて、そのまますぐに爆睡モードに入った。

代わりにボクが見張りを始める。

雨は小降り。雲も少ない。日の出が近い。今日はひなたぼっこができそうだ。

ボクは自分の赤とオレンジが混ざった傘を大きな円を描くようまわしながら、熱をじんわり発生させた。

ジュワツ、ジュワツ　と、やがて円を描いた場所に落ちる水滴が、ボクの身体にとどく前に蒸発していく。

これで濡れる心配はいらない。ひなたぼっこ体勢のできあがりだ。ちょうどそのとき、太陽がひよっこりと顔を出した。ボクは微笑を浮かべながら、とどくはずもない手を伸ばす。

「アーミヤ、わたしもなかに入れて」

しばらくすると姫ちゃんが起きてきた。答えを聞かずにボクのそばにひつつくように座る。

ひなたぼっこは小雨の日の早朝に自宅で行るのが普通だから、こんなふうになれかを入れるのは初めてのことだ。

ん……この至近距離はちよつと恥ずいな。

姫ちゃんはいつの間にか乾いたセーラー服に着替えていて、首筋から服の中に入りこむ青髪の本一本まで細かく見える。

ポカポカ太陽を前にして、姫ちゃんはふにゃふにゃと和んだ表情で、思いつきり伸びをした。

「気持〜ち〜い〜……ひゃっ？」

ほっぺに一滴、ぼつりと雨が落ちてきて、姫ちゃんはびっくりする。

雨除けにしていた熱が弱くなってきたみたいなので、ボクはまた傘をぐるぐるまわした。

「ごくろつさま。ひなたぼっこするのも結構、大変なんだねえ」

「そうだね。疲れるわりにはあまり長くは保たないし」

「ふふつ、それでもやつちやうぐらい、ひなたぼっこが好きなんだ？」

「ああ、大好きだ」

太陽は空に在るかぎり、ずっとボクらを見ていてくれる。

世界の人々に平等に降りそそぐ暖かな存在。どんなに偉大な人物にも、どんなにちつぽけな人物にも、分け隔たることはない。

家で独りで、どんなに寂しく泣いていても、太陽は明るく照らしてくれた。

もう大丈夫になった今でも、懐かしいから、愛おしいから、ボクはできるかぎり太陽の光を浴びていたいと思う。

「姫ちゃん、“空型”のアメニウムって知ってる？」

「……、あの伝説の？」

“雷・火・水・鋼”の四つの型以外の、特殊変異として生じる第五型。

空気を操作するアメニウム　ゆえに空型。

他のエネルギー切れを起こしてしまう型とは違って、どこまでも高く、太陽にとどくほど高く、天へ昇ることができらしい。

過去の記録としてその存在は認められているけれど、現在では確認される限りだれひとりとして持ち合わせていない幻の型だ。

「うん、ボクがまだ傘を持てなかった幼いころ、自分に発現するのは空型で、自由に空を飛んであこがれの太陽のもとへ行くんだって夢見ていたんだ。まあ結局ボクはただの火型だったわけで、夢はつぶれちゃうんだけどね。それで代わりに、ボク自身が太陽のそばに行けないのなら、せめてボクと太陽のあいだにある邪魔な雨を取り除いてみようと思ったんだ。そのために火型の使い方を工夫して、練習して、この雨除け法を“発明”した」

他の火型の人々がこういう使い方をしたことは今まで一度も見ることがなく、ボクは自分が世界で初めてなんじゃないかとうぬばれている。

「最初の望みから多少のズレはあるけども、これはボクの夢の結晶なんだ」

「わーお、アーミヤはすごい！」

自慢っぽい話をしてしまったけれど、姫ちゃんはパチパチと拍手までしてにこやかにボクを祝福してくれた。

ボクは調子を良くしておしゃべりを進める。

「でも姫ちゃんのおかげで、ボクは最初の望みにさらに近づくことができるかもしれない」

凍氷タワーの秘密が平行世界パラレルワールドに関係があるかどうかはわからない。あくまでも可能性のひとつだ。

けれども

「ボクは最低限、確かめたい。たとえタワーの頂上になにもなかったとしても、そこまで登れば太陽との距離はぐっと近くなるし、もしも平行世界パラレルワールドがあったなら最高だ。ボクは太陽にあこがれている以上、平行世界パラレルワールドにもとてもあこがれていて……えー、あこがれているからして……うっん……」

「ん？ どしたの？」

いきなり歯切れが悪くなったボクに、姫ちゃんは目をぱちくりさせる。

「いや、その……改めて口に出してみると、予想以上に自分の気持ちパラレルワールドが強いことを自覚しちゃったっていうか」

平行世界パラレルワールドに行ってみたいというボクの気持ち。

自分で言いながら驚いてしまうほどに、それはとても強かったのだ。

昨日カイドウを説得するときには、シオザキさんの疑いを晴らすことへの合理性や姫ちゃんの願い優先で、ボクの気持ちはそのついでみたいな言い方をした。実際にボク自身もそう考えていたつもり

だ。

しかし、本当にそうだったんだろうか？

冷静に考えてみると、無意識のうちに優先順位を逆にしていたよ
うな気がしてならない。

シオザキさんのことか姫ちゃんのことかどうでもよくて、自
分の願望最優先で突き進んでしまったのでは、と。

「……ねえ姫ちゃん、『城に戻らず、タワーの秘密と一緒に暴く』
って選択は、本当に正しかったのかな？」

思いきって尋ねてみた。

やりたいかどうかではなく、正しいと思っているのかどうかを。
今ならまだ、引き返すこともできる。

「……………」

姫ちゃんは無言。そして無表情。じっとボクを見つめる。

バチーン！　といきなり思いつきり背中をたたかれた。

「痛っ!？」

ボクを見つめる表情からは、あいかわらず感情が読み取れない。

ただ小雨が落ちるような、ぽつり、ぽつりという軽やかな音を鳴
らすように、姫ちゃんは語りだす。

「この世界のどこかに、雨を欲しがるヒトはいると思う?？」

「……………」

「いるわけないよね。だって、雨なんてずっと降りつづいているん
だもん。でもさ、たとえ話になっちゃうけれど、世界のどこかに雨
が全然降らない場所があったとしたら、そこに住むヒトたちはとて
も雨を欲しがるんじゃないかな?？」

雨除けの熱が弱まり、ボクらの身体にも小雨が、ぽつり、ぽつり。
「どれだけ他人にとってはくだらなく見えても、ヒトは、自分に欠
けるものを欲しがるんだよ。どうしようもないのよ」

姫ちゃんは自分の傘を取り出し、トントンとマルタをこづいた。

「わたしは王女だから、みんなの当たり前が欠けてばかり。パパや
ママと一緒にワイワイご飯を食べたり、気の置けない友だちとずっ

と一緒にいたり、『わたし勉強してないよテストやばいよ』とかクラスのみんなで言い合いながら裏でコソコソ勉強してたり、先生の監視網をくぐり抜けて買い食いミツシヨンを遂行したり……だから、求めるの。どうしようもないぐらい。今回だってそう」
はじきを押して、傘を広げる。

「身分を隠して学生になる。自分が王女だなんて色眼鏡のかかっていない真っ白な状態で、ゼロから始めたい　零レイから始めたい」
まだ何色にも染まっていない、真っ白な傘だ。

「正しいかどうかなんて関係ない。わたしはわたしの求めたわがまを貫いて、アーミヤはアーミヤの求めたわがまを貫くの。それでいいの」

姫ちゃんは広げた傘で目元を隠し、ペロツと舌を出した。

姫ちゃんはわがままだ。

いつもいつも、欲しいものを手に入れるために頑張っている。ボクらを巻き込みながら、あきらめずにあがきつづけている。

でも、それゆえに、姫ちゃんはわがままを自分だけのものにしたがらない。

ボクらにもわがままであってほしいと、わがままなことにそう思っている。

そのために姫ちゃんはボクらに凍氷タワーの秘密話をしたのだと、ボクは今更ながら理解した。

姫ちゃんが外へ出る本当の目的は身分を隠して学生をやることであって、タワーの探索はついででしかない。

最初はプレゼントのつもりだったのだ。

ボクには夢を、カイドウには冒険を　ふたりが求めるはずのわがままを。

そんな姫ちゃんの想いをよそに、タワーの話は事態を予想外の方向に動かしてしまっただけだ。

けれどもボクは平行世界パラレルワールドへ行きたいという夢を依然として追っている。わがままを貫いている。

だから目元は、笑っていたんだと思う。

ボクの背中を叩いたのは、つまり激なのだ。

そういうことならそれでもいいやとボクは思い直し、ひなたぼっこを再開するために傘をまわす。

水の道路にはラインが一本引かれている。

傘の船がたくさん通れば通るほど、進行方向に向かって水の流れは勢いを増してしまう。その流れが混沌とならないよう、ラインを境界にみんなが左側通行ですすんでいく。

ラインは水に浮かせているだけで固定されていないため、通行量に応じて道幅は調節される。

現在ボクら三人は、学校前の大通りを進行中だ。

道幅の比率は、左と右で、およそ九対一。まわりの歩行者のほとんどは、男子と女子で形状は違うけど、学校指定のセーラー服を着ている。ボクらと同じ学校の生徒たちだ。

わざわざ傘の船を漕がなくても、流れに任せていれば勝手に学校まで連れていってくれる。

いつもは競泳するような速さで学校に行くボクとカイドウだけでも、今日は姫ちゃんが風景をたのしみたいということで、のんびりと向かうことになった。

やがて学校前の大きな水門が見えた。

その奥には、お城ほどではないにしても、大地の上に建てられた立派な校舎がそびえている。いくら制揺機構があるとはいっても、海上での読み書きは地上よりも効率が悪いいため、学び場には優先して大地が割り当てられているのだ。

城からもっとも近い場所にあるこの王立第一学校は、学校のなかでもかなり大きい。

十五歳までの義務学校だけでなく、少し離れたところには高等学校や大学までくっついている。

ボクの父さんもここの大学の教授職で、研究のためにほとんど学校内で寝泊まりするような生活をおくっている……らしい。ボクと

父さんが校内で直接顔を合わせたことはない。

「それじゃあわたし、職員室に行ってくるから。また後でね」

下足場で傘を乾かしながら姫ちゃんは言い、ボクらとひとまずお別れした。人目の多い学校内なら離れてても危険は少ないだろう。教室に向かう階段を上がろうとして、後ろから声をかけられた。

「今の子だれよ？ 見ない顔だったわね」

振り向いて、人を射抜く鋭い女狐のような目とかち合った。

「おう、タキ子じゃねえか。ちーっす」

カイドウがふつうに挨拶を返して、

「いい加減やめてくんない？ その呼び方」

タキ子は迷惑そうにクセの強い髪を掻きむしる。

「おはよう、タキさん」

「おはよう、アマヤくん。うんうん、そう呼んでくれるキミは偉いなあ」

タキ子は甘ったるい声で言っつて、ペットでも愛でるかのようにボクの頭髪をわっしわっしと揉みしだいた。

「っ！」

女子のなかでも屈指の長身を誇るタキ子と、まだ声変わりすら果たしていないお子ちゃまなボクとでは身長差は歴然だ。

ただでさえ最近はずいぶんカイドウをはじめ周りの男子がどんどん身長を伸ばして置いてけぼり感があるというのに、女子に頭をなでなでされる屈辱感はずいぶん半端なかった。

タキ子はボクの屈辱をわかっていながら、あえてなでなですることとを最近の日課としている。

オニだ。鬼畜だ。ヒトデなした。

タキ子はニコニコ顔でカイドウに親指を向けた。

「アマヤくんの爪の垢を煎じて、このバカの鼻の穴に注ぎこみたいぐらいだよ」

……裏ではボクも「タキ子」って呼び始めてることがバレたら、どんな制裁を受けるだろうか。

昔みたいに誰彼かまわずとげとげしい言葉を吐くようなことはなくなつて、表面上ちよつとだけ柔らかい性格になつたけど、今でも相手によっては容赦ないからなあ。むしろ安易な罵詈雑言をつかわずに相手の心をえぐる術を身につけて、凶悪になつてしまつたといふべきか……。

背筋が寒くなり、ボクは話題を戻した。

「今の女の子はレイつていつて、クラスに新しく転入する子なんだ。ボクとカイドウはちよつと知り合いでさ」

「へえ、転入生が来るなんて聞いてなかつたわよ」
本当に驚いている様子だ。

「明るい感じのいい子だつたわね。ふうん、クラスメイトになるんだ。楽しみにしておくわ」

タキ子はそう締めくくつて、一足先に階段を上がつていく。

ボクとカイドウは立ち止まり、互いに顔を見合せた。

「ほらな？ 全然、覚えてるようには見えねえぜ？」

「みただいね」

とりあえず、ボクの心配はただの取り越し苦労とみてよさそうだ。軽い足でボクとカイドウは教室に向かう。

姫ちゃんは少し遅れて、担任の先生と一緒に教室にやつて来た。

王女という身分から備わつた人前でも物怖じしない度胸と、もとも持ち合わせていた明るいキャラで難なく自己紹介をこなす。

わざわざボクらがフオローする必要もなく、最初の休み時間にはもう、女の子同士で固まつてキヤイキヤイとたのしそうに談笑していた。

「女の子同士つて、いいよな」

カイドウが遠目でにやけながら言った。

うん、姫ちゃんがハブられることなくクラスになじめそうで、ボクもひと安心だ。

城のなかでも教育は受けさせられてたらしいから、授業にも充分についていけている。一時間目の古典も、二時間目の数学も、先生

の出した質問にすっかり答えていた。

三時間目のアメニウム科学では、となりの女子と雑談しすぎて、いきなりこっぴどく叱られてたけど。

そんなこんなで時間はすすみ、あつという間に放課後になった。

仲良くなった女子たちの一緒に帰ろうという誘いを姬ちゃんは断り、ボクらのほうへと合流する。

「なんだよ、べつに断らなくてもよかつたんだぜ？ オレらは後ろから隠れて見張ることもできたんだ」

「いいよいよよ、明日になったらまた会える」

カイドウの堂々としたストーリーカー宣言をスルーして、姬ちゃんはご満悦顔で言う。まさに大願は成就せりって感じだった。

王女さまであるがゆえに欠けてばかりいた当たり前を、今日でだいぶ満たしたんだろう。

本当に変わるものだ。姬ちゃんの性格もあるだろうけど、身分を隠しただけでこうもあつさりみんなと打ち解けられるなんて。

身分を隠しただけで。

身分は隠したままで。

……もしもみんなが姬ちゃんの正体を知ってしまったら、その関係はどうなるのだろう？

そんな一抹の不安がよぎったけれど　ボクは深く考えようとはしなかった。

傘の船が一行でしか通れない。

凍氷タワーの周辺水域に入るための水門は、それぐらいに狭かった。

石造りの堅そうな水門のまわりの浅瀬には、鉄柵が左右に広がっている。その奥には高く尖った岩山が散在していて、乗り越えることはできそうにない。

「ぶん、怪しいじゃねえか」

カイドウが水門を通りながらつぶやく。

入場制限をしたり身体検査をするために観光名所の水門を狭く設けることはよくあるけれど、凍氷タワーはそのどちらも行われていない。

必要に迫られた場合に備えてあらかじめ水門を狭くしておいたとふつつなら考えるだろう。

けれど、凍氷タワーの海底に秘密の出入り口があるかもしれないと知っているボクら三人には、ここに別の意図が見えてくる。

サブバルン潜水風船の持ち運び阻止だ。

サブバルン潜水風船とは、古代のおとぎ話に出てくる潜水艦を現実のものとした偉大な発明品。その形状はぶくぶくとした球形で、理想とされた潜水艦よりずっと格好悪い。

ボクらが海底を探るためにはどうしても潜水風船が必要になる。

けれどもこんなに水門が狭いと、タワーの近くまで潜水風船を勝手に持ち運ぶことはできない。

姫ちゃんが悩ましげに言った。

「怪しいのはいいけれど、わたしたち、どうやって海底を調べよう？」

「うーん……とりあえず今日は、普通に海上から調査しようか」

どこかから秘密で潜水風船を持ち運ぶルートがあるかもしれない。そうでなくても、秘密の出入り口がどのあたりにあるのか目星をつけておきたかった。

ボクらは水門の先へとすすむ。

真正面に凍氷タワーのでっかい四本足と、その真ん中に屹立する岩山が見える。上のタワー本体を見ようとしたら首がものすごく疲れそうなので、ボクは見ない。

通りにはたくさんのおもちゃ水鉄砲・ベストセラー書物・焼きそば焼き羊串（最新のおもちや水鉄砲・ベストセラー書物・焼きそば焼き羊串といった屋台の食べ物など）が行き来している。

右手に見える大きな浮き家は、凍氷タワー博物館。なかにはタワ

ーにまつわる記念品や資料がたくさん展示されている。

左手には、たくさんの小さな浮き屋台がならんでいて、観光客を相手に食べ物やみやげ物売っていた。

「ん？ あれは……」

カイドウが不審そうに浮き屋台のうちのひとつを見ていた。

その屋台にはだれもヒトがいない。

カイドウは屋台に近づき、なにもないはずの空間を指で弾いた。パチツと、傘の布をはじく音がする。

ああ、なるほど、保護色か。

ボクは屋台に近づいてようやく違和感に気づく。まわりの風景と同じような色で傘を染めて、すがたを隠しているのだ。

カイドウには無理だけど、鋼型の使い手の一部はそういう保護色で身を隠すことができる。

「タキ子おー、おまえなにしてんだ？」

カイドウが尋ねるも、無反応。ピコーン、バチコーンとふざけて傘をつつきまくった。

観念したのか、傘がもとの濃緑の色にもどり、たたまれる。

タキ子のぎりぎり歯を噛みしめるすがたが見えた。

「なんであなたがここにいるのよ……」

イヤなやつに会ってしまったと言わんばかりの表情を、隠そうともしない。

「わあっ、タキちゃんだ。やつほーい！」

「あら、レイちゃん、やつほい」

カイドウに対するのは打って変わって、気軽な声で返す。

「それにアマヤくんも。ふうん、王都に来たばかりのレイちゃんにふたりで凍氷タワーを案内してあげてるってところかしら」

「まあそんなところだよ。タキさんは？」

「……バイトよ」

タキ子の手前には、半球にくり抜かれた型がたくさんある鉄板が敷かれていた。型にはジュウジュウと音を立てて、小麦色のドロド

口した液体が焼かれている。液体の中にはタコが一切れ。

カイドウが恐れおののいて言った。

「おおおっ、タキ子のタコ焼き！」

「……ピクで刺してもいいかしら、あなたを」

ただのタコ焼きをつつく道具が、凶器として妖しく光る。

「へっへえ、いいのよ。チクうちまうぜ？ オレらと同一年で、バイトなんてできるわけないよな。どうせ年齢ごまかして雇ってもらってんだろあ？」

「ちっ、弱みをひとつ握ったぐらいで調子こいてんじゃないわよ」

年齢詐称か。たしかに学校指定のセーラー服を着ていなければ、

タキ子は子どもには見えない。

ことプロモーションにいたっては、おとなの女性も顔負けの精錬されたものになっている。決して大きいわけじゃないけど……美乳だ。

タキ子の今の服装は、黒ビキニの上にエプロン。

まったく、なんて格好してるんだか。見えてしまう肌面積の割合もかなり高い。これはイケない。

「あらあら、アマヤくんには刺激が強すぎたかしら？」

「！！！」

見たたのは一瞬だけなのに、タキ子が目ざとく突っ込んできた！

「ふーん、アーミヤもやっぱり男の子なんだねえ」

横から聞こえる姫ちゃんの声が、どこか冷たい。

「いやあいやいや、色目なんて使ってるわけないじゃない!? これはただのあれだよ！ そう、公衆の面前でするような格好じゃないよなあって、純粹に憤っていたのだじょ！」

動揺で声は不自然にでかくなるわ、語尾はおかしくなるわで最悪だった。

「あー、はいはい。ごめんねえ、アマヤくん」

と、小馬鹿にしたようにタキ子さん。

「服を汚したくなくてこういう格好をしているだけよ。服を買うの

も洗うのも自己責任だから。そんなことでムダ金は使いたくないの。ちよつと欲しい楽器があつてね、貯めてるのよ」

なんかどうでもいい補足説明まで付けてくださった。

カイドウが浮き屋台に寄りかかり、喜々としてタキ子にからむ。

「なんだよ」。楽器ならおまえのオヤジさんがたくさん持つてるだろつがよ」

「うざつ……あの人は音楽性が合わないのよ。あたしはクラシックな音楽が好きだから」

まあタキ子だけじゃなくて、タキさん（父）の音楽性はたぶん本人以外には理解できないと思う。

それでも自分の音楽が世界に通用すると信じて演奏し続けているんだから、聴かされるボクら側にしてみればはた迷惑な話だ。

「お父さんに買ってもらうとかは無理なの？」

「そうねアマヤくん。王務員つて、地位のわりに給料は微妙だし、そもそもあの人はあたしに最低限の生活基盤と自由以外はなにも与えてくれないわ。欲しいものがあるなら自分でなんとかなさいってへえ、まるでボクの父さんみたい。

たしかにタキさんが父親をやつてるイメージなんて湧きにくいけれど。

「まあ先祖代々、国家直属の天気予報士の家系でお金に困ったことがないようなボンボンには、そういう苦勞はわかんないでしょうけど」

タキ子が侮辱するようにカイドウを見下げて、

「ああ！？ タキ子でめえ、ケンカ売つてんのか」
カイドウは声を低くして返す。

「あら、本当のことを言つたまでじゃない」

「わざわざ口に出すことでもねえだろうが……！」

あーあ、どうしてカイドウとタキ子は、こつもすぐ険悪モードに入つちゃうかな。

ボクは慣れているからいいけれど、姬ちゃんはちよつと戸惑い気

味だ。

「痴話ゲンカだよ」

こっそり耳打ちしておいた。

日が傾いてきて、ボクらはデビルズマンションに戻ることにした。今日の調査で分かったことが三つある。

その一、姫ちゃんはタキ子のタコ焼きが好物。

その二、姫ちゃんはソース派でマヨネーズをかけない。

その三、姫ちゃんは一口でタコ焼きを五個までほおばれる。

……つまり、タワーに関する収穫はゼロだった。満たされたのは姫ちゃんのお腹だけだった。

ぐるりとタワーの周辺水域を一周したけれど、どこも大地や柵やテトラポッドで塞がれていて、サブバルン潜水風船を持ち込めそうにはない。水の流れを見るに、海底から潜水風船サブバルンを行き着させるような秘密のトンネルもありそうにない。

今日はタキ子のタコ焼きで時間を潰してしまったこともあるが、そもそも放課後から夕暮れまでの時間自体が少ないから、それ以外のことを調べる余裕はなかった。

襲われるかもしれないことを考えると、夜になって調査をつづけるのは得策じゃない。

こんなことでは先が思いやられる。

「やあやあ、ボーイズ・アンド・プリンセス！」

家路の途中で、軽薄そうな声に呼び止められた。振り向くと、口ン毛でスーツ姿をした若づくりの男が傘に乗っていて、こちら側にやって来るのが見える。

えーっと……誰だっけ？

水道路に設置されているホタル貝の街灯が薄暗いせいで、顔がよくわからない。

なんだか見覚えがあったようななかったような　　と　　思っているうちに、パープルピンクのシャツのイメージが重なっていく。

「わっ!? タキさん!」

ひらめいて、ボクは名前を呼んだ。

タキ子じゃなくて、父親のほうのタキさん。

城ではいつもラフな格好をしているから、なかなか気付けなかった。よく見ると船の上の荷物には愛用のハーブも見える。

「どうして今日はスーツを着てるんですか? 珍しいですね」

「おいおい色黒^{ブラウン・ミニマム}チビ助、俺だって真面目でシリアスな王務員 しかも三側近のひとりなんだよ。必要なときには、そりゃスーツぐらい着るさ。ねえ、プリンセス?」

同意を求めるようにタキさんは姬ちゃんに話を振る。

姬ちゃんはものすごく神秘的な顔つきで言った。

「わーお……タキがスーツなんか着ちゃったら、きつと明日は氷が降る」

「プリンセスまで!」

タキさんは素つとん狂な声を上げた。

姬ちゃんは周囲を見回しながら声をひそめて注意する。

「タキッ! まわりにヒトがいないから良かったけれど、いまのわたしは身分を隠してるの! 『プリンセス』なんて大声で言っちゃダメ!」

「おっと、そいつはゴメンよ」

タキさんは小声で詫びて、自分の長い髪を梳く。

「キミらとこんなところで会うとは思わなかったな。学校の通学路とは違うみたいだけど?」

「アーミヤとカイドウと一緒に凍氷タワーに行ってたんだ。そうそう、タキの娘ちゃんが焼いてくれたタコ焼きがね、すごくおいしかったの!」

「ああ、そういえばあそこでバイトしてるらしいねえ。秘密らしいけど。どうだい、俺の娘は元気にしてた?」

タキさんは少し寂しそうに笑った。

「もともと放任主義だったけど、最近は嫌われてしまってるくに会

話もしてないんだ。『パパ臭い！ キモい！ 近寄らないで！』とか言われちゃって……それつきりさ」

「ほっほう、思春期の女子にありがちな、父親への過剰反発というやつですな」

タキ子と同一年なはずの姫ちゃんが、わけ知り顔で言った。

苦しそうにタキさんは首を振る。

「いいや、俺も悪いんだ。リビングでくつろいでるときにやらかした透かしっ屁を、どうやら娘がダイレクトに嗅いってしまったみたいで……」

「へ？」

「そのとき俺、まわりにだれもいないと思っててさ。放屁しながら満足げに、『エクスタスイ〜』なんて口走ってしまったのが運の尽きさ。あはは」

「……………」

あはは、じゃないよ。

どうしてそんな話を女の子の前でしちゃうかなあ！？

「タキ臭い、キモい、近寄らないで」

姫ちゃんはタキさんからささつと離れ、嫌悪感あふれんばかりに言い放つ。

「プリンセスまでツ！？」

直前の言いつけを忘れて叫んでしまうほど、タキさんはショックを受けてしまう。こめかみに両手をつけて、ガクーンと傘の船にうなだれた。

「あ……いやいやごめんごめん。悪ノリしちゃった。本気でそう思ってるわけじゃないから、顔を上げなよ」

落ちこみようが半端なかったためか、姫ちゃんはあわててフオロ―を入れる。

「うんうん。タキは一見軽そうだけど、裏ではしっかり仕事もして立派なヒトだってわたし分かってるから。ちょっとデリカシーに欠けてるだけなんだよね！」

「あはは……だからワイフにも逃げられる……」

タキさんは自虐的にうめいた。思いのほかダメージが大きい。カイドウもタキさんを励ましにかかった。

「タキのおっちゃん、すっかりしようぜ!? スーツ着てこんなところにいるってことは、まだ仕事が残ってんだろ? 仕事して、すべて忘れたらいいじゃねえか!」

「うう……そうだ。俺にはまだ、やるべきことがある」

己を奮い立たせるように言って、タキさんはボクと姫ちゃんに目を配らせた。

「それじゃあ一緒に行こうか、ボーイ・アンド・ガール」

「一緒に?」

「そうさ。俺が向かう先はキミらの住居、デビルズマンションなのでね。遅くなってしまうけれど、じじいの代理で管理人の悪亜さんに挨拶参りをしに行くのさ。『レイをよろしくお願いします』って」

ボクは妙な胸騒ぎを覚えた。

「シオザキさんの、代理?」

タキさんは肩をすくめ、あきれたように言った。

「ああ、いまは側近としての仕事がほとんどないだろ? それをいいことに、休暇を取ってるのさ。しかも昨日、きみらが出ていってからすぐにだよ。せつかちだよねえ」

「……………」

つまり、マスクの男がボクらの前にあらわれたとき、シオザキさんも城の外だったってわけか。

「せめて自分の仕事ぐらい全部終わらせとけて話だよ。おかげで俺にしわ寄せがくる……」

「たしかにタキのおっちゃんはそういうキャラじゃねえよな。おなじ三側近でも、ガツちゃんとは代われなかったのかよ」

「ああ、ヒガシカワか。……すっかり忘れてた」

タキさんは気まずそうに頭をかいた。

「あいつはどうも影が薄くて困るよなあ。押しつけたかったけど、もう後の祭りか。うーむ、失礼があっちゃいけないとはいええ、似合いませんいもしないスーツを着てるのって本当にナーバスなだけだなあ」「え？ ああ、それはたぶん、いつもの派手なシャツでも大丈夫だったと思いますよ？」

タキさんが正装したところで、どうせ悪亜さんの普段の格好はアしだから。

……でも、姫ちゃんの正体を知ったときに『みっともないパンツ姿ですみません』とか言ってたから、今日の悪亜さんは意外としっかりした格好でいるかもしれないな。

「ぎいいやっあああああああッ

！！！！」

そしてタキさんは悪亜さんの正装に、はちきれんばかりの絶叫で応えるのであった。

管理人小屋の前で仁王立ちする悪亜さんの格好は、まったくもっていつもどおり。

いつもの二本角シルクハットに、いつもの人相が悪いツラ。フリーマーケットで投げ売りされてそうな安っぽいジャージの下には、やっぱリズボンを履いていない。

今日のパンツは、いちごパンツだ。

「残念ながらあつしは男と付き合う趣味はありやせんぜ、イヒヒッ」悪亜さんは余裕たっぷりで言いのけた。

「どうですかい、アマヤくん、レイさん？ 今日のパンツは昨日のようなみっともねえ水玉とちがう、あつしの勝負パンツでさあ」「そういう意味か。

ボクは悪亜さんを甘く見ていたようだ。このヒトは完成された変態で、矯正はできない。

悪亜さんは自慢げに腰を振って、いちごパンツを強調！ 強調！ 強調ッ！！……もう明らかにセクハラっばい。

「ヒヒツ、贈り物はありがたく頂戴いたしやす。レイさんはあつしにお任せください」

お任せしてしまつていいものかとタキさんがめちゃくちゃ不安げな表情を浮かべていた。

「大丈夫ですよ。ヤバいのは外見だけなので」

ボクは小声で保証する。

あまり納得してない様子だったけど、タキさんは一礼の後、きびすを返した。

「アマヤくん、王女さま。流れる宅配便フロートボールの件ですがねえ、」

タキさんが去るのを確認してから、悪亜さんは言った。

「正規の宅配網を通つていなくなつたらしく、そこから持ち主を割り出すことはできやせんでした」

「やはりそうしたか。申し訳ありません。わざわざわたくしたちのために調べてくださつたのに……」

「謝らんでください。まだ調べ終わつちやいねえんですから」

悪亜さんはクマの濃い目を、カツと見開いて輝かせる。

「ヒヒツ、あつしだって、はらわたが煮えくりかえつてるんでさあ！ あつしの愛するデビルズマンションに傷を負わせた不屈き者は、この手で懲らしめなけりや気が済みやせん……！ 兵団ならここまですでたでしょうが、あつしは違いやすぜ。ボールを丹念に調べ上げ、ついに、ついにツ、こんなものを発見しやした！」

悪亜さんが自慢げに白い布きれを取り出して見せた。

布きれに茶色の粒が付いていることに気づく。

「土……ですか？」

「ええ。微量ですがね、ボールに付着していたんですよ」

「なるほど、おかしいですね」

ボクが相づちを打つと、姫ちゃんはきよとんと首をかしげた。

「なんで土が付くとおかしいの？」

「デビルズマンション周辺には大地も浅瀬もほとんどないんだ。この近くで土が自然に付着するなんて考えづらい」

「その土はどこか遠くで付着したものでしょうねえ。犯人はポ
ールを水に流さないまま玄関口に浮かべたんでしょう。そのせいで
土が洗い落とされずに残ってしまったんでさあ。ヒツヒツヒ、土の
成分を調べれば、それがどこで付着したものが分かるかもしれやせ
ん」

「土の成分を調べるって、そんな専門的なことをいつたいどこで？」
「ヒツツ、当てならありやす。任せてくださいえ」

悪亜さんは胸を張り、腰を振って答えた。

うーん、たったの一日で宅配網の分析ができただけでも充分凄
いの、このヒトも大概、謎が多いなあ。
ツテのための人脈、アパート関連を除いた他人との付き合い、ち
よつと想像できない。

悪亜さんは、センス最悪なことを除けばそんなに悪いヒトじゃな
い。けれど、そういう内面を知るまでのハードルがけっこう高いは
ずだ。

なんたって、格好だけ見ればこのうえなく近寄りがたい変態さん
友だちなんてあまりいなさそうな あれ？

格好だけ見れば……？

内面を知るまでのハードル……？

なにかが頭に引っかかる。

なにかが頭に出かかっている。

なんだ、なんだ、なんだ……！

格好は見せかけ内面はべつにある発想の転換もうひとつの方法外
からルート内側の手段雷型シオザキさん海底へあれだ丸い広告模型
流れるタキ子タコ焼き外見だけ黒ビキニエプロンおいしい偽装

「ああっ！？」

思わず声を上げる。

それは見方を変えて初めて気づくことだった。とりあえず明日、
真っ先に確かめてみる価値はあるだろう。

翌日は真夏のように暑い日だった。

雨はやや強めで、タオル一枚かぶるだけだとふせぎきれない。

なのに外に出ているヒトはみんな傘をささず、服は濡れっぱなしだった。こんなに暑いと風邪をひく心配もなく、むしろ濡れたほうが涼しくて過ごしやすいからだ。恥ずかしがって傘の上下二本差しをしているのはボクぐらいなものだろう。

放課後、ボクら三人はタワーの水門を抜けてすぐにタキ子のタコ焼き屋へと向かった。

「たしかにあるわよ？ 今の時間帯だここからは見えないけれど、たぶんタワーを通り過ぎた奥のほうを浮かんでるんじゃないかしら。……それをどうするつもり？」

タキ子はボクが尋ねた奇妙な質問に、怪訝そうな表情を浮かべながらも答えてくれた。

「いや、べつに。ちよつと見てみたいだけだから。ありがとう
！」

ボクは適当に答え、姫ちゃんやカイドウと一緒に先を急ぐ。

昨日は外部からタワー周辺水域まで潜水風船サブバルンを持ち込む方法ばかり考えていた。

けれどわざわざ、そんな面倒なことをする必要はない。

外部から持ち出さなくても、もともと内部のタワー周辺水域に隠されている潜水風船サブバルンを使えばいいのだ。

内部に隠された潜水風船サブバルンは、絶対どこかにはいるはずだった。

理由はともかく、シオザキさんがタワーに頻繁に出入りしていたことは発信機から明白。

そのシオザキさんも、海底に潜るためにはボクらと同様に潜水風船サブバルンを利用するはずだ。

その潜水風船はどこから持ち込む？

周辺水域をぐるりと一周してみても、密かに持ち込めるようなルートは見つからなかった。

利用する回数が少ないならば、人がいないときに水門を大きく開いて持ち込むことも可能だろう。けれど頻繁に出入りがある以上、いちいちそんなことをしては逆に危険だ。

となると、内部のどこかに潜水風船サブバルンを隠しておくしかない。ではどこに隠すのか？

水面は一般開放されているのだから、人目につかない場所といっても限度がある。

だったら逆の発想だ。
あえて人目のつく場所に置いて、潜水風船サブバルンだと気づかれないうよう偽装する。

「だとするとこいつは、世界一ぜいたくなタコ焼きってわけだな」
目的のものを発見して、まずカイドウが言った。

「まだ決まったわけじゃないよ。同じぐらいの大きさで、同じ球のカタチをしているから一番怪しいってただだからね」

目の前にあるのは、巨大なタコ焼きの模型。タワーの周辺水域には、広告としてたくさん大きな模型が流されている。そのうちのひとつだ。

ヒトの目がないタイミングを見計らって、ボクは水のなかへ潜った。

タコ焼き模型の底へと移動すると、模型には不釣り合いな分厚い鉄板と、丸いトビラが見える。

トビラの取っ手をくるくる回すと、なかに入ることができた。

「……おおっ」

いきなりビンゴか。今日は怪しいものをしらみつぶしに調べていくつもりだったのに、もう必要がなくなってしまった。

タコ焼き模型の中身は紛れもなく、潜水風船サブバルンの内部だった。

内部の壁は、半分が鉄板で、もう半分が水に透きやすい布でできている。

前方には操縦桿があり、中央にはアメニウムの注入口が備え付けられている。アメニウムの残量は……よし、充分あるな。

トビラの取っ手もスムーズに動かせたし、風船内も大して埃がたまっていない。ごく最近に使用されたことがあるのは間違いない。

ボクは外のふたりに聞こえるよう、手を大きく二回たたいた。タコ焼き模型が本当に潜水風船サブバルンだったことを知らせる合図だ。

すぐにカイドウと姫ちゃんサブバルンが風船内に入ってきた。

「わーお、本当に本物の潜水風船サブバルンだ。隠すほうもなんていうか……大胆なことするわよねえ」

たしかにそのとおりだ。無関係の他者が動かせないようにする口ツクも付いていない。

いや、ロツクなんて道具と時間さえあれば解除されてしまうから、不審に思われないためには付けられないほうがいいのだろう。

船内のすみにはゴミ袋がたくさん置いてある。万が一、偶然にでも見つかったときは、回収アームで海底のゴミを取り除く清掃用だと思ひ込ませるつもりなのだ。

「タワーの海底が怪しまれないことを前提にした隠し方だね。おかげでボクらは簡単に、！？」

船底から、物音ッ！

外側でくるりくるりと、トビラの取っ手がまわされているような音が響く。

だれかが侵入してくる……。

「マスクの、男か？」

カイドウが声をひそめて、銀傘をかまえる。

まさか潜水風船サブバルンが発見されないよう見張っていたのか？

何をしにきた。話し合い？ 殺し合い？ 外にはヒトがいるんだぞ？ いや、外から中の様子はうかがえない……！

トビラが開く。

鋭い眼光が、ボクらを射抜いた。

「あらなによ？ ヒトに傘なんか向けちゃって。物騒ね」

「タキ子お！？」

カイドウが叫ぶ。

鼻を鳴らして傲然と、タキ子は風船内に上ってくる。黒ビキニ以外には、なにも身につけていなかった。もちろんマスクなんてかぶっちゃいない。持ち物は濃緑の傘ひとつきりだ。

「てめえ、なにしに来たんだよ」

「それはこつちのセリフ。なんか怪しいなと思って後をつけてみたらコレだもの。なにしてんのよ、あなたたち？ なんなのよ、これ

……サブバルン潜水風船？」

顔をしかめてタキ子は船内を見まわす。

カイドウは手で八工を追い払うようにして怒鳴った。

「帰れ帰れ！ おまえにや関係ねえことだ」

「いやよ。関係あるわ。だってこれはうちの店が出してる広告だもの。あなたたちこれで勝手になにかするつもりでしょ？ それを知ってほつといたら、あたしが責任を取らされるかもしれないじゃない」

そんなことを言いながらも、タキ子の表情はサディステイクだ。関係のあるなし以前に、絶対にたのしんでる。

タキ子にしてみたら、今度はこちら側の弱みをにぎるチャンスだしなあ……。

「ごめんタキちゃん、あとで絶対に元に戻すって約束するから！ ここは見逃してくれないかな？」

姫ちゃんが両手を合わせてお願いし、ボクも付け加えて言った。

「あまり他人に知られたくないことなんだ。『情報を独占したい』って意味じゃなくて、『知ってしまうと危険かもしれない』って意味で。タキさんだって変なことには巻き込まれたくないでしょ？」

「『危険かもしれない』ですって？」

タキ子の声色が、うってかわって剣呑なものに変わる。

やばっ……下手なことを言ってしまった。

「カイドウ、あんたまたなにかバカなことをやろうとしてるのね！

「？」

「だ、だからなんだよ」

この流れはまずい。タキ子はカイドウの冒険好きを本気で嫌っている。過去にもカイドウが立てた“夜の旧校舎探索計画”を嗅ぎつけて潰したことがあったのだ。

「べつにあんたひとりならどうなっても構わないわ。けれど引越してきたばかりでよくわかってないレイちゃんを巻き込むのはどうなのかしら」

「あ、ううんタキちゃん。わたしはちゃんと同意のうえで、」

「黙りなさい小娘」

ギンツとにらみを効かせ、ついに姫ちゃんにも直接本性の一端をぶつけるタキ子。

「……わーお、わおわお……」

姫ちゃんは手を宙でバタバタさせて、言葉を詰まらせた。

「だ、大丈夫だってタキ子。おまえもオレの腕っぷしだけは信用してるだろ？ なにかあったとしても、絶対にオレがこいつらを守ってみせるから」

「それにボクだってフォローするし」

「余計に不安にさせるようなこと言わないでちょうだい」

「ええ！？」

「……仕方ないわね」

タキ子がボクへのフォローなしにつづけた言葉は、かなり意外なものだった。

「心配だから、あたしも一緒についていくわ」

「え……？？」

てっきり連れ戻されると思っていたのに。

発言の意図が、さっぱり読めない。

しかし追い払うことは難しい現状、不可解ながらもタキ子の言うとおりにするしかなかった。

人目の少ない場所に動かしてから、ボクらはタコ焼き模型の潜水風船を潜水させた。

ボクとカイドウと姫ちゃんとタキ子で、乗組員は四名。

タキ子には凍氷タワーの海底に秘密の出入り口があるかもしれないことだけ話しておいた。その情報を仕入れた経緯は一切、話していない。悪亜さんの二の舞は踏みたくなかったから、その点はしっかり注意を払った。

風船の壁の半分は小麦色に塗られた布だ。頑丈である一方、水に透けやすい素材を使っていて、潜水すると海中の眺めがおぼろげに見えるようになる。

海底にはゴツゴツした岩と、沈んだゴミが目立つ。岩の隙間の一部にはサブマリン大根がたくましく生えている。どうせ自生しているものだから、根が細すぎてボクら人間には食べられない。しかし小さな魚にとってはその限りでなく、群をなして大根の葉をつついていた。

ボクは操縦桿をあやつりながら、タワーの足元の方角へ風船を寄せていく。

相変わらず岩とゴミと、わずかな海草や小魚ばかりの光景がつづいていた。

「あの岩、削られた痕があるわね」

タキ子がタワー間近にある岩山の底を指して言った。

む、たしかに岩が削られている。その削られ方は自然に付いたものというより人為的っぽい。

操縦桿を小刻みに動かして、慎重にタコ焼き号を穴に近づける。

穴の奥は暗くて見えない。

広さは、ギリギリでなかに入れるぐらいだ。

「穴のなかを調べようと思うんだけど、いいかな？」

ボクはみんなの同意を取りつけてから、風船を穴のなかへと動かす。

ちよつと奥へすすむと、外の光がとどかなくなり、まわりが見えなくなつてしまった。

「カイドウ、操縦桿をまかせた」

ボクはカイドウにそう言つて、傘をグルグルまわしながら火型のアメニウムを利用して明かりを灯す。

とはいえ、その明かりは弱いので、視界が悪いことに変わりはない。

タキ子がボクの出した明かりに目を細めながら言つた。

「おかしな使い方をするのね。火型なんだから、もつとこう、手軽に炎を出すぐらいできるでしょ？」

「できないわけじゃないけど、苦手なんだ。日常的にこういう変な使い方をするのに慣れちゃつてて。そんなことより、どうしようか？ これ以上こんな狭いところを不用意にすすむのは危ないと思うけど」

「いや、待つてアーミヤ。……流れてる」

「え？」

姫ちゃんが要領を得ないことを言つた。

そのまま周囲をきよるきよると見回しながら沈黙。姫ちゃんの次の言葉を待つて、ボクらも黙つた。

「ふうん、たしかに流されているわね」

タキ子が納得したように、ぼつりとつぶやく。

「やつぱりそうだね、タキちゃん。ゆっくりだけど、この洞窟のなか、すすむ方向に水の流れがある。どこかに繋がっているんだよ。わざわざ操縦しなくても」

「流れにまかせときゃ、目的地まで連れてつてくれるってわけか」

カイドウが引き継いで言つて、操縦桿から手をゆるめた。

「楽でいいぜ」

「……そのあいだ、ボクは明かりを保つためにずっと、傘をグルグルしてなきやいけないんだけど……」

ぼやきながらもまわしつづけて十数分、まわりの海に光が差し込

み始めた。

そろそろ穴を抜けるようだ。

カイドウは操縦桿を再びにぎり、船を動かす。完全に穴から抜け出したのを確認してから、海上まで風船を浮上させた。

海の上に出てしまうと、船の透けて見えていた布部分も見えなくなってしまう。外の様子を確認するためには、いったん風船から出なくてはならない。

カイドウは準備運動をしながら言った。

「それじゃあちよつくら、外が安全かどうか確かめてくるな」

銀傘を持って出ていき、間もなく外の水面から水をはじく音と一緒に、

「うおおおっ!?! なな、なんじゃこりゃああああ!?!」

カイドウがあらんかぎりの驚きを、大げさなぐらいの大声であらわした。

「おまえら、とりあえず外は安全だ! 早くこっちに来い! つーかなんじゃこりゃ! マジでスゲー!!!」

船に残ったボクら三人は顔を見合わせる。

なにがそんなにスゲーのか説明してほしいところではあったけど、百聞は一見に如かず。

ボクらも急いで船の外へと出た。

「……っ!」

あまりの光景に、ボクは言葉を失った。カイドウみたいな驚きの声を上げることさえできない。

姫ちゃんもタキ子も同じみたいだ。

あたりを静寂がつつみ、外の雨が壁を打つ音と、姫ちゃんがついた大きなため息が、妙にあたりには響き渡った。

四方は氷の壁に囲まれている。

氷の壁が厚すぎて、外側の様子は不鮮明だ。

空を見上げようとすれば、どこまでもどこまでも氷壁と螺旋階段ばかりつづいていて、天井は見えない。

明かりが灯されているわけじゃないのに、薄暗いものの周囲の様子を知るには十分な光が届いていた。たぶん天井が空へ開けているわけじゃなく、高いところの氷壁が薄くなっている、太陽の光が透けて入り込んでいるのだろう。

それにしても、こんな高い建物をボクたちはひとつしか知らない。

氷の壁を支えるように、赤い塗装のされた鉄柱が伸びているし、疑いようもなかった。

「……凍氷タワー、なの?」

タキ子がめずらしく呆けたように言った。

「ああ、凍氷タワーの内側だろうね。……推測は、大当たりだった」
「でもアーミヤ。この上に昇っていつてる水の流れはなに?」

姫ちゃんはごくりと息を呑んで、氷の壁を指差していた。

氷の壁をつたって水が静かに流れている。下から上へ、吸い上げるように。

凍氷タワーの内部へと繋がる地下水路はここで行き止まりだから、ボクらを導いてきた水の流れはこれの影響だろう。

この流れはどこまでつづいているのだろうか。てっぺんまで吸い上げられているのだろうか。

なによりも、どんな力が働けばこんなことが起こるのか。

「わからない、けど……上になにかがある。間違いない。調査団が証言したような、『なにもない』なんてことだけはありえない」

ボクのモヤモヤを吹き飛ばすように、カイドウが叫んだ。

「じゃあさっさと登ろうぜ！」

いつのまにか水中からタワーの階段のうえに上っている。それどころか、先にひとりで行こうとしていた。

うわっ！？ 勝手に単独行動するんじゃない！ いまの状況

で興奮するのはわかるけどさあ！？

「こらっ、待ちなさいよ、このバカ！」

カイドウのそばにいたらしいタキ子が、すぐに水から上がってカイドウの後を追う。

ボクと姫ちゃんも階段と反対側の氷壁を見ていたので、ふたりに簡単には追いつけない。あわてて階段の方へと泳いでいく。陸にたどり着くころには、カイドウとタキ子はだいぶ高いところまで行ってしまっていた。

ふむ、それにしてもまわりが氷で囲まれているわりには、あまり肌寒くないな。外の気温が高いからみんな濡れた服のままー（タキ子は黒ビキニのまま）だったけど、このまま上ってしまったても大丈夫ぞ

ピシッ！

「？」

どこかでなにかが軋んだような音。

言い知れない悪寒。

なにか、苦くて、重たいものが胃のなかにズンと落ちてきたような。

ゆるやかに、おだやかに、けれども不吉に、雷鳴のような重低音のどどろきが遅れて聞こえる。

「んなっ!?!」

見上げて、頭が真っ白に。

どうしてそんなことになっているのか、信じられない光景
氷壁の一部がはがれ落ちようとしている!

落ちそうな巨大な氷の断片の真下、階段の途中、そこにはカイド
ウとタキ子のすがた。

ガガッ、ガガガガッ 轟音を響かせて、氷片が落下する。

カイドウに直撃コース!

「危ない!」「カイドウー!」

ボクと姫ちゃんはそれぞれ叫び、

「ダメッ!」

タキ子も絶叫。

そして、そして、タキ子はカイドウを突き飛ばした !

間一髪、おかげでカイドウは直撃を免れる。

氷片は螺旋階段にぶち当たり、無数に砕け散った。

だが、細かくなって莫大な量となった氷片は雪崩のごとくふたり
を襲う。

あっという間に呑み込まれ、

「ぐっ、あああ!」

カイドウはすぐさま自力で抜け出す。

しかしタキ子は 出てこない。氷片のなかに埋まったままだ…

…!

「なあっ!?! タキ子ッ! タキ子ッ! タキ子おおおおおッ

…!」

カイドウは半狂乱気味に名前を連呼し、砕けた氷片を掻き分ける。
ボクらも埋もれたタキ子を救いだすべく、階段を駆け上がる。

「っ!?!」

が、何故か姫ちゃんが途中で立ち止まった。

いやしかし、その意図を問いただしているヒマはない。時は一刻
を争う。

ボクは氷片の山に追いつき、カイドウとともに拾い上げていく。少し遅れて姫ちゃんも到着し、三人で作業をつづける。

「あつ……」

タキ子のクセのある髪が見えて、ボクは声を漏らした。頭を強く打ったのだろう。息はあるけれど反応がない。

氷片を取り除いていつて、タキ子を救出する。

「ちくしょう、オレのせいだっ！　ちくしょう、なんて、バカなことを……！！」

たしかにカイドウがうかれて先行しなければタキ子が氷片落下に巻き込まれることはなかっただろうけれど、そもそもこんなこと予期できるわけがない。

にしても、なんでこんな狙ったようなタイミングで？　運が悪かっただけなのか？

いや、考えるのはあとだ。

ボクは思案を中断し、タキ子の脇に手を当てた。

冷たい。とても冷たい。冷え切っている。こんな氷の山に埋もれてたんだから無理もない。

ボクは傘を強く握って回し、熱を放出。でもこんな気休めもないところだ。

「なにか防寒着になるものは？」

いまタキ子が身につけている黒ビキニだけでは、凍え死んでくださいと言ってるようなもの。

ボクたちがいま着ている服は、氷片を取り除く際に思いつきり冷えてしまっている。そんなものを着せても防寒効果は期待できないしまった。一度、タワーを上げる準備をするために戻るべきだったのだ。今のボクらは着替えひとつ用意していない。

「あるよ」

しかし、姫ちゃんは言った。

「隠してるとはいつても、身分が身分だから。証明できるもの、ずっと持ち歩いていたの」

感情を押し殺したような、至極淡々とした声だ。

ボクは不審に思いながら姫ちゃんのほうを振り返る。

「……それ、はっ!?!」

姫ちゃんが広げて見せたのは、紫一色の衣服だった。

あまりにも希少で、王族以外に着ている者は見かけない。

ゆえに、それを着ている者は王族であることを示しているに等しい。

水をはじく、特殊繊維の集合体。

人々は畏敬の念を込めてその名を呼ぶ。

レインコートと。

ボクはたまらず叫んだ。

「姫ちゃん!?! それをタキ子に着せるつもりなのっ!?!」

「そうだよアーミヤ。レインコートは濡れないし温かい。防寒着にはうってつけなの」

「でも、それを着せてしまったら、タキ子が目を覚ましたときに……」

姫ちゃんはニコツと笑った。

「わたしが王女だってバレちゃうね、たぶん」

「……っ」

ボクはなにも言い返せない。

姫ちゃんは自分のやろうとしていることの意味がわかっているのだろうか。

「……わかっているんだろうな。」

すべて理解したうえで、自分が積み上げてきたものが壊れることを知っていて、それでもやるのだ。

たしかに、意地と命を天秤にかけて、どちら側に傾くかなんてわかりきってはいるけれど。

それでもどうして、こんな簡単に……。

「カイドウー」

姫ちゃんと呼ばかけて、レインコートを渡した。

「タキちゃんにさせてあげて」
ポンと肩をたたき、先に階段を下りていく。背を向けて、表情を隠すように。

そこにどんな心中が渦巻いているのか、ボクにははかり知れない。
「……っ。すまねえ、恩に着る！」
カイドウの感謝には、振り返らずに背中であえた。

ボクは火型のアメニウムで熱を放出しながら、カイドウがタキ子にレインコートを着せているあいだ、ずっとタワーの氷壁を見ていた。

肌の体感で分かってはいたことだけど、やはり凍氷タワーの内部はそれほど寒くないらしい。少なくとも氷点下よりは上だ。砕けた氷片は、いま触れるとわずかに融けた水分が感じられる。

もちろん内部だけじゃなくてタワーの外はもっと暖かはずだ。いったいどうしてこんな氷の壁が維持できているのやら。タワーを支える赤い鉄柱が、モリモリと氷を育んでいるような、そんな奇妙さだ。

「……あれ？」
そういえば、凍氷タワーの外の氷壁が崩れ落ちたなんてニュースは聞いたことがない。

普通、大きな氷が融けていけば、やがて自重に耐えられず崩壊を起こす。それがないということはつまり、氷の内部がなにか芯になるようなもので支えられていることを示す。

いま居るタワーの内側は空洞だ。芯はタワーそのものではなく、赤い鉄柱ということになる。

なのに……なのにタワー内側の氷壁は崩れ落ちた。
何故だ？

芯がタワーの外側にだけ働いて、内側には働かないなんてことがありえるのか？

いや、そう考えるよりもむしろ……。

ボクは氷壁のちょうどはがれ落ちてきた部分を観察する。

「！？」

そして見つけた。

崩落でえぐれた氷壁の一端に、なにか硬くて鋭いもので削られたような傷ができているのを。

おそらくボクらがここに来る前に、だれかがつけた傷だろう。

氷壁の崩落は、自然に起きたものじゃない。

あの傷が原因だ。あの傷が氷壁にひずみを生んで、ボクらが階段を駆け上がる振動を引き金として崩落させた。

だれかが意図的に起こしたんだ！

そうだとすると逆に、カイドウが先走ったのはケガの功名だった。もしもボクらが固まって動いていたなら、被害はタキ子ひとりじゃ済まされない。全員が崩落に巻き込まれていた可能性もあったのだ。

「アーミヤ、カイドウー！」

先に階段を下りていたはずの姫ちゃんが、血相を変えて戻ってきた。

息を切らしながら、視線は真下に据えている。

「どうしたの、姫ちゃん？」

「下を、見てッ！」

「下？」

言われるがままに見てみると、

「ば」

はるか下方に、

「か」

外からタワーの内部へ通じる水際で、

「な！？」

ひとりの男が階段を上がるうとしていた。

遠目からでも、そのすがたはあまりにも特徴的だ。

トレードマークは二本角のシルクハット。

ヨレヨレでビショビショのジャージ。

下にズボンを履いていない。

今日のパンツは、白ブリーフだ。

「悪亜さんッ……!!?」

カイドウも姫ちゃんも、ありえない人物の登場に愕然としていた。

悪亜さんには、今日も放課後にタワーを探索する予定だということとは伝えておいたけど、潜水風船^{サブマルン}についてはなにも話していない。

いや、仮に話していたところで、ボクらを追って来た理由がわからない。

……ただひとつ、考えられる理由があるとすれば。

「ふたりとも、よく聞いて。氷壁の崩れ落ちたところに、だれかがつけた傷痕があった。あの崩落は意図的に起こされたものだったんだ」

ボクはさつき気づいたことをふたりに話した。

「その崩落に巻き込まれたのはタキ子だけで、ボクら三人は無事に済んだ。崩落を起こした人物は、次になにをするだろう。……無事だったボクらに、追撃を加えようとするんじゃないか?」

カイドウが、レインコートを着せたタキ子を背負いながら訊いた。

「悪亜のおっちゃんが、マスクの野郎だったって言いてえのか?」

「いや……」

ボクはあいまいに答える。

そこがどうも引つかかるのだ。

マスクの男のアメニウムは雷型。一方、悪亜さんのアメニウムは水型。

ふたりが同一人物なわけがない。

ということは、悪亜さんはただの共謀者で、マスクの男はまた別にいるということなのか……?

待てよ。

ひとまずマスクの男については、折りたたみ傘爆弾の発動や、浮遊させていた傘の上半分や露先から見て、雷型なのは確実だろう。

でも悪亜さんのほうはどうだ？

ボクが念のために型を訊いて、それに悪亜さんは答えていた。ただの自己申告じゃない。玄関口の水面に傘の先端をくつつけて、上方に水撃を飛ばすという実践までしてくれた。

あれは水の操作だ。

だから悪亜さんは水型。

他の型のアメニウムであんな芸当ができるわけが……

できるわけが……

……！

できる。

どの型でもできる。

「悪亜さんが水を操作したとき、ヤギイはどこにいたッ!？」

ボクの突然の問いかけにカイドウと姫ちゃんは目を丸くした。

悪亜さんのペット、フカリングシープ遊泳する羊のヤギイは

「水のなかに、沈んでいたはずだ！ 沈んでから、だれかヤギイのすがたを見た!？」

ふたりは驚きつつも首を横に振る。

「玄関口の水の底に待ち構えていた可能性は？ ペットとして飼い慣らされたヤギイなら、悪亜さんの指示で水中へ潜ませることができ。そして口にいっぱいの水を含んで、タイミング良く吐き出せば、あたかも悪亜さんが水の操作をしたように見せかけることができる」

「えええっ!？ 一歩間違えたら逆に怪しまれるじゃない。そんなことしないわよ普通!？」

そうだ、普通なら考えられない。

けれどボクは、悪亜さんが水型だったからこそ、彼が完全なシロだと判断したのだ。

くそっ、やられた！ 変態のツラをかぶったペテン師め……!!

カイドウが舌打ちして、ボクに言った。

「タキ子を頼む」

「えっ?」

カイドウは自分が背負っていたタキ子をゆっくりと降ろした。銀傘を握りしめ、階下の悪亜さんを見下ろす。

「オレが奴の相手をする。どうせ下からは出られねえ。おまえらは先に頂上へ行ってる」

「な、なにを言ってるんだカイドウ!？」

下からは出られないだつて?

たしかに悪亜さんが下にいるかぎり、ボクらを通してはくれないだろう。

けれどそんなの、カイドウが悪亜さんをぶつ倒せば済む話じゃないか。

「オレさ、前に言ったよな。悪亜のおっちゃんが苦手だつて。……なんつーか、オレにはわかるんだよ。身のこなし、いや、オーラっての? あのヒトはやべえ。バケモンだ。たぶん、オレなんかじゃ敵わねえだろうな」

「はあ?!？」

「おまえらを巻き込まずにたたかう自信はもつとねえよ。だから、とにかくオレから離れるんだ。どうせ離れるなら先に上へ行ってたほうが上策だろ。たとえオレがやられたとしても、秘密の内容がわかればそこから作戦だつてひねり出せるかもしれないねえ。最悪、頂上まで行けば薄くなった氷の壁をぶち破って脱出できるはずだ。降りるのは命がけだろうがな」

タチの悪い冗談だと思いたかった。

あのと看、カイドウとマスクの男は互角以上に渡り合っていたように見えたのに。

けれどカイドウが銀傘を握る手は、どうしようもなく震えていた。

「だつたら、ボクも残つて」

「足手まといだ、やめろ」

カイドウはにべもなく拒絶する。

「オレはこつも言つたよな。おまえらを絶対に守ってみせるつて。」

なのにオレがバカをやらかしたせいでタキ子が倒れた。……これ以上、オレはもう、オレ以外のだれひとり、傷つけさせたりしねえ！」
「アーミヤ、行こう！」

いつの間にか姫ちゃんもタキ子を背負っていた。

「わたしたちはともかくタキちゃんだよ。はやく病院に連れて行かないと。少しでも可能性があるほうにすがろう」

そう言って、階段を先に取り上げる。

「くっ……！」

こんな、カイドウを捨て石にするような行動なんて取りたくはない。

けれども状況が、カイドウの意思が、それを強制する。

今は考えあぐねてなにも行動を起こさないことこそ、最悪の一手なのだ。

「わかったよ、わかった、行くよ！ でもカイドウ、これはあくまでも万が一のためだ。おまえが負けるはずがない。信じてるからな。これから先も、ボクたち三人は、ずっと一緒だ」

「……おう！」

カイドウは銀傘を鎖鎌に変形させて、猛然と悪亜さんに向かっていった。

ボクはカイドウを置いて螺旋階段を駆け上がっていく。
姫ちゃんに追いついてすぐに言った。

「背負うよ。代わって」

気絶した人間ひとり背負って階段を駆け上がることが、どれだけしんどいかは傍目でもわかった。

姫ちゃんの息は激しく乱れている。表情もとても苦しそうで、汗がとめどなく流れていた。

ましてや女の子の体力だ。ボクだってあまり運動ができるほうではないけれど、姫ちゃんよりずっとマシだろう。

「……いや」

姫ちゃんがか細い声で言った。

「え？」

「いや、だ、アーミヤ」

息も切れ切れに、しかし今度ははつきりと。

「わたしが、タキちゃんを、背負う、のっ」

「な……！？ なにを言ってるんだ。バテバテじゃないか。無理言っ
てないで、代わってよ」

しかし姫ちゃんは唇をかたく締めて、首を横に振った。

もう駆け上がっているとは言えないようなフラフラ状態で、一歩
一歩、次の段を踏みしめていく。

なんだ？ 一体どうして、そんな意地を張ってるんだ？

さっきから姫ちゃんの行動がどうもおかしい。

と、とにかくタキ子を背負わせつつけるなんてバカなマネを認めるわけにはいかない。

「いいから一度、降ろして姫ちゃん。このまま背負ってちゃ逆に危
ないだろ」

ボクに同調するように、

「……………降ろし、て、ください……………」

タキ子が息を漏らすような声で言った。

「タキちゃん！」

姫ちゃんは喜色を浮かべる。

「よかった！ 気がついたんだね。タキちゃん、タキちゃん！！」

「お願いします……………はやく降ろしてください。卑しきわが身で……………」

いつまでもあなた様の御手を汚すわけにはいきません」

姫ちゃんの表情が、反転した。

「ああ、王女さま、あなたさまは、王女さまなのです。そうとは知らずに働いてきた数々のご無礼を、どうかお許しください」

まったくタキ子らしくない、へりくだった態度。かしこまった言葉づかい。

タキ子らしくはないけれど、庶民らしいというべきか……………まさしくそれは悪亜さんと同じで、王族に対する一般的な対応だった。

そう、レインコートを着せた時点で、予想できたことなのだ。

「……………タキちゃん」

姫ちゃんはタキ子を降ろし、おそろおそろ正面から顔を合わせて言った。

「さっきまでと同じように……………接してくれていいんだよ……………？」

タキ子は眉をひそめて視線を外し、姫ちゃんに向かって土下座する。

「もったいなき御言葉。あなた様の深い御心にこのタキ、感激しました」

そんな心にもないようなことを言った後、レインコートを脱いで、うやうやしく姫ちゃんに差し出す。

「しかし非礼どころか、あげくの果てに王族の正装たるレインコートを穢す愚行まで犯しておいて、そのような厚かましいマネができてようはずもございません。なにとぞ、ご容赦を」

「……………っ！」

それがタキ子の回答だった。

正体がバレるのを承知のうえでレインコートを着せた、姫ちゃんの誠意の結果がこれだ。

姫ちゃんはタキ子から離れた。階段に腰を下ろしてがっくりとうなだれる。表情は見えないけれど、痛々しいぐらいに想像できた。

もう……タキ子にないを言っても無駄だろう。

姫ちゃんの正体を知ってしまったのだ。ふたりの関係が、以前と同じに戻ることはない。

ボクは姫ちゃんになにか言葉をかけようと思ったが、タキ子に腕をつかまれ引きとめられる。

「……アマヤくん、なにがどうなって、王女さまがこんなところにいるのかしら？」

タキ子がボクの手をにぎる力はとても強い。説明するまで離してくれそうになかった。

ボクは観念して手短に経緯を話す。

「ふうん？ あなたも、カイドウも、よく平気で王女さまと一緒にいられたものね」

説明後、それがタキ子の第一声。

畏れ多いというよりも、王族なんて面倒な存在とよく付き合えるわね、と言ってるような口調だ。

触らぬ神に祟りなし、とでも思っているのか。

むかついて、ボクは語気を強くして言い返した。

「王女だからどうした！ 姫ちゃんは普通の女の子だ。さっきまでおまえが、気軽に話していた女の子“レイ”から、なにも変わっちゃいないんだ」

「だからなおさら、思うのよ」

「へ？」

タキ子はいきなり、ボクの耳をグイッと引つ張った。

ただでさえ鋭い視線がさらに鋭さを増し、鬼のような形相がボクの眼前に。

「身分を隠して学校に行くなんてバカなマネ、あなたたちが止めてあげるべきだったんだわ」

まるでタキ子のほうこそボクにむかっているかのように、小声ながらも凄みをきかせて言ってくる。

「正直に言わせてもらおうと、あの子が王女さまだってわかってからのあたしの態度、半分は演技で、わざと大げさにやってたのよ」

「なんだって……？」

タキ子はせせら笑った。

「仕方がないじゃない。あたしの性格だもの」

「はあ？ ふざけんなよ！？」

ボクは思わず怒鳴ってしまう。

それじゃあタキ子は、わざとあんなことを言っ、わざと姫ちゃんを傷つけたとでもいうのだろうか。

なんだよ、こいつはどこまで……！？

タキ子はボクを軽蔑しきったような目で見て、鼻を鳴らした。

「じゃあアマくんは、あたしが愛想笑いを浮かべながら、『うふふ、全然気にしてないわ』なんて上っ面だけの言葉を吐いて、うすら寒い交友関係を保つべきだったって言うのかしら？」

「う、ぐっ……！」

「ま、クラスの女子のなかには、王女さまの正体を知ってそういう態度を取る子もいるでしょうけど、あたしはイヤだわ。正体を知っていると知らないとか以前の問題として、そんなウソで塗り固められた関係なんて」

「でも……けれど、それこそ仕方がないことじゃないか。王女であることを隠さないと、みんなが壁をつくってしまうんだ。だいたい、半分は演技で大げさにとか言ってたけど、つまりもう半分は本気で姫ちゃんを拒絶したってことじゃないか。姫ちゃんがふつうのヒトと同じであることを望むなら隠すしかないんだ。それがそんなにいけないことなの？」

「たとえ隠したところで、彼女が王女さまであるという現実からは

逃げられないわ。普通のヒトとは、どうしたって違うのよ」

「なんだよそれは……あきらめろって言いたいのかよ……」

解決策を示すでもなく、タキ子はただひたすら辛辣な言葉を投げつけるだけ。

しかし、悔しいことにタキ子の言い分は、どうしようもなく紛らわせられない本当のことではあったのだ。

「もういい」

ボクは堪えかねて言った。

「この話はもうやめよう、タキ子」

「！へえ？ふーん」

タキ子はなぜか意味ありげにうすら笑いを浮かべたが、ボクは無視して話をつづける。

「カイドウが下で悪亜さんを喰い止めてくれている。これ以上は時間を潰してられない。ひとりで歩けるか？」

「歩けそうだけど、やめておくわ。頭がまだガンガンするし……あの子と一緒にいたくない。あたしを置いて先に行きなさい」

「バカ言うな。歩けるなら歩け。歩けなくても背負って連れてく。見捨てられるわけないだろ」

「心配いらないわ。どうせ階段を上がったからって逃げられる保証はないし、むしろ安全策なのよ。ひとりでやり過ごせるから」

タキ子はボクが代わりに持っていた濃緑の傘をひったくった。階段のわきに縮こまるように座り込み、傘を広げる。

傘の色が変化し、周囲の風景に溶け込んだ。

注意深く見られたらアウトだろうけど、急いで階段を駆け上がっていたら見逃してしまうぐらいの擬態にはなっている。

「……。たしかにそっこのほうが安全かもな。わかった、置いてく。もしもボクらがやられたら、潜水風船サブバルンに乗ってひとりで逃げるんだ」
「言われなくてもそうするつもりよ」

タキ子は広げた傘越しに、ためらうことなく言っただけ。

……。しかし、本当にできるのか？

タキ子は氷片に巻き込まれそんなカイドウを捨て身で助けた。口先の残酷さとは裏腹に、そういうことをしてしまう女なのだ。

いや、悪いほうにばかり考えるな。これはあくまでも万が一の場合だ。信じよう、カイドウも、タキ子も。

まだ肩で息をしていて、うつむいたまま座り込んでいる姫ちゃんに、ボクは歩み寄って訊いた。

「大丈夫？ もう行ける？」

「……タキちゃんは？」

「隠れるって。ボクらふたりで、上を目指そう」

「うん……」

力なく答えて、姫ちゃんはボクの腕をつかみながらよろよろと立ちあがった。

はるか階下からは、カイドウの咆哮と、なにかが激しくぶつかるような音が断続的に聞こえてくる。

ボクは歯を噛みしめて、姫ちゃんと手をつなぎ、頂上を目指す。

マスクの男が立っていた。

螺旋階段を一周する距離がだいぶ短くなってきて、そろそろ高さも半分以上を越えたかなと思ったそのとき、行く先をはばむように、マスクの男が階段の真ん中で直立不動の体勢を取ってボクらを見下ろしていたのだった。

「そんな、まさか……！」

悪亜さんとはちがう、別人だ。

けれど一昨日ボクらの前にあらわれたマスクの男とは同一人物に見えた。手袋だけ真っ白で他は真っ黒な服装が同じなのはもちろん、体格が、なにより雰囲気が一緒なのだ。

悪亜さんはマスクの男じゃなかった。……水型の偽装云々はただのボクの考えすぎだったか。

しかし、来るはずのない悪亜さんがタワーに来ていて、今もカイドウとドンパチやっていることに変わりない。

悪亜さんとマスクの男は、共謀してたということになる。

最悪だ。

「……」

マスクの男はなにと言わず、傘を広げた。露先つゆさきが男のまわりを浮遊する。

まずい。ボクらだけじゃあいつに敵うわけがない。

それでも、やるしかない！

ボクは姫ちゃんを背中に押しこみ、傘を構えた。

マスクの男がボクを指さす。

露先は猛スピードでボクらに向かって 自動的に避け、後ろへと飛んでいってしまった。

「えっ？」

はるか後方、爆音とともに水煙が広がっていく。

そのなかから浮かび上がる、シルクハットを手に持った中年男のシルエット。

そんな、早っ、カイドウは、もう、でも、撃ち……!?

「ヒツヒツヒ、先手を撃つつもりが、逆に撃たれちまいやしたねえ」
余裕にあふれた軽妙な声がとどく。

水煙が晴れてすがたをあらわした悪亜さんは、薄い頭髪をさらしている。

「しかしねえ、ヒツツ、残念でした。あっしのシルクハットは、バケツの役割を兼ねていて、とっさの攻撃にも対応ができるんでさあ」
悪亜さんが手持ちのシルクハットを揺らすと、ちゃぷんちゃぷんと水の音が聞こえてきた。

ゼブラ柄の傘をマスクの男に向けて、得意げに演説する。

「お見せしやしよう、あっしの十八番。バケツの水を超高圧縮で傘の先端から撃ち出しやす！ 名あゝづうゝけえゝてえゝ、悪亜・ジエットオ……!」

ドドンツ と悪亜さんの傘がすさまじい爆音を発し、先端から水弾が射出される。

水弾は、マスクの男に一直線！

紙一重でかわされて、その先の氷壁に鋭い小さな穴ができた。

「悪亜・ジエットオ！」
もう一発。

「悪亜・ジエットオ ツ！」
さらに一発。

「悪亜・ジエエエエエエツトオ!! ヒツヒヒヤハハハハアアアアア!!!」

技名を連呼しながら水弾を撃ちまくる悪亜さん。

マスクの男は防戦一方で、まったく反撃できていない。

なにを血迷ったのか、男は自分の傘を足元に置いた。

さらに両手を高くあげる。……それは戦意がないことの表明で、

つまり……降参、ということ。

悪亜さんはやりとほくそ笑む。

「い、いつたいなにがどうなってるの？」

「姫ちゃんが困惑気味に言ったが、気持ちはボクも同じだ。

わけがわからない。」

悪亜さんとマスクの男は共謀してるんじゃないのか？

そうでないなら、どうしてこんなところに来ているのか？

さっきまでカイドウと闘り合ってたのは、なんだったのか？

「なにをしに来たんです、悪亜さん！？」

この混乱を生んだ当事者に、ボクは思いきって尋ねた。

「決まってるじゃあ〜りやせんか。あつしの愛するデビルズマンシ

ョンを傷つけたバカ者どもに、制裁を加えに来たんでさあ！」

悪亜さんは余裕たつぷりの態度でシルクハットをくるくる回し、

マスクの男を見下ろした。

制裁のために、マスクの男がいる凍氷タワーに侵入してきた、の

か？

いやいや、それ以前にあいつの居場所がどうしてわかったという

のだ。

「ヒヒツ、あの流れる宅配便フロートボールに付いた土は、農地によく使われて

いる用土だったことがわかりやしたよ。農地は農地でも、大地の上

じゃなければ浅瀬でもございやせん。そいつは海底の農地に使われ

る用土でしてねえ」

用土？ 肥料がたくさん含まれた土のことだよな。

海底のものとなると、たまたま農地に足を踏み入れて付着するこ

とはありえない。わざわざ潜ったとでも？

存在する農地自体、かなり絞られてくる。近場となると深海青菜ディープリーフ

やサブマリン大根が育てられている学校裏の……いや、そういうこ

とじゃない。

サブマリン大根。

「姫ちゃん！ シオザキさんからもらったサブマリン大根って、土

が残ってたりした?」

「え? うん、もちろん。切る前に水洗いしたから、よく覚えてるよ。あれはけっこうしつこい汚れだった……けど、えっと、もしかして?」

「姫ちゃんに驚きで目を見開く。ボクはうなずいて答える。」

「ああ、それが流れる宅配便フロートボールに付いてた土の正体だったんだ」

シオザキさんのサブマリン大根から付いた土。

そうか、ボクにも事件の裏がわかってきたぞ。

……信じたくはないけれど。

マスクの男は歯噛みして、そして初めて声を発する。

「もはやこれ以上、隠しだてしてもムダでしょうな」

聞き覚えのある、しわがれた声だ。

男はマスクをみずから外した。

白髪混じりのヒゲ混じり、親しみのある優しかった顔が、今はとても険しい。

「シオザキさん」「シオザキ……」

「ええ、私めでございます。今回の凶事、すべてこのシオザキがひとり仕組んだことにごぞ」

「まだごまかすつもりですか!？」

「ぬう……!!」

ボクに供述をさえぎられ、シオザキさんはさらに表情を険しくした。

「そつでしょ、悪亜さん?」

ボクが確認をとると、にやりと笑って首肯する。やっぱり悪亜さんも同じことを考えているらしい。

さっきの悪亜さんのセリフ、聞き捨てならないことがあった。

バカ者“ども”。複数形。

たしかにシオザキさんはマスクの男で、犯人のひとりなのだろう。だけど、単独犯じゃない。

首謀者は別にいる。

悪亜さんはその首謀者を追ってここに来ただけなのだ。

そもそも、サブマリン大根の土がボールに付いてたからって、シオザキさんが付けたとは考えづらい。まさか城のなかでボクらに渡すサブマリン大根を用意したまま、手も洗わずに、ボールに触れたとでもいうのだろうか？ わざわざ服を変え、顔を隠し、手袋までしてボクらの前にあらわれたシオザキさんが？

それじゃあ他に、どこで土が付いてしまったというのか。

サブマリン大根は、マスクの男ことシオザキさんが襲ってきた時点では、まだ大袋に入ったままだったはずだ。姫ちゃんの家に着いた直後で、わざわざ取り出す理由はない。

カイドウが市場の大水道で一度、大根と人参を取り出してボクらに見せてたけれど、その後で湖畔バーガーを食べるために手を洗ったから、カイドウの手に付着した土がボールに移ってたなんてこともありえない。

悪亜さんが確信に満ちた声で、シオザキさんに言った。

「あのボールは、あなたがアマヤくんたちに渡した大根のなかに、野菜に紛らわせて一緒に入れてあったんでしょう？」

…… まったく、悪亜さんは本当にバケモンだ。いくらボクらから事件の詳細を根ほり歯ほり聞き出していたとはいえ、伝聞だけでこの解答を導き出せたんだから。

そう、流れる宅配便フロットボールはあの^{フロットボール}大袋のなかにあつたのだ。サブマリン大根の土はそのときに付着した。

ボールが勝手に袋から出ていくわけがない。だから、もちろん「！？」

突如、一度は降参していたはずのシオザキさんが、傘を拾った。

悪亜さんに傘の先端を向けて臨戦態勢にはいる。

悪亜さんもそれに応じてとっさに傘を構えた。

瞬間、階下から飛ぶ鎖鎌！

「まだ動け しまっ！？」

悪亜さんは吠える。

完全に注意外の攻撃だった。
鎖鎌は悪亜さんの手元をはじめ、ゼブラ柄の傘を宙に舞わせる。
さらに悪亜さんの身体をぐるぐるんと鎖が巻きついて、縛り上げてしまう。

ストツ、と。

階下から跳び上がってきたカイドウが、鎌を手繰りながらボクらの眼前に着地する。

悪亜さんの水弾で撃ち抜かれた傷が身体のおちこちにあって、カイドウはボロボロだった。

「この野郎、はあつ、余計なことを……ベラベラと！ 少し、はあつ、黙つてろッ」

悪亜さんの首の後ろに一撃をくらわせて、昏倒させる。

カイドウはシオザキさんのほうを向いた。

「ありがとよ、シオザキのおっちゃんが注意を引き付けてくれたおかげだ」

そこにいるのを初めから知ってたような、平然とした態度で。

ふたりは、当たり前のように言葉を交わす。

「ちつ……できることなら秘密のまま、気づかれることなく終わらせたかったぜ」

「申し訳ありません。せめて私ひとりが責を負い、きみのことだけでも隠し通せばよかったです」

「いや、なにより悪亜のおっちゃんだろ。この野郎のせいだ、ぜんぶ台無しだ」

「たしかにそれが最大の誤算でした。しかしもとより、我らの対応が後手に回りすぎた結果でしょう」

「……それもそうだな。こうなったら仕方ねえか。無理やりつてのは気が引けるが」

カイドウはボクらに横目を向けた。

ボールが勝手に袋から出ていくわけがない。だから、もちろんだれかがボールを袋から取り出したに決まってる。

シオザキさんに渡されたという大袋は、ずっとカイドウが持っていた。

ボクら三人のなかで、袋のなかに流れるフロートボール宅配便があることを知っていたのは、カイドウしかいない。

つまりカイドウの自作自演なのだ。

自分で玄関口にボールを浮かべ、自分でボールを取りに行った。

「カイドウ……ウソだよな？」

姫ちゃんが信じられないと言わんばかりにつぶやくが、

「いいや、姫ちゃん。オレだ。オレがシオザキさんに協力させて、仕組んだことなんだ」

カイドウは悪亜さんを縛ったまま、鎖を伸ばして階段を上がる。

ボクらを素通りして、シオザキさんの横に並ぶ。

冗談のカケラも見当たらない険しい表情で、カイドウはボクらの前に立ちはだかった。

その背後には、禍々しい殺気……！

ボクは精いっぱい冷静さを装って問いただす。

「どうということなのか、ボクらにきちんと説明してよ」

「うるせえ、言えるようなことだったら初めから言ってるぜ。頼むからこれ以上、追求しようとすんな。ここで見たこと起こったこと、黙って全部なかったことにしてくれるなら悪いようにはしねえよ。

……けど、もし納得できねえなら、オレたちを無視してこの先へ進もうってんなら」

カイドウは傘の先端をボクらに向けて、冷然と見下ろしながら言い放った。

「力づくでも、おまえらを黙らせる!!」

「くっ……!!」

言われるまでもなく、カイドウがここで暴力的手段に訴えたなら、ボクと姫ちゃんになす術はない。

直前まで誤解していて申し訳ないかぎりだが、悪亜さんがやられてさえないなけばと思ってしまう。

悪亜さんが無事ならこんなことにはならなかった。

カイドウは本来、説得のために腕力を誇示するようなやつじゃない。

なんだよカイドウ……どうしてだよ。

どうしてこんなことになってしまったんだ。

どうしておまえはまだ 致命的な見落としに気づかないツ！？

「それなら力づくであんたをしゃべらせてあげるわ」

「ハツツ！！？」

背後、なにもないはずの空間から突然発せられた声で、カイドウはようやくその存在に気づく。

すぐに自分のおかれた状況を理解したらしく、みるみる血の気が引いていった。

それを見抜くのは得意なはずだったのに……。

まわりがまったく見えなくなるほど今のカイドウは追い詰められているということが。

仕掛けるほうも仕掛けるほうだ。ボクに話してたことはただの口実で、逃げる気なんかゼロで、初めからこれをやらかすつもりだったのだから。

カイドウの首元には尖ったなにかが突きつけられている。

タコ焼きをつつくピックのようだ。

ピックがカイドウの首元で、動脈を貫かんと妖しくかがやいていた。

少しでも動けばやられる。

だれもがそう思ってしまいそうなほどに禍々しい殺気がピックから発せられていた。

もちろんそれは見せかけだけだ。ピックを突きつけた本人に本気で刺す気なんかないだろう。しかし脅しとしては充分すぎるだろう。これでは傍らにいるシオザキさんも助けられない。……えげつないな。

保護色が解かれた濃緑の傘がたたまれる。

憤怒　タキ子の表情をあらわすのなら、ただその一言に尽きた。

「あんたは、ダチに傘を向けるようなクズだったかつ！」

禍々しい殺気はさらに濃さを増していく。

ああ……悪亜さんが健在だったなら、カイドウがあんなことを言
いださなかったなら、まだ穏便に事情を聞き出せる可能性があつた
のに。

もうすべてが遅すぎる。

タキ子はカイドウの首元に力を込めながら、威圧的に命じた。

「洗いざらい、すべて吐け」

二日前、姫ちゃんは城のなかでボクとカイドウに『パラレルワールド平行世界に、一緒に行こうよ』と言った。

それを聞いてすぐにカイドウは凍氷タワーの秘密を連想したらしい。

カイドウはこのときすでに凍氷タワーの秘密を知っていた。

なにかの手違いで姫ちゃんが秘密を嗅ぎ取ってしまったのではないかと疑ったカイドウは、姫ちゃんのみちづれでズブ濡れになった後、着替えを用意するという口実でボクらから離れ、同じく秘密を知っていたシオザキさんに相談を持ちかける。

カイドウとシオザキさんは、とっさに計画を練った。

まず大袋のなかに傘爆弾入りの流れる宅配便フロートボールを忍ばせる。そして姫ちゃんの家に着いたとき、玄関口の物陰にそれを隠す。

姫ちゃんの話聞いて、それが本当に秘密に迫るものだと確認したカイドウは、わざと大声を出して、外で離れて控えているシオザキさんに合図をおくる。シオザキさんは爆弾を遠隔爆破し、カイドウは身を呈してボクらを護る。

外部の刺客を印象付け、“タワーの秘密に近づくのは危険だ”とボクらに認識させる。

そうすれば、秘密を追うのは諦めてくれるだろう、と。

ボクらがケガをしないようにかばいながら爆弾を爆発させ、それでもう作戦終了……のはずだった。

マスクの男の登場には、カイドウさえ驚いたらしい。

当初の打ち合わせにはなかったが、傘爆弾だけでは説得力に欠けるとシオザキさんは考え直し、もう一芝居加えようと独断で出てきたのだった。

拙速に立てた計画。あまりにもバラバラで、あまりにもチグハグだ。カイドウが持つ袋のなかに爆弾を隠したのは、遠隔爆破を実行

するシオザキさんのすがたを目撃させないため。初めからマスクの男に扮して登場する予定だったなら、シオザキさんみずから持つていけば済む話だった。

たしかにボクらがあの爆弾だけでどれほどの危機感を持てたかはわからない。

しかし結果として、マスクの男を見たボクらはシオザキさんを疑い、危険を承知のうえでタワーの秘密を追うことに決めてしまった。カイドウはなんとかボクらに反対しようとしたが、本来は冒険好きの自分があまり強硬に反対しても、逆に勘ぐられてしまう危険性がある。カイドウは自分が秘密を知っていること自体、できれば隠し通したかったのだ。

そこでカイドウは方針を変えた。

とりあえずボくらに任せて、タワーの秘密を追わせることにする。割ける時間と人員の都合上、少なくとも数日間、予備を含めて五機ある広告に見立てた潜水風船サブバルンをすべて隠すことはできない。その期間、ボくらが潜水風船サブバルンに気づかず、諦めてくれれば御の字だ。

そして逆にボくらが気づいてタワーの頂上の秘密まで暴いてしまえばいい。いそうになった場合は

「事故に見せかけて、オレがわざと大ケガを負えばいい。そうすりやおまえらは、オレの身を案じて急いで引き返してくれるだろう？ 危ない冒険に懲りて、二度とタワーにも近づかなくなる」

「カイドウ、まさか、あの崩落は……！？」

ピックを突きつけられたまま事情を長々と説明しつつづけていたカイドウに、ボクははじめて口をはさんだ。

カイドウが苦々しい表情を浮かべる。

「オレがとつさに仕掛けて、オレだけが巻き込まれようとして……しくじったんだ」

あのとき、カイドウは外の安全を確かめるということ、ボくらより先にタワーの内部へと出た。

たしかにカイドウお得意の鎖鎌を使えば、壁の高いところにもキズをつけることができる。ボクらが水中を移動している合間をねらえば、キズをつける音も聞かれない。

ボクらのなかに犯人はいないと決めつけていたせいで見落としただけの、簡単な話だ。

シオザキさんが眉をひそめた。

「ずいぶん無茶なマネをなさいましたな。手紙で打ち合わせたとおり、私ときみが死闘を演じた末での、見せかけ上の大ケガでよかったですように」

「おっちゃんが派手に動けば、今度こそ正体がバレる危険のほうが高いつて踏んだんだよ。凍氷タワーは壁が少し崩れたぐらいじゃビクともしねえつてことは歴史が証明してる。いい考えだと思ったんだ、そのときは……。本当はおまえらが出てくる前までに崩して終わらせようとしたんだけどな。焦って鎌のコントロールをミスるわ、急いで落下地点に向かおうとしたらタキ子も付いて来るわで……ははっ、最悪だな」

自虐気味に笑うカイドウに、タキ子は悪態をつく。

「ほんと、あたしはとんだとぼっちりよね」

「す……すまねえ。本当に、悪かったと思ってる。どれだけ詫びても詫びきれねえよ……」

カイドウは弱々しく謝罪した。

しかしボクには、タキ子の言い草がどうにも引っかかった。

「とぼっちり？ 本当に偶然に？」

「どういう意味かしら、アマヤくん」

タキ子が剣呑に訊きかえす。

「いや、だって……」

カイドウの冒険好きを嫌ってるはずのタキ子が、今日に限ってボクらに同行していた。

タワーの内部に来てからはカイドウにくっついて行動し、氷壁の崩落が起きれば迷わずカイドウをかばった。

保護色とピツクの罫を、先に階段を上がってきた悪亜さんには使わずに、あのタイミングでカイドウに仕掛けた。

偶然に巻き込まれたというよりも

まるで初めからカイドウを怪しいと思っていて、自分からあえてカイドウの身代わりになったような印象を受けるのだ。

「あたしはそこまでお人好しじゃないわよ」

ボクが言いたいことを察したのか、タキ子はまず無然として答えた。

「友だちを無条件に信じてるあなたたちがお人好しすぎるの。このバカが怪しいことには気づけたけれど、ただそれだけよ」

「怪しいことに気づけた、だと!？」

びっくりした様子でカイドウが問いたです。

「ええ、昨日は店番をやってるあたしを見つけるとわざわざちよっかいをかけて時間を潰そうとしていたし、今日は今日で、広告模型の場所をあたしに訊くのもそれが潜水風船サブバルンなのかを確かめに水中へ潜るのも、何故かアマヤくんがやってたでしょ。いつもならあなたが率先してやりそうなことだったから、それでピーンときたのよ。

『なにか気が進まないことに付き合わされてるんだな』って。興味本位で探りを入れてみたら、気が進まないことは隠してるみたいだわ、危ない冒険だつて聞かされるわで……怪しいなと思って同行することに決めたのよ」

その解説を聞いて、カイドウは吐き捨てるように言う。

「けっ……んなことで怪しいなんて思えるのはお前ぐらいなもんだろうぜ。どんだけ他人の隠しごとに過敏なんだよ」

「聞いててムカついてくるのよ。イライラしてくるのよ。なにか腹に抱えたままより、言いたいことをぜんぶチ撒けてくれたほうがスッキリするじゃない」

「あのな、苛つくのはためえの勝手だがそれをオレに押しつけんな。世の中には隠さなきゃならねえことや、知らないで済むならそれが一番なことなんざ、いくらでもあるだろうが。……言っておくが、

オレが譲歩して明かせるのは事件の経緯までだぜ。秘密の中身に關わる内容は話さねえ。これ以上は絶対になにも 答えねえぞ」

今まで脅されるがままに白状していたのとは対照的に、カイドウは強く拒否を宣言する。

「譲歩？ へえー、そんなこと言える立場だっけ？ 刺すわよ？」

「刺したきゃ刺しやいいだろうが」

タキ子はまたピックで首元に圧力を加える。しかしカイドウの口調は揺るがない。

「どうせマジで刺す気なんかねえくせに。いや、万が一オレが刺されたところで、シオザキのおっちゃんがおまえを全力で取り押さええる。秘密は絶対、暴かせねえ」

「……………」

タキ子は黙考し、やがてうつすらと、口の端をつりあげる。

スツ と、カイドウの首元に突きつけていたピックを、下ろした。

「そうね、あなたは初めから秘密を隠すために自分が傷つくのは厭わなかった。こんなものに意味はないわ」

タキ子はピックを傘の骨にくくりつけて納める。

「で、そんなあなた秘密を隠したがる理由はなによ？ 少なくとも自己保身とか独占利益とか………… “自分のため” のものじゃないのでしょ？」

「……………！ 答えねえ、って言っただろうが」

タキ子は肩をすくめてなにも言わず、そのまま階段を降りはじめた。

「あっ、タキちゃ……………」

姬ちゃんは降りてくるタキ子に声をかけようとしたが、

「王女さま、わたくしは先に失礼させていただきました」

さつきまでの他人行儀な態度をくずさず、タキ子はひとり足早に去っていった。

姬ちゃんがにぎりこぶしを固くするのが見える。

タキ子はたとえ上辺だけでも姫ちゃんに合わせようという気がま
つたくないのだ。

どれだけ姫ちゃんを傷つけようとも、タキ子はただ自分の気持ち
にしたがって、“姫ちゃん”を拒絶して“王女さま”と接している。
しかし、たとえ別のクラスメイトが姫ちゃんの正体を知ってしま
った場合でも、タキ子と同じような気持ちは抱くのだろう。

王女さまをただのクラスメイトとして扱えるわけがない、と
その気持ちをありのまま伝えるかどうかは別問題だが、少なくとも
もそう思ってしまうことに違いはない。

剥き出しの真実。

それは時として、あまりにも痛々しい。

だからヒトは相手に配慮して、あいまいな言い方をしたり、ウソ
をついたり、秘密をつくったりするのだ。

「
」
そこでボクは、思い、至る。

カイドウが抱えるタワーの秘密とは、つまりそういう類の話なん
じゃないだろうか。

知ってしまえば、ボクらの心になにかしら大きな負荷がかかる事
実。

それを防ぐために、“ボクらのため”に、カイドウは秘密を護り
抜こうとしている……？

タキ子が追求をやめて引き下がったタイミングも、ボクらにそれ
をほのめかすためのように思えてくる。

「アマヤ、姫ちゃん……、ここはひとまず、黙って降りてくれねえ
か」

カイドウが重い口調でボクらに言った。

ボクはひとまず従ってもいいと思ったが、

「いやだ」

姫ちゃんは受けつけない。

「そこまで言うなら秘密の中身については聞かない。けれどカイド

ウー、ひとつだけどうしても納得できないことがあるの。それだけは答えて」

「……なんだよ？」

カイドウはその質問の意図を推し量るように、おそろおそろ訊き返した。

姬ちゃんはカイドウを見据え、問いかける。

「どうして最初の段階で、わたしが二人にタワーの話をしたときに打ち明けてくれなかったの？ ぜんぶを話せて意味じゃない。あんな爆弾なんか用意せずに、カイドウが一言、『タワーには秘密がある。詳しくは言えないけど、暴かれると困るから詮索するな』とでも打ち明けてくれれば、はじめから深追いはしなかったわよ。そんなことも打ち明けられないくらい、わたしたちって信用ないの？」

「ちがう！！ そ、それは、その、だな……」

カイドウはとっさに否定はしたものの、後の言葉がつつかない。たしかに姬ちゃんの言うとおり不自然ではあるけれど、カイドウはなにをそんなにあわてているんだ？

そこまで考えが回らなかったと答えればすむ話なのに……。

「私が口止めしました。何故なら、タワーの秘密とは国家の秘密だからです」

シオザキさんが呆れたようにため息をついて、カイドウの代わりに答えた。

「え！？ なんで……？ タワーを管理してるのは……」

今度は姬ちゃんが驚きあわてる。

「タワー協会は国家の傀儡です。私は王務員として、王女さまの側近に就く以前、タワーの秘密に関わる仕事をしておりました。今でもたまに休暇を取っては補助をしております」

「や、待って待って待って。シオザキはまだわかるけど、なんでカイドウまで？ 王務員でもないのに、国家の秘密を知ってる……」

！？ しかもわたしさえ知らない国家の秘密をッ！？」

「その追及がどれほど答え難いかは、王族たる貴女には察せられるはずでしょう」

「う、でも……っ！」

なんだ？ 国家の秘密……？

わけがわからないボクに対して、シオザキさんが説明を加える。

「王族や一部の王務員は、パランルワールト雨傘王国にとって世間に知られると非常に不都合な情報、いわゆる“国家の秘密”を抱えております。それを不用意に口外すれば、超法規的な手段によって処罰されることもありうるのです。それを恐れて我々は話せませんでした」

ハツと姫ちゃんが顔をあげた。

「ああっ！？ いや、おかしい、シオザキ、『それを恐れて話せない』！？ やっぱりおかしいよ。国家の秘密なんて重い言葉を笠に着て、わたしたちを煙に巻こうとしている！ 国家の秘密が本当のことだとしても、それは打ち明けられない理由にはならないじゃない。むしろ国家の秘密だったなら、わたしはその重さがよくわかっている。なおさら最初に釘を刺しておいたほうが安全で」

「いい加減にしてください！」

姫ちゃんが言い終わる前に、シオザキさんが怒鳴った。

「国家の秘密は国家の秘密！ たとえ王女さまといえど、これ以上の追求は許しませんぞ！」

「なっ、なによそれ！ やっぱり煙に巻こうとしている！！ だから最初にそう言ってくれば済んだ話でしょ！ 隠そうとして、ごまかそうとして、話を大きくしたのはどっち？ ここまで深く関わらせといて、わたしたちがその理由を訊く権利もないっていうの！？」

「そもそも悪いのは王女さまではありませんか！ 私の靴に発信器などといういかがわしいものを仕掛けなければ、発覚さえしなかったのです！」

「それは謝るけど、でも話をすり替えようとししないで！ だれが悪いとかの話じゃない！ わたしは納得できる説明を求めているだけですよ！ どうしてできないのよ！？」

「説明する必要などございませんな！ 王女さま、よろしいですか？ 国家に近い者というのは、期せずして国家の裏事情にまで踏み込みがちなものなのです！ 多少は得心いかずとも、自重というものを覚えなさいませ！ 軽はずみな行動は災禍を招きますぞ！？」
王女さまは王女さまらしく、城のなかですつとおとなしくしていればよいのです！！」

「はああ！？ シオザキ、いま、なんて言ったああアツ！？！？」
まずい、口論がヒートアップしすぎた。

今のシオザキさんの一言は、致命的だ！

「え？ オトナシク？ は？ 王女ラシクオトナシク？？ なに？

しおざきモツカイ言ッテヨ？？？」

姫ちゃんがものすごい剣幕で詰め寄っていく。

もともとタキ子に正体がバレたときに言われたことのショックを引きずったまま、ここまで来ていた。タキ子の去り際の態度が傷口を広げた。

普通の人なら遭わなかった憂き目。

求めて、あがいて、それでも拒絶された。 “王女さま” だか

ら。

そんな姫ちゃんに王女さまらしくしろとか、おとなしくしろなんて言うのは追い討ちもいいところ。いくらシオザキさんがタキ子の件をよく知らなかったとはいえ、軽はずみな言動すぎた。

つらくて、悲しくて、それでも前にすすむしかなくて。

かろうじてせき止められていた、姫ちゃんの根底にある感情の奔流までもが

「う、ああああ！ あああああつ！ バカッ！ シオザキのツ、バカッ！ 好きでやってるんじゃない好きでやるわけじゃないじゃないじゃない、こんなモノ！！」

決壊した。

涙目ヒステリックにわめき散らし、抱えていたレインコートを足元にたたきつける。

ガリガリガリと、傘の先端で階段を削りながら横に歩いていく。
「もうシオザキなんか知らない！ 血筋も秘密も知らない！ ぜんぶ！ ぜんぶ！ 壊れちゃえば……いいのにッ！！」
なにを言っているのか、なにをやるうとしているのか、姫ちゃん自身、冷静さを失っててわからなかったのかもしれない。

姫ちゃんが 飛び降りた！

螺旋階段の内側へ、真下までなにもない空間へと、姫ちゃんが飛び降りたのだ！

「王女さま！？」

「ばッ！！」

「姫ちゃんツツ！？」

いちばん近くにいたボクは、飛び降りる姫ちゃんをつかもうと手を伸ばすが、届かない。

落ちる。落ちてしまう。

もう届かない はずだったのに。

「アーミヤ！！！！」

差しのべた手を、一瞬遅れて姫ちゃんにつかまれた。

そして引っぱり上げられる。引きずり下ろされたんじゃない、引き上げられたのだ。

「えっ、なっ、ええっ？」

そのまま乗せられたのは、姫ちゃんの傘の舟。

水に浮かぶ舟でなく。

空に浮かぶ舟だった。

舟としてボクと姫ちゃんの足元に広がる真っ白な傘が、色に染まっ
っていく。

姫ちゃんのアメニウムと血液の順応はとっくに終わっていたのか、力を使うことで、ようやく発色を始めたのだ。

これは青……いや、水色か？

水色の下地に、白い模様が不規則についている、そんな傘。まるで青空のようだ。

“雷・火・水・鋼”の四つの型以外の、特殊変異として生じる第五型。

現在まで、確認されている限りだけひとりとして持ち合わせていなかった。

空気を操作し、どこまでも高く空を飛ぶことができるアメニウム空型が、姫ちゃんに発現していた。

残されて唾然としているカイドウとシオザキさんを尻目に、ボクらが乗った傘は高く高く飛翔していく。

いくら階段から行く先をはばんでも、空を飛ばれてはどうしようもない。

止めるすべなく、問答無用で傘の舟は飛んでいく。

「姫ちゃん、なにをする気!？」

「決まってるじゃない。この上に、シオザキの見せたくないものが、秘密があるんだから　それを暴くの!」

「んな勝手が許されるかつ!　傘を止めて!　頭を冷やして!　とにかく早く!」

「なんで、なんで!?　アーミヤは知りたがってたじゃん!?　タワーの秘密を探るために、一緒にがんばってきたじゃん!？」

「それは怪しかったから。得体の知れない秘密で、シオザキさんにマスクの男で、暴きにいったほうがいって判断したから　でもちがった。あれは国家にかかわる秘密で、」

「国家の秘密がなんなのよ!?　そんなの知らないどうでもいい!　王族だからとか、国の決まりだからとかで、わたしはどれだけ……!」

「ボクらにウソをついても、自分が大ケガしてでも、カイドウが必死に隠そうとしていた秘密なんだよ。まだ変だと思っことがあっても、とにかく強行突破はダメだ!　それはつまりカイドウのことも踏みにじるんだとにかく早まるなわかってわかれ姫ちゃん姫ちゃんツツ!」

「ぐっ、うっ……!　……うっ、うっウウっ、うっつっ……!」

傘の上昇が、止まる。

思いとどまってくれたのだ。

「姫ちゃんは傘の真ん中に小さくうずくまり、声を殺して泣いた。空飛ぶ船の上では密着状態から離れることもできず、ただ姫ちゃんが落ち着くのを待つしかない。」

「かける言葉のひとつも思いつかない自分が悔しかった。」

「……………いつからだと思う？」

「やがて絞り出すような声で、姫ちゃんが訊いてきた。」

「省かれた言葉を頭のなかで補いつつ、ボクは確認するように訊きかえす。」

「空型は……………ついさつき発現したわけじゃないんだね？」

「姫ちゃんはうずくまったまま、小さくうなずいた。」

「今朝ぐらいから、感じ取ってたの。でも……………認めたくなかった」

「姫ちゃんは以前に、火型がいいと言っていた。」

「自身が特別であることを嫌い、普通だからいいと言っていた。」

「普通であることを望んでる。」

「なのにどういう運命のいたずらか、さらにもうひとつの“特別”が増えてしまった。」

「それを発現させず、ボクらに隠したところでなにか変わるわけでもないけれど……………現実を、受け入れたくなかったのか。」

「あはは……………確率は十六分の一以下なのに、どうしてドンピシャで当たっちゃうかなあ」

「十六分の一だって？」

「空型はだれも持ち合わせていないはずの幻の型だ。本来なら十六分の一どころか、発現する可能性は限りなくゼロに近い。」

「今ではだいぶ薄まっちゃってるけど、もともと王族の血筋って空型のヒトから始まっているのよ。わたしが知ってる国家の秘密のひとつ。よく知らないけど、なんか初代の王が空型なのは歴史的に不都合らしいから、バラしちゃダメだよ。ここで話したのもふたりだけの秘密」

「……………秘密って、姫ちゃん……………」

「いくらボクが空型の発現を見てしまったとはいえ、そんな軽々し

く話しちゃっていいんだろうか。

いや、そんなことを突っ込んでみても仕方ない。今は姫ちゃんの話聞いてあげることのほうがずっと大事だ。

「空型なんて発現しちゃって……わたしはどうしようもなく王族なんだね。せめてアメニウムの型ぐらい、みんなと一緒にいたかったよ」

「姫ちゃんはそこでいったん言うのを止めて、傘の手先をぎゅっと握った。」

「けれど、もしわたしが意地なんて張らずにすぐに認めてれば……タキちゃんは……」

また姫ちゃんの声がくぐもる。

なるほど。さっきまでタキ子に対する姫ちゃんの行動が微妙におかしかったのは、それを悔やんでのことなのか。

もしも氷壁が崩落しそうだとわかった瞬間に姫ちゃんが空を飛んでいけば、タキ子とカイドウを傘の船に乗せて逃がすことができたかもしれない。いや、それ以前に凍氷タワーをわざわざ海底から行く必要もなく、空を飛んでいきなり頂上へショートカットすることもできただろう。

だから、せめてもの罪滅ぼし。絶対にタキ子は助けなければならぬ、と。

結果的にタキ子のケガが大したことなさそうだったのは、せめてもの救いか。

「いやだよ……わたしはもう……やだ……」

代わりの大ケガは、姫ちゃんが心に負った。

認めたくない。

普通でいたい。

けれど姫ちゃんが王族であるという現実からは、逃げられない。

ああ、そうか。

タキ子がボクたちのなを批判していたのか、なんとなくわかったように思う。

それはあきらめろって意味じゃない。

わがままになにかを求めること自体は悪くない。

ただ求めるうえでの前提を見誤っていたのだ。

姫ちゃんが求めたこととは、普通の友だちをつくったり、普通の学生生活をおくることだ。そのためには、たしかに王族という身分は大きな障害となる。

しかし姫ちゃんは王族。普通のヒトとは違う。それは動かしようもない事実で、絶対に変えられない。

かろうじて変えられるのは、王族は外に出ちゃいけないというルールぐらいなものに。

なのに姫ちゃんは否定した。

王女である自分を　まるごと否定した。

それが悪いことであるかのように、隠し通そうとしていた。

だが現実にある前提を無視したまま、なにかを求めようとしても、必ずヒズミが生じてしまう。

外に出てわずか数日で、悪亜さんとタキ子のふたりに正体がバレたのだ。

不幸な偶然？　ただの不注意？　いや、ちがう。

いま予定されている一週間だけならともかく、姫ちゃんは近い将来、学生と王女を両立させるつもりでいたのだ。ずっと隠し通すなんて、いくらなんでも無理がある。遅かれ早かれみんなにバレてしまう危険は高い。

本当に普通の学生生活をおくりたかったなら、いつそのこと最初に王女であることを明かしてから学校に行ってしまうべきだったのかもしれない。

好奇の眼、畏敬の念にさらされて、姫ちゃんとみんなとのあいだに壁ができてしまうことは間違いないだろう。

でも、無責任な言い方かもしれないが、その壁は乗り越えることもできたはずだ。

事実、ボクとカイドウは、王族の姫ちゃんと普通の友だちになれ

ている。

苦労も時間もかかるだろうけど、姫ちゃんが自分のことをしつかり見据えたうえで壁に挑むのなら、絶対に無理なんてことはない。しかし、こんなことを直接言ったところで、なおさら姫ちゃんを困惑させるだけだ。

挑むのでなく隠そうとしてしまったことの根底に、姫ちゃんの自己否定がある。

だったらボクにできることは……。

「いいなあ、姫ちゃんは」

「え？」

悩んだすえ、うらやむように言った。

「だって、ボクが昔から憧れていた空型が、幻の第五型が今、姫ちゃんに発現してるんだ。ものすごく、うらやましいよ」

この場で言うべきことなのかどうかはともかく、それはボクの偽らざる本音の一端だ。

「……でもわたしは、こんなのいらない……」

吐き捨てるように姫ちゃんはつぶやく。

「そっか。姫ちゃんの傘、ボクは好きだけどな。薄い青と白の模様で、まるで足元にもうひとつ小さな青空があるみたい。きれいだよ。すごくいいじゃないか。もしもこの模様に足りないものがあるとすれば、それは太陽かな。小さな青空を照らす、小さな太陽。……ねえ姫ちゃん、ボクはどこまでも凡庸なありふれた火型だけど、許されるなら、火から転じて太陽になりたいと思うんだ」

「……太、陽？」

「そう、姫ちゃんを照らす小さな太陽に」

ドン引きされたかもしれない。バカだと思われたかもしれない。それでも、どうしても、伝えたかったのだ。

「それぐらいボクは好きなんだよ。空型を持つ王女さまだからってわけじゃない。でも王女さまなのと無関係なわけでもない。ただの一部に過ぎないんだ。王女さまであることも含めて、それ以外の部

分も含めて、全部ひっくるめて姫ちゃんが好きなんだ。きっとボクだけじゃない。カイドウも、シオザキさんも、城のみんなも。だから いらなんなんて言わないで、いやだなんて思わないでよ」

姫ちゃんは顔を伏せたままにも言わない。

言いたいことは伝わっただろうか。

言って、なにかが変わっただろうか。

わからないまま、姫ちゃんの返事をじっと待つ。

風の音しか聞こえない、静かに浮かぶ傘の舟のなか、ボクは黙って待ちつづける。

「アーミヤ」

「ん」

「ごめん、こんなことに付き合わせちゃって」

「いや」

「戻ろっか」

「……そうだね」

言葉のやりとりが短すぎて、どう受け取ったらいいものか。

ただ少なくとも、姫ちゃんの気持ちが落ち着いてきたことは確からしかった。

まだ頂上ではないけれど、かなり高いところまで来てしまったな。これまでとは逆に、ゆっくりと下降を始める。

姫ちゃんがふたたび黙り込んでしまったので、また風の音しか聞こえなくなる。

ただひたすら、静かだった。

本当に静かで……静かだけ……。

え？

あれ？

なんで……風の音しか聞こえない？

雨が落ちる音は、どこへ消えたんだよッ！？

少なくともタワーの内部に入った直後は聞こえていたはずじゃないか！

ドクン、と心臓が高鳴った。

まわりの氷壁を見る。壁はだいぶ薄くなっていて、外の青空が透きとおって見える。

でも雨が見えない。

いくら氷壁が透けてるといっても完全に透明なわけじゃないから、雨が小降りなら見えない可能性はある。でもでも、今日の雨はかなり強かったはずだ。

「姫ちゃん、寄せて。氷壁に、舟を！」

ボクの声が真に迫っていたのか、姫ちゃんは驚いた様子を見せつつも黙って従う。

ガンツ！ とボクは自分の傘で思いっきり氷壁をたたいた。

氷壁は割れない。壁をつたって上へ向かっていた水の流れがはじかれて、傘の舟やボクらの服にかかるだけ。

くそっ、強行突破はダメだと姫ちゃんに言っておいて、ボクはなにをやってるんだ。

けれど止まらない。はやる気持ちを押さえられない。なにかにとり憑かれたように何度も何度も何度もたたくたくたく！

が、氷壁はやはり割れない。……ダメだ、薄くなったところで、ボクぐらいの力じゃビクともしない強度なのか！！

氷壁に耳をそばだてる。

かすかに聞こえるのは壁を伝って吸い上げられているあの水流。雨の音は、聞こえない。

この高度だとやっぱり……外では雨が降っていない！？

タワー関連のうわさ話のひとつ。雨を降らせる物質というのは空のなかでも低い場所にあって、そこより上は

「パ、パラレルワールド平行世界！！？」

そうだ。タワーの秘密が“国家の秘密”だと聞いてすぐ気づくべきだった。

王族どころか王務員でさえないカイドウが、どうしてその秘密を知っていたかという理由について。

ボクの知るかぎり、カイドウが持っている国家との特殊な接点はふたつだけだ。

ひとつはボクと同じで、この国の王女さまである姫ちゃんと付き合いがあること。

そしてもうひとつはカイドウの家族　代々国家直属の天気予報士を担っている唯一の家系。

「カイドウ……まさか、おまえが秘密を隠し通したかった理由って……」

たとえ国家の秘密であることまで聞かなくても、カイドウがタワーの秘密を知っているという事実だけで、遅かれ早かれいずれ気づいていただろう。

秘密の情報源は家族であり、天気予報士という職種からタワーの秘密が天候に関連したものである、と。

それだけで充分なのだ。

その段階でもう、ひよっとしたらあるかもしれないなんてレベルじゃなく

かなり濃厚に、パラレルワールド平行世界が実在するのではと疑えてしまう！

カイドウはよく知っている。

ボクがどれだけ太陽に憧れていて、どれだけ雨のない世界に焦がれているのかを。

そういう話をいっぱいしてきた。そういう夢をたくさん語った。

カイドウは、そんなボクに対して、パラレルワールド平行世界の存在を匂わせるだけ匂わせといて、「詮索するな」なんて言えるだろうか。

そんなことを言うぐらいなら、たとえ自分が傷つくことも、隠し通す道を選んでしまうんじゃないだろうか。

“自分のため”じゃない。

“国家のため”でもない。

“ボクらのため”どころじゃない。

ボクのために！？　ボクのせいで！？

「バカだあいつは……！」

傘の手先に額を当ててうめく。

ボクが平行世界への憧憬と禁忌の板ばさみになるぐらい、なんだ
パレルワールド
というんだ。

カイドウひとりが抱え込む問題じゃな。

ググツ　と足下に突然、圧力がかかる。

「えっ、姫ちゃん？」

傘の船がふたたび、浮上をはじめたのだ。

ボクは驚いて顔を上げ、姫ちゃんを見る。

しかし船を浮かばせている本人のほうで、もっと驚いていた。

「ち、ちがうの！　わたしじゃなくて、勝手に、制御が……、下から押し上げられてるッ！」

あわてて下をのぞき、異様なものに気づく。

「なんだこれは！？」

氷の壁を伝っていた水流の一部が、姫ちゃんの傘下に引き寄せられていたのだ。

壁から離れてもなお、水流は上へ昇ろうとして姫ちゃんの傘を押す。

その水流は傘の先端に当たり、水滴となって散らばっていく。

水滴は、落ちない。

浮かび上がっていく。

あたかも雨が逆さまに降っているように！

「この水の押し上げからは、抜け出せないの！？」

「うん、難しそう……。押してやる力は弱いけど、わたしに微妙な調節ができないから。下手に動かせば傘がでんぐりがえっちゃって、

アーミヤだけ真下までズドンだよ」

「ってことは、なんとか螺旋階段の高低差が小さいところをねらって跳び移るしか」

言いながら螺旋階段までの距離を目測し、背中にイヤな汗をかいた。

……たぶん、ボクの脚力じゃギリギリ届かない。不用意に跳べば

落ちるだけ。

姫ちゃんが人差し指を立てて言った。

「こ、このまま昇って天井につかまっちゃうのは？」

「天、井？」

ボクは首を真上に向けて、それを見つける。

今までずっと、見えなくなるまでつづいていた螺旋階段の終点が、ついに肉眼で確認できるようになっていた。

階段の先はタワーの頂点までつづいているわけじゃなく、赤い鉄骨で組まれた格子状の平面につながっている。

平面の中央にはなにか石像のような大きなものが置かれていてよく見えない。

そのまわりは吹き抜けた。

氷壁をつたっていた昇る水流は、中央の物体に引き寄せられているのか、平面の高さより少し低いあたりから壁を離れていき、格子のすき間をぬって上へ流れていく。

なるほど、あの格子なら手でつかむことができる。一か八かで螺旋階段へ跳び降りるよりずっと安全だ。

けれど……いいのか？

あの場所まで行ってしまったら、カイドウたちが必死に隠そうとしていた秘密を、さらに深く知ることになりかねない。

そんなことよりも螺旋階段へ飛び降り　いや、危険だ。

危険だから、仕方ないんだ。

ボクは心のなかで強く言い聞かせた。

もっともらしい理屈のようで、実のところは言い訳混じり。

それ以上は、他の手段を考えようとはしなかったのだから。

パレルワールド
平行世界への興味が混じってなかったと言えば、まったくのウソになる。

格子の先にある“それ”が見えて、まず驚きよりも不気味さが先行する。壮観なタワーの内側を見たときのような感動はなく、ただ奇怪にしか思えない。

格子の上面を部屋と呼ぶなら、その部屋の中央には大きなかめ甕のようなものが置かれていた。

細かな装飾がなされた鋳物っぽいものがごてごてに付けられているおかしな甕だ。

甕にはタコの足のようにたくさんのパイプがぶらさがっていて、ドクン、ドクン　と心臓が鼓動するように、浮かんでくる水粒を吸い込んで集めている。

吸い込まれた水が変化したもののなか、甕の上部からはモクモクと怪しい煙が昇っていた。タワーの頂点に穴が空いているらしく、煙はその穴を通して外に排出されている。

ボクらは格子を伝って螺旋階段の終点に降りた。

その先に見える、部屋の隅には扉があった。氷壁を長方形にくり抜いて、代わりに取っ手付きの鉄板をはめ込んだだけのような簡素な扉だ。カギなんて付いてないように見える。

……確かめられるのだ。あの扉を開ければ、本当に平行世界がパラレルワールド存在していることを。

扉を見つめるボクに、姫ちゃんは尋ねた。

「開けに行きたい？」

「……そうしたいのは山々だけど……、勝手に開けるわけにはいかない。ここにあるものも見なかったことにして、早く戻ろう」

そう言いながら、ボクはなんとか心を落ち着かせようとする。

パラレルワールド平行世界の存在。それはボクにとって強烈な誘惑だ。

さっきは衝動的に壁をぶち破ってでも真相を知ろうとしてしまっ

だが、これ以上、同じような愚行を起こしちゃいけない。

「いいのアーミヤ？ 一生後悔するよ」

「……っ」

誘惑を抑えようと必死なのに、なんてことを言うんだ。

ボクはものすごく不機嫌な表情を、隠さず姬ちゃんに向けた。

「ごめん。今の状況を作ったのは、わたしが空を飛ぶときにアーミヤを連れちゃったせいだもんね。わたしの責任だよ。それはわかっている。わかっているけど、言わせて」

なにか意を決したような表情で、姬ちゃんは必死にボクに訴えかける。

「平行世界はアーミヤの夢だったんでしょ？ あこがれだったんで

しょ？ それなのに、こんなところで引き下がったら絶対に後悔するよ。あと一步、踏み越えるだけですべてわかるかもしれないのに」

「あれだけ強硬だったカイドウたちの反対を押し切っても？ い

いや、そんなのは間違ってる」

「アーミヤが我慢するほうが間違ってるよ！」

姬ちゃんはびしゃりと断言する。空型を発現させた前後の感情的な物言いとちがって、冷静に考えたうえで言っているようだった。「いちばん大切なのは、自分の気持ちだよ。たとえまわりが反対しても、ルールを破ることであっても、わがままを貫いたほうがいいこともあるの」

「…… 姬ちゃんが今までそうしてきたように？」

自由に城の外に出られない王族の決まりを打ち破って学生をやるうとした姬ちゃんと同じように、ボクにも平行世界のわがままを貫バラレルワールドけ、と。

「でも姬ちゃん、わがままを貫いて、その結果はどうだった？ ボクにはとても良かったものとは思えないな」

意地の悪い言い方だなと自分でも思う。

あのタキ子との顛末を見たならば、それはだれにとっても明白だ。「そうだね。わたしが信じて貫いてきた行動は、たぶん間違ってい

た。とても傷ついた」

「姫ちゃんは素直に認めるが、しかしボクを見据えるその瞳は、とても澄んでいて、力強い。」

「でも、わたしは行動を起こして、気づけた。自分なりに、どこがおかしいのか、何がマズかったのかを。それは学べる。次に活かすことができる。キズは負つてもいずれ癒える。シヨックは受けても立ち直ることができる。それを教えてくれたのは……アーミヤだよ？ だから今度は、わたしの番なの。アーミヤがここで平行世界をパラレルワールドあきらめたら、それが本当に正しかったのかはわからないまま。扉の先も確かめられずに、悶々と、ずっと悶々としながら生き続けるの。それともアーミヤの夢はすぐに忘れられるほど軽いもの？ そうじゃないでしょ。さっきの取り乱し方を見たらわかるよ。アーミヤはここで引き下がったら絶対に後悔するもん。そんな思いをするのは……。お願いアーミヤ、もう一度よく考えて」

「……………」

それは初めて聞かされる姫ちゃんなりの哲学。いつも笑って、ほがらかで、表面上はなんでもないように見せて、その内に秘めた深奥。

「ボクは……ボクは……」
対してボクはどうだろう。

ダメだダメだと自分に言い聞かせながら、しかし一方で秘密に迫るための行動を取ってしまっている。

どっちつかずだ。いったいどれだけフラフラ迷っていたら気が済むのか。

長く、大きく、深呼吸を一回した。

ボクは覚悟を決める。

考えを落ち着かせよう。

姫ちゃんの哲学を見習おう。

自分の気持ちに正直になろう。

そうと決めたなら 答えはたったのひとつきり。

「そうだ、ボクは、平行世界を、あきらめたくない……！」
「うん！」

ボクは一步、前へと踏み出し、
「行つては、なりませぬ……！」

「ッ！」「ッ！」

しかしシオザキさんが、それを制した。
ボクらを追つて駆け上がってきたらしい。

息も絶え絶えに、シオザキさんは言う。

「お二方の話し合いは聞こえておりました。……そこまでおっしゃるのならば、覚悟があたりだというのなら、私個人としては秘密をすべて打ち明けても構わないと考えます」

「！？ 本当ですか！？」

無理やり帰らされると思っていたのに、意外な提案だった。

「ええ、カイドウくんは反対するでしょうが……」

そう言つてシオザキさんは螺旋階段の下を見つめる。おそらくカイドウは悪亜さんを縛ったせいですぐには身動きがとれないのだろう。ここに来たのはシオザキさんひとりだけだった。

「ですからその前に約束してください。私の話がすべて終わるまで、決して扉を開けないと。さもなければ」

シオザキさんは顔をボクらのほうに向きなおし、眉間にしわを寄せて言つた。

「太陽に、殺されます」

意味がわからずともその物騒な言葉の響きに、ボクらはとまどつ。

「……わ、わかりました。約束します」

ボクがかかるうじて言葉を返すと、シオザキさんはうなずいた。
部屋の中央にあるあのおかしな大甕に歩み寄る。

大甕はあいかわらず脈動しながら怪しい煙を立ち昇らせていた。
それを背にシオザキさんがおごそかに言い放つ。

「これは、『ラフレシア』と呼ばれる降雨装置でございます」

「は………？」

言ってる意味を、またも呑みこむことができなかつた。

「つまり、人工的に雨を降らせるための機械なのです。正確に言うなら、この物体だけでなくタワー全体がその役割を果たしているらしいのですが、古代文明の遺産で、詳しい仕組みは私たちにもよくわかっておりません。この特殊な煙が空と交わることによって雨を降らせる“きっかけ”ができるのだと、語り聞かされております」

なんとも突拍子のない話を、シオザキさんは淡々とつづける。

「降雨装置を発見したのは、我らが雨傘王国パラソルワールドの初代の王なのです。あのお方は今の王女さまと同じように空型を発現されていて、頂上からこの部屋に入って来られました。海底からの出入り口は彼が晩年になってから密かに作らせたもの。初代の王は、この装置を使って各地の雨をコントロールし、さまざまな“奇跡”を演出してきました」

「！」

ちょうど姫ちゃんがさつき話してくれた国家の秘密と合致する。

シオザキさんの話を信じるならば……それは国家にとって不都合な 闇の歴史だ。

奇跡なんて甘い響きに惑わされちゃいけない。

昔は群雄割拠の戦国時代だったと聞く。

あの時代にこの独占的な力を利用すれば、たとえば反攻勢力の一帯にのみ激しい豪雨を降らせて大損害を負わせることもできるはずだ。

そして、今だってやろうと思えば……。

「ご安心を。現在は降らせる雨量を乱数任せにしておりますので。たまに我々が微修正を加えることもあります。悪用はしていませんと誓いましょう。……専門知識がなければ細かな操作ができないとはいえ、本当ならこんな物騒なもの、存在しないほうが望ましいのですが……そもそも非常に頑丈に造られていますし、たとえ本当に壊れたとしても、そのせいで世界の大部分が平行世界パラレルワールドになってしまいませんから、出来るはずもございません」

「……？ 雨が降らなくなるのなら、とてもいいことじゃないですか」

そうなればもう、雨除けのために傘をさす必要がなくなるだろう。大雨で波が荒くなることは少なくなり、事故も減るだろう。

雨で緩みっぱなしの土壌が安定し、建物が建てやすくなるだろう。なのにシオザキさんは、平行世界パラレルワールドが存在するのをいけないことのように言っている。

「アマヤくんは、“日傘”というものをご存じですか？」

シオザキさんが確認するように訊いてきた。

「ヒガサ……？」

そんなものを、ボクは知らない。

「舟でなく、雨除けでもなく、太陽の光をふせぐためにさす傘のことでございます」

「そ、そうなんですか」

説明されても、いまいちそれを利用するメリットがわからなかった。

だって、太陽の光を浴びるのをどうしてふせぐ必要があるんだろうか。

むしろ雨に濡れさえしなければ、積極的に浴びたいと思うものじゃないんだろうか。

「古代において、日傘には『パラソル』という別の呼び方がありますな」

「え、シオザキ？ パラソルって日傘じゃなくて雨傘のことだよ。昔は違ってたってこと？」

わざわざ国名にも、雨傘王国パラソルワールドと使われているぐらいだ。

世界中のだれもがパラソルは雨傘を意味する言葉だと思っていることだろう。

「そのとおりです。時代とともに意味が変わっていきました。古代の雨傘は『アンブレラ』とも呼ばれておりましたが、こちらはすでに死語となっておりますな」

シオザキさんは目を閉じて、話をつづける。

「パルソルワールド雨傘王国……この名はもともと、『雨をもつて世界を覆う日傘となす王国』を意味するのです」

「雨で世界を覆う日傘？ そんなことに、なんの意味があるんですか？」

シオザキさんはあごヒゲをさすってボクらから顔をそむけた。

なにか言いづらそうに口をもごもごさせている。さっきからどうも、話の核心に触れるのをためらっているようだ。

だがしかし、意を決したのか、シオザキさんはカツと目を見開いてボクらを、否　ボクを見据えた。

そして言う。

「太陽は目に見えぬ猛毒を発しております。猛毒の名は『しがいせん死害線』、
核心を……！」

「太陽の光を直接浴びつづけると、死害線はヒトの皮膚を貫通して毒を体内に運び、一日と保たずそのヒトを死に至らしめます。毒をふせぐためには、傘などで日光そのものをさえぎるか、雨水で皮膚を濡らして反射させなければなりません。もしも雨が降らなくなれば、死害線の毒に冒されて多くの死者が出ることでしょ。生き残った人々は、全身をあますところなく衣類で覆った顔の判別さえつかない格好で外出せねばならず、常に毒の恐怖におびえねばなりません。太陽は人々があこがれていいような希望の星ではないのです。ヒトを殺す、悪夢の星なのです！」

『太陽に、殺されます』

あのとときのシオザキさんの言葉の意味が、ようやくわかった。

聞いてるうちに身体中が熱っぽくなり、なのに耳だけ妙に冴えていて、目の前にいるはずのシオザキさんがとても遠くに離れていくように錯覚する。

気持ち悪い。

頭がくらくらする。

右も左も後も後ろも、今ボクは両足で立っているのかもわからな

い。

不思議な浮遊感があるのに、ヒザから下は重たくて鉛のようだ。じつとりねつとりした気持ち悪い汗が、背中でブワアツとなる。のどがカラカラで、ツバを飲み込めない。

太陽の、毒ッ!?

あこがれて、追い求めて、その先にあつた真実が、毒ッ!?

なんだ、なんだよなんだよなんだよなんだよなんだよそれは!?

シオザキさんは話を中断して気遣わしげにボクを見ている。

姫ちゃんも心配そうにボクのほうへと向きなおす。

「ぐっ、うつつっ……!」

なんとか気を持ち直そうと、ボクは腹に力を込めてうなつた。

いったいなにを揺らいでいるんだ。覚悟を決めて、自分から踏み込んだことじゃないか。

そこに突然、階段を蹴る音が響く。

「なっ、あ、あああああ!? シオザキのおっちゃん、なにやっ
てんだよ!?!?」

遅れてやって来たカイドウが絶叫した。

人工降雨装置を背にシオザキさんがボクらに話をしている様子を見て、すぐに大方の察しがついたのだろう。

「まさかアマヤ、聞いちまったのか!? おっちゃん、話しちまったのか!? どうなんだよ、おいしい!!」

「ええ、話しました」

シオザキさんが素っ気なく答えた。

「おっちゃん、自分のしたこと、わかってんのか……!?!?」

「そうですね、喩えるならば私たちの世界とは、致死性の毒霧が充滿する地下室のなかのようなもの。自覚せぬまま布を口に当てているから、その害を逃れているに過ぎません。ひとたび毒霧の存在に気づいてしまえば、それが自分を害さないと頭で理解していても、心を平静に保つことは難しいものです。たしかに知らないで済むのなら、知らないままのほうが良いのでしょうか」

「心の平静なんて生ぬるい話じゃねえだろ！ 打たれ弱いやつがその秘密を知れば、寝込む、やつれる、鬱になる！ それぐらいは重い！ 過去には秘密を知ったことが原因とされる自殺者だっていたらしいじゃねえか！！」

カイドウは悔しそうに、背にある氷壁を裏拳で思いっきりたたいた。

「太陽の毒は、知ること自体が毒なんだよッ！！」

堰きとめられない嵐のなかの濁流のように、カイドウはシオザキさんに怒りをぶつける。

「オレはな、親父に初めて秘密を聞かされたときからな、絶対にアマヤにだけは気取られちゃいけないえって思ってたよ。太陽にどんだけあこがれを抱いているか知ってたから、バレたらどんだけ傷つくか想像がついたから！ オレ自身が傷つこうとも、どう思われようとも、なにがなんでも絶対に止める！ そう決めてたのにつ、おっちゃんのバカ野郎！ 大バカ野郎ッ！！」

「カイドウくんの怒りはもつともです。しかし期を逸したならば、方針を転換するもまたやむなきことでしょう。私はこの判断を過ちだとは考えません。それに……きみは少々、アマヤくんを見くびりすぎてはいませんか？」

シオザキさんはちらりとボクに横目を流した。

その言動とは裏腹に、シオザキさんの視線はボクを試すように鋭い。

ボクは大きく息を吸って、そして言った。

「シオザキさん、説明のつづきを」

「！」

カイドウが信じられないと言わんばかりに、ボクをまじまじと見つめる。

……なるほどね、“見くびり”か。

つまりカイドウは、ボクがとても打たれ弱いやつで、太陽の毒を知ってしまえば生きる気力を失ってしまうぐらいにショックを受け

るだろうって考えていたわけだ。

ああそうさカイドウ。

たしかに大シヨックだ。

今まで神様だと思っただけで信仰してきたものが、じつはまったく逆の、大悪魔なのだを知ってしまったようなものだもの。

けれどカイドウ、ボクにとって太陽ってのは独りぼっちだったときの信仰に過ぎないんだ。

太陽は空に在るかぎり、ずっとボクらを見ていてくれる。

世界の人々に平等に降りそそぐ暖かな存在。どんなに偉大な人物にも、どんなにちっぽけな人物にも、分け隔たることはない。

家で独りで、どんなに寂しく泣いていても、太陽は明るく照らしてくれた。

だからカイドウと姫ちゃんに出会えたあの日、太陽は心の支えから、“ただのあこがれ”に変化したんだ。

なくなってしまうても、なんとか大丈夫。

いいや、大丈夫じゃないといけない。

ボクを信じて秘密を明かしてくれたシオザキさんのためにも。

ここまでボクを引っ張って覚悟を決めさせてくれた姫ちゃんのためにも。

そしてなにより、どこまでもボクを護ろうとしてくれたカイドウ、おまえのためにも。

この程度のこと、へこたれるわけにはいかないんだ……！

「説明のつづきをお願いします」

ボクがもう一度言うと、

「かしこまりました」

シオザキさんは微笑を浮かべて言った。

「それぐらいに気を保っているのなら、実際に見せてもよろしいでしょう。扉の向こうの、パラレルワールド平行世界を」

「お、おっちゃん!？」

「パラレルワールド！ やっぱ扉の向こうに平行世界は実在するんですね。で

もどつして……?」

「ラフレシア降雨装置がこの場所にあるがゆえの、台風の目のようなものでな。あるていど低くなると周辺の降雨が分散して他所と同じようになるのです。無論、扉の先の平行世界パラレルワールドには死害線が降り注ぎます。身を護るために、水を目いっぱいかぶってください」

シオザキさんは傘を広げて、その内側に襲へと運ばれる水の一部をすくいあげる。

ボクと姫ちゃんがうなずくと、シオザキさんはボクたちの全身に水を浴びせかけた。

カイドウは迷いながらも、結局、ボクらと同じように水を浴びる。最後にシオザキさんも浴びて、四人で扉のもとへとすすんでいく。「水の効果が保つのは数分間だけです。長居は絶対に無用ですぞ。」

私は若いころに、死害線対策を疎かにしたせいで毒をわずかながら皮膚に浴びてしまい、死にかけたことがあります。くれぐれもご用心を……!」

そのときのことを思い出したのか、シオザキさんは身震いする。さらに何度か念を押してから、ようやく扉に手をかけた。

ギィイ という大きな音とともに、外への視界が開けていく。

その先にあったのは、曇りなき青空。

雨粒は一切皆無。

さえぎるものはなにもなく、ただひたすらクリアーに、限りない鮮明さをもって、青空がボクらの眼前に広がっている。

そしてわずかに視線を動かせば、そこに見える 太陽。

すでに夕暮れが近く、太陽は赤みがかっている。

なのにその輝きは、南中しているかのように燦々として強い。

この光景は、タワー頂上の高度で、隔てるものなく見ているためなのだろうか。

あれは毒を発する悪夢の星だ!

でもでも、ボクのおこがれだった星だ!

夢見たカタチと大きく違えど、紆余曲折を経てボクはここにたど

り着いた。

うれいような、かなしいような、言葉にあらわせない複雑な感情があふれ出してぐしゃぐしゃになる。

「あっ……」

ボクは思わず顔を伏せる。

実感する。

雨が降らない世界とは、あまりにも残酷だ。

死の害が降り注ぐからじゃない。

ごまかすことができないからだ。

目に涙があふれても、白日の下にさらされる。

凍氷タワーを降りたあと、ボクはタキ子の付き添いで病院に向かうことになった。

今は平気そうに見えても、一時は気絶するぐらいに強く頭を打つたのだ。念のために検査はしなくちゃならない。

カイドウとシオザキさんは悪亜さんに謝罪やら説得やらするので手が離せないし、姫ちゃんとタキ子の関係は言わずもがな。あまり気は進まなかったが、ひとりで行かせるわけにもいかず、タキ子の付き添い役はボクに回ってくるほかなかった。

「アマヤくんは秘密を知れてどうだったのよ？」

お互いが自分の傘に乗りながらせまい水道路を進んでいるところで、おもむろにタキ子が尋ねてきた。

「どうだったって言われてもな……それは話せないことになってるんだから」

タキ子は頂上まで来てないので、コフレシア降雨装置や死害線のことを知らない。教えちゃいけない約束になってるし、タキ子もさつきまではそれを了解していたように思える。

どうして今になってそれを問いただしてきたのだろうか。

タキ子は肩をすくめて言った。

「ああ、秘密そのものに興味はないわよ。訊きたいのはあなたの感想だけ。秘密を知れて、良かったと思ってるのか悪かったと思ってるのか。あなたが浮かべた涙はうれし泣きだったのか悲し泣きだったのか」

「な、泣いてなんかないし！」

「ウソね。下で合流したとき、少し目が赤かったじゃない」

「おまつ……おまえなあ！」

タキ子のやつ、鋭いのは目つきだけで勘弁してくれよ。

せめて気づかないフリを！ 男子のプライドを平気で土足で踏み
にじりやがって……。

「あたしの想像でしかないけれど、あのバカが秘密を護ろうとして
いたのは、あなたたちのためでしょ。知らないでいたほうがまだマ
シな真実……いわゆる“言わない優しさ”ってやつよ」

まあ、おおむね正しい。どちらかといえばボクたちと言うよりボ
ク個人のためという色合いが濃かったけれど。

「でもそれって、あのバカが勝手にそう思い込んでるだけで、あな
たたちが実際にどう思うかは別の話じゃない。だから訊きたいのよ。
あなたは秘密を知ってどう思ったのかを」

「うーん……」

そういう意図で訊いているなら、変にはぐらかすのもどうかと思
ったので、正直に答えることにした。

「難しいな。知らなきゃよかったって気持ちはたしかにあるし、逆
に知れてよかったって気持ちもある。どっちの気持ちが強いのかと
いうと、どうなんだろう……後者……なのかなあ」

そりゃあ太陽が悪魔の星だなんて話にショックを受けないわけが
ないけれど、知らないままであこがれていた自分の未来を想像する
とぞつとする。

太陽の毒は知ること自体が毒。

カイドウの言うとおりではあるんだろうけど、カイドウには悪い
けれど、それでもやっぱり知れてよかったように思う。

知る毒に致死性は乏しい。ぐつと痛みをこらえてしまえば、毒へ
の耐性だつてできてくるものだ。

「“言わない優しさ”なんて、バカげてると思わない？ たとえ相
手を傷つけることであっても、はっきり言ってあげたほうが相手の
ためになるものよ」

「んなもん状況によりけりだろ。……タキ子は絶対にすげえ言
いすぎだ」

「でしようね」

あつさり同意して、タキ子はふつと笑う。

その笑顔はホタル貝の淡い明かりによる陰影のせいか、どこか寂しそうに見えた。

「アマヤくんは覚えているかしら？ 昔、あたしたちが王女さまのパーティーに出席していたときのこと」

「はっ、ちよつ、えええッ！？ タキ子こそ、覚えてたの！？」

ビックリした！ まさかタキ子の口から姬ちゃんのお友だちづくりパーティーの話題が出てくるなんて。

「さすがに王女さまの顔までは覚えてなかったけど。あのバカにぶたれて泣かされた黒歴史…… そう簡単に忘れることはできないわ」
自分の頭をさすりながら、表情に苦々しさを混ぜてタキ子は答えた。

完全に忘れてたのは加害者のカイドウだけだったようだ。

もしもタキ子に顔まで覚えられてたら、レインコートの件がなくても登校初日で即バレだった。

姬ちゃんの正体を隠し続けるとか、ますます無理のあるプランだったように思えてくる。

「それともうひとつ忘れられないのが、王女さまとの一件よ。あの子はパーティーでよく言ってたわよね。『わたしが王女だとか気にしないでいいよ』みたいなこと」

「うん。たしかに言ってたような気がするけど……それがなにか？」

「なんとも思わない？ 鈍いわね。あんなことを言われても、実際には本当に王女さまなんだから、無視することなんてできるわけないじゃない。気にしないフリはできるけど、気味悪さはのこるわ。それじゃあ誰とも付き合いなんてつづかない。あのときあたしは、そう思ったのよ」

誰とも、というのはさすがに言いすぎだろう。ボクとカイドウは姬ちゃんとの付き合いがつづいているのだから。

……しかし、ボクら以外の友だちができなかったのもまた事実だ。自分が王女さまであることの前提無視。

それゆえの歪み。

身分が悪いと決めつけて、その他の原因を考えようとはしなかった。

なにもこの問題はいまに限ったことじゃなく、昔から潜んでいたということなのか。

「あなたみたいなイレギュラーがいてくれたおかげであの子が救われたのはたしかでしょうけど、おかげであたしみたいな一般人が抱いた印象に気づく必要もなくなっちゃって……だから自分が王女さまなのを隠して学校に通うなんてバカなマネをしでかすのよ」

「……………」

タワー内で指摘していたように、なおさら事前にボクたちが止めてあげるべきだった、とタキ子は言いたいのだろう。

「あたしがあるとき、言っただけあげるべきだった」

「そうだね……て、んんっ!？」

思わず傘の漕ぎ手を止める。タキ子は遠く星空を見上げていた。

「パーティー会場で遠くから斜に構えて皮肉るんじゃなく、面と向かって王女さまに言うべきだったわ。『気にしないなんてムリよ』って。でも言わなかった。言えなかった。あのかのあたしは、そんなことを言うのはシツレーだと思ってたから。でも、もしも言えていたのなら王女さまは……………」

言葉を区切ってタキ子はうつむき、自嘲気味につぶやく。

「笑っちゃうでしょ？ あたし、そんなつまらないことを忘れられないでいたのよ」

「……………タキ子……………」

「まあでも、話したおかげで少しスッキリしたわ。聞き相手があんなのは癪にさわるけど」

らしくない語りだったけど、最後に憎まれ口をたたくのは忘れられない。

タキ子はボクを追い抜いて傘の舟をすすめていく。

置いてかれないようにボクもあわてて傘を漕ぎだした。

ひよつとしたら、と思う。

タキ子が齒に衣着せずヒトが傷つくようなことばかり言うようになったのは、そのときの後悔があったからではないのだろうか。

相手が間違ってると思うのなら、たとえキツイ言葉を使ってもそれを示す。

相手のためを思って、あえて憎まれ役を買ってでている。

……いやいや、アホくさい。性格の悪さを好意的に解釈しすぎだな。うん。ボクやカイドウに対しては明らかに意味のない侮辱がほとんどだし。

「ところであなた、自覚はあるの？」

唐突にタキ子が振りかえり、そう問いかけてきた。

「自覚？ なんの？」

「あたしの呼び方」

「へ？ おまえの呼び方って、タキ……子……お………うああっ！？」

ボクは気づいて素っとな狂な声を上げた。

「ああー、うわー、あはははは………なんのことでしょうか、タキさん」

「やばっ！ いつのまにかタキ子のことを素でタキ子って呼んじゃってる！！」

「いつからだ？ 一体、いつから!？」

「いまさら呼び直しても、遅いわ……！」

タキ子の目は殺気立ち、傘の骨にくくりつけられていたハズのタコ焼きピックが、いつの間にやら手元に配置転換。

「うおおっ！ まさかこいつ、今度は本当に刺す気じゃないだろうな!？」

まわりに人通りはない。下手をうてば病院行きのケガ人と付き添い人の立場が変わってしまう。いや、その前に海に沈められる！

「い、言わない優しさなんて、バカげてる、のでは……？」

ボクは自分の言動の正当性を主張してみた。

が、反応は舌打ちのみ。……明らかに逆効果。火に油である。

ヒュオオッ！

次の瞬間、ピックがボクの鼻先をかすめるのであった。

その日一番の危機をかるうじて乗り切り、ボクは翌朝の日の出を目の当たりにすることになる。

その光景がいつもとまったく違うふうに感じるのは、場所が城の屋上だからというわけじゃないだろう。

病院でタキ子のケガが問題ないことを確認した後、ボクはシオザキさんたちと合流し、城のなかで一晩をすごした。

今回のタワーの件の事後処理の関係で、家には帰してもらえなかったのだ。

「わーおアーミヤ、こんなところにいたんだ。昨日の今日なのに……たくましいね」

ボクを見つけた姫ちゃんがてくてくと屋上に上がってくる。

お城ではレインコートを着ているから必要ないのに、姫ちゃんは自分の青空模様の傘を広げた。

「うりゃー、うりゃー、どるりあー！」

が、雨除けには使わない。

姫ちゃんは自分の傘を回転させながらボクの傘にアタックを仕掛ける。

「なんだなんだなんだ？」

姫ちゃんの意味もなくぴよんぴよんと跳ね出した。

「やー、なんかモーシオザキと色々話し合ってたらこんな時間になっちゃっててねー。徹夜越しのテンションというわけですて。にへへへ〜発散させるお〜い」

「おっと、ご、ご機嫌だなあ……。和解できたの？」

「『ワカメできたの？』 どしたの急に？ できないよ？ ガツちゃんにでも食べさせるの？ うっしっし、最近影が薄いうえに髪

が薄いことも気にしてるからね。」

「姫ちゃんはお酒も無しにベロンデロンの酔っ払いみたいになっていた。」

「ハイテンションすぎる。昨日はタワーの秘密を聞いてから誰とも話さずはずっとなにかを考え込んでいるようだったから、なんかものすごいギャップだ。」

「……和解だよ。シオザキさんと和解できたの？」

「あのときの『城のなかですっとおとなしくしろ』云々の発言で口論になったり取り乱したりしてたから、ちゃんと仲が修復できるのか心配してるんだけど……。」

「ほうほう、そう言いたかったのか。でも話が長引いたのは別件だよん。」

「え、そうなの？」

「わざとふざけて紛らわしてたわけじゃなく、素で気にしてなかったらしい。」

「姫ちゃんはちょっとだけしらふに戻ったような様子で言った。」

「和解もなにも、冷静に考えてみればシオザキは『城でおとなしくしてろ』なんて本心で言ってるわけじゃないしね。昨日までわたしをお城に連れ戻さなかったことが、なによりの証拠だよ。」

「ん？……ああ、言われてみればそのとおりだ。」

「自作自演になってしまおうとはいえ、マスクの男に姫ちゃんが襲われたという事実をシオザキさんが国に報告してしまえば、いつでも姫ちゃんを強制的にお城に戻すことはできたのだ。」

「それはタワーの秘密を護るうえで最も有効な手段なのに、シオザキさんは行使しなかった。」

「カイドウが最初に姫ちゃんを城に戻して保護させるべきだと主張していたぐらいだから、その手段がなんらかの理由で使えなかったとは考えづらい。」

「あえて使わなかった。」

「あるいは使いたくなかった。」

それは何故かと推し量ってみると……なるほど、姫ちゃんのためなのだろう。

きつとシオザキさんはつぶしたくないと考えてしまったのだ。姫ちゃんが長い時間をかけてようやく実現させた、城の外で学生をやる計画を。

姫ちゃんの計画を護り、同時にタワーの秘密を護る。どちらか片方だけなら簡単でも、両立させるのは難しい。ましてやシオザキさんは前者を、カイドウは後者を重視していたようだから話がややこしくなる。

あーあ……対応が後手に回ってしまうわけだ。

「でもシオザキさん、普段からあんなにガミガミうるさく反対してたのになあ」

「タキがわたしに甘いからね。シオザキはそのぶんあえて厳しいこと言っただよ」

姫ちゃんはヒザぐらいの高さまで傘を浮かべて、その上に腰をおろした。

「タキといえばそういえば、悪いことしちゃったな。あの小傘発信機……」

「あれって本当はなにに使うつもりだったの？」

タキさんが姫ちゃんに渡したという小傘発信器。あれがなければシオザキさんがタワーへ行っていることにも気づけなかったわけで、今回の騒動を起こした諸悪の根源と言っても過言じゃない。

いくらタキさんが姫ちゃんに甘くても、理由もなしにあんな闇市場でしか流通してないブツを渡すなんて考えづらかった。

「家族に、だよ」

姫ちゃんは白んだ空を見上げながら答えた。

「こつそりとじゃなくて、ちゃんと了解をとったうえでね」

「ふーん……？」

「アーミヤだつてわたし以外の王族で間近で会ったことあるのはお兄ちゃんだけでしょ？ わたしたちはみんな城のなかにいるけれど、

パパやママは王務に忙しくてプライベートじゃなかなか会えないのよ。それってさ、とても寂しいことだと思わない？」

その気持ちはよくわかる。ボクは自分の母さんの顔さえ知らないし、父さんにだってほとんど構ってもらえない。それが昔はどんなに寂しいことだったか……。

そういえば姫ちゃんと初めて会ったとき、ボクは姫ちゃんが自分と同類のように思ったんだっけ。

「だからわたしはタキにお願いしたの。たとえ会うことはできなくても、お互いの居場所を、“繋がり”を確認できる代物をね」

それで小傘発信機、か。タキさんは王務員のなかでは例外的にアウトローにもよく通じてるらしいから、そういうのを入手するには適任だろうし。

たとえ闇市場の流通物でも、使い方次第でいいものにも悪いものにもなるもんな。

「でも結局、シオザキさんに？」

「そう、ただのいたずらで……いや、ううん」

言いかけて、姫ちゃんは首を横に振る。

「ただのいたずらだと思っただけ、いま考え直してみるとちがうのかも知らない。……シオザキは、わたしにとって育てのパパみたいな存在だったから」

シオザキさんは姫ちゃんの三側近のなかでも一番の古株だ。接している時間を考えるなら、だれよりも、じつの親よりも圧倒的に多い。

とはいえ、シオザキさんはいつも姫ちゃんのそばにいるわけじゃない。密かにタワーの管理手伝いも兼ねていたわけだから、休暇を取る回数だって多かったのだろう。

そんな空白を埋めるための行為。

もちろん褒められたことじゃないけれど。

ただのいたずら以上の意味があったというわけだ。

「どうして今まで気づかなかったんだらうね」

姫ちゃんはぽつりと言った。

「わたしを支えてくれるシオザキやタキ、城のみんな。それにアーミヤとカイドウー。わたしはとても満たされているはずなのに、それを実感してなかった。自分のまわりを見ようとしてもしないで、いつもいつも不満に思って、外になにかを求めてばっかだった」

「まあ、いいんじゃない？ 求めなきゃ気づきもしなかったわけだし、気づいたなら後で活かすことができる、でしょ？」

「……そだね。……ふ、ふああ……なんか、眠い」

大きなあくびをしながら、傘の舟に転がる姫ちゃん。
まぶたを閉じて、すやすやと寝息を立てはじめ。器用なことに、傘の舟は浮かせたままだ。

徹夜してるって言ってたもんな。ほっておくとこのまま爆睡してしまいそう。

「こらこら、寝るなら自分の部屋に行きなさい」

ボクは姫ちゃんの浮かぶ傘をゆっさゆっさと揺らして言った。

「むー……ここで仮眠……朝ごはんまで……」

言うだけ言っただけ動かない。起こして部屋まで移動させるのはちょっと難しそうだった。

城の屋上は、寝るのにあまりいい環境とはいえない。レインコートを着ているから服は大丈夫だけど、姫ちゃんの顔には雨がぴとぴと当たっていく。

「仕方ないなあ」

ボクはぼやきながら、自分の傘をくるくると回す。じゅわじゅわと雨がとどく前に蒸発させる。

もともとこれをやるために屋上に上がってきたのだ。姫ちゃんも混ぜてやることにしよう。

ひなたぼっこをしながら寝るなんて、傘を短いスパンで動かさなくちゃいけない以上、ボク自身体験したことはない。

朝ごはんまでの短いあいだだけど、きつと心地いい睡眠時間になるだろう。

雨にも濡れず、太陽のぽかぽか陽気を浴びながらする昼寝なんて、
いったいどれだけ……どれ、だけ………

!!!?

姬ちゃんが目を開けていた。

眠気なんて完全に吹き飛んでしまったかのような、愕然とした表情をしていた。

そうか、姬ちゃんもか。

ボクらは同じタイミングで、ひとつの矛盾する事実気づいたのだ。

それはおそらく現時点で、ボクらふたり以外には気づけなかった。
この矛盾はいつたいなにを意味するのだろうか。

理由が明かされれば、それはつまらないことかもしれない。

しかし、あるいは、ひよっとすると……、世界そのものが、大きく変わる……！

「お、おやめなさい！ 死にたいのですか!？」

「ずっと昔からやりつづけていたことです。死ぬならとつくに死んでますよ」

なんでもないようにボクは言い、つづけてカイドウが説明を加える。

「オレもさつき見せつけられて、心底驚いてたところだ。アマヤがひなたぼっこ大好きなのは知ってたが、こんな念の入った方法を取ってたなんてな。シオザキのおっちゃんは、こういう使い方を他で見ただことあるか？」

「い、いいえ……」

雨を防ぐなら、傘を差すだけで充分なのだ。

ボクのアメニウム利用法ではあまり長い時間は保たないし、とても疲れる。

しかもこの方法を考えて実際に習得するまで、ボクは練習にかな

りの時間をかけた。

そんな手間をかけてまで得られる効用は、ただ濡れずに太陽の光を浴びれることだけ。

普通なら、思いついても実行しない。

意味がないから。

太陽にあこがれたボクの自己満足以外には。

「こんな感じでアマヤは昔からずっと死害線を浴びてたらしいんだ。けれど起こったのは肌の異変だけで、普通に元気にしてんだよ。致死性の毒のはずなのにな。シオザキのおっちゃん、オレにはさっぱりわかんねえ。どうしてこんなことが起こってるんだ？」

「わ、私にもわかりません……」

シオザキさんは眉をひそめて、苦しそうに答える。

「死害線の毒は、皮膚を通して浸食していくものです。アマヤくんの肌の異変はやはり死害線によるものだと考えていいでしょう。しかし、ただそれだけで済んだ理由となると……ふむ……アマヤくんが特別に毒に強い耐性を持っていたとしか……」

「それはないよ」

姫ちゃんがシオザキさんの仮説をばつさり否定した。

「アーミヤほどじゃないけど、わたしも同じように死害線を浴びたことがあるから」

「お、王女さま！？　なんとということ……！！」

狼狽するシオザキさんに、姫ちゃんは表情を変えずに答える。

「わたしの場合、毒に苦しむどころか肌の異変さえ起こってないよ。それともわたしも特別？」

「ぐ、むう……！！」

さすがに考えづらい。ボクと姫ちゃんの両方が無事だったのだ。なにか別の理由があると考えるのが普通だろう。

シオザキさんはあごに手をあてながら考え込む。

「……アマヤくんがつくり出したアメニウムの膜、あるいはそこから発せられる高熱に、死害線の毒を変質させる効果があったのでは

「ボクら三人で話し合ったときも出てきた仮説だった。シオザキさんのことを考えるなら、ボクらだってこの仮説のほうが正解であってほしいけど……。」

「その可能性は、たしかにあります。毒を完全に遮断するわけではなく、完全に素通りするわけでもない。そんな都合のいい、中途半端な防護効果がありえるのかは疑問ですが、否定はできません」

「つい含みを持たせた言い方をしてしまい、シオザキさんが怪訝そうな表情を浮かべた。」

「アマヤくん……？ なにかもつと有力な説があるのですか？」

「……………、はい」

新しい発想を期待してたけど、シオザキさんはここで打ち止めか。いや、シオザキさんだからこそ、逆にここで止まってしまった。何十年も前から死害線のことを知っていて常識になってしまったシオザキさんと、昨日まで知らなかったボクらとでは、発想の観点が異なる。

世界に雨が降り続けるという現象が人々にとってなんの疑問の余地もなく当たり前だったように、シオザキさんは死害線に関する知識を疑えなかった。それを疑問に思うことは、どうして宇宙が存在するかを考えるのと同じレベルだったのだろう。

……………さて、どう言い出したらいいものか。

死害線のことを知ってわずか数年のカイドウでさえ、この仮説が出てきたときは渋い顔をしてたからな。

「そもそも、死害線の毒って本当に死ぬほど凶悪なものなのかよ？」
「が、そのカイドウがシオザキさんに話を切り出した。」

「は……………？」

シオザキさんはぼかんと呆けたような表情になる。

「いや、オレは親からそう聞いているだけだからさ、実際に毒を受けて死んだヒトの例を見たことねえんだ。おっちゃんは？」

「……………」

シオザキさんは押し黙る。言われた意味を次第に呑みこんでいったのか、顔がみるみる青ざめていった。

「まさかまさかまさか！ そんな、バカな！ たしかに私が任務について以来、死害線による死者は出ていませんが、しかし！ それは！ 我たちが長年、死害線に対して細心の注意を払ってきた結果にすぎませんぞー！」

「つまり、シオザキたちの死害線に関する知識は、ただの伝聞ってことだよな？ その知識が正しいかどうかは確かめていない」

上ずった声で釈明するシオザキさんへ、姫ちゃんは冷静に補足を加えた。

「そ、それはそのとおりなのですが……いや、死者を確認してないだけで、凶悪な毒が存在することは明らかなのです。若いころ私自身、毒に冒され苦しんだのですから！」

「具体的に、シオザキの場合どういう症状が出たの？」

シオザキさんは両腕をつかんで身震いしながら答えた。

「まず初めに、死害線に当たったと思われる部位の皮膚が、ヒリヒリと、内側から焼けるように痛みだすのです。痛み自体は耐えがたいほどではありませんでしたが、かような痛み方は長年生きてきたなかで初めての体験でした。問題は痛みそのものではありません。後になつて皮膚がボロボロに！ ボロボロですぞ！？ 表面の皮が劣化してはがれ落ちていったのです……！ 幸いにも私の症状はそれだけで治まり、皮膚はもとに戻っていきました。しかしさらに強く毒に当たっていたなら私はどうなっていたのや……ら……、みなさん、どうしたのですか？」

気まずげにボクたちは顔を見合わせる。

シオザキさんが本当に『死にかけた』のならともかく、たったそれだけのことなのか。

なるほど、死害線という予備知識があつたうえでそういう症状が起これば、このうえなく恐ろしく感じてしまうものなのだろう。

……そういう思い込みを除いて考えてみれば、ちよつと皮膚が痛

んで、ちょっと皮がはがれただけの話なのに。

実際、ボクはほとんど気に留めてなかった。

「じつを言うと……ボクもシオザキさんとまったく同じ症状になったことがあるんです」

「なんつ、ですと!？」

「しかも毎年のように、暑い時期になればたびたび起こりました。

シオザキさんが言っていた以上の症状が起こったことはありません。

……肌の色が濃くなる以外には」

太陽が発する光に、死害線という毒が存在すること。

このこと自体は紛れもない事実なのだろう。

問題となるのは、その毒の性質だ。

“死害線”というおどろおどろしいネーミング。降雨装置ラフレシアという不可解な遺物。雨に実際に毒を防ぐ効果があること。

そして死害線は、致死性の毒を持っているという言い伝え。

これらの要素が積み重なれば、たとえ死害線に本当はヒトを死に至らしめるような効果がなかったとしても、まったく別の効果しかなかったとしても、致死性の猛毒があると信じ込んでしまうのではないだろうか。

まさか毒の効果をたしかめるために人体実験を行うわけにもいかない。

動物実験は……したかどうかかわからないが、そもそも人間と同じ結果が得られるとは限らないわけだから信用できないだろう。

「死害線の浴び方が変わっても同じ症状なんですよ？ ボクの雨除け法が奇跡的に毒を変質させたと考えるよりも、死害線の毒そのものが、ただ肌にいくつかの異変を起こすだけの弱い毒だったと考えるほうが自然ではありませんか？」

実際に調べてみるまで両方の可能性が残されているから、まだ断言はできない。

しかし 説得力はあったようだ。

シオザキさんは肩を落とすし、

「……もし……それが真実だというのなら、……私たちが護ってたものは……いったいなんだったというのか……」

タワーの方角を見つめ、気が抜けたようにつぶやいた。

ボクらが生まれる前から護ってきた秘密なのだ。どれほどの思いを抱いていたのかを想像するのは難しい。

深く息を吐き出し、表情を引き締める。

「あいわかりました。王女さま、カイドウくん、アマヤくん……話してくれてありがとう。あとは私の仕事です。必ずや真実を究明して見せましょう」

シオザキさんは毅然として歩み行き、屋上をあとにした。

後日、検証の結果、死害線の毒はとても弱いものであることが判明する。

浴びつづければ皮膚が痛むため好ましくないことはたしかだが、死人が出るようなものじゃなかった。

死害線は致死性の猛毒があるという言い伝えが、最初から勘違いで始まったものなのか、あるいは過去にだれかが改変してしまったものなのかはわからない。

とにかく今ある現実として、死害線に対する誤認だけが残ってしまっていたのだ。

長い期間、だれも気づかずに……いや、仕方ないことなのかもしれない。

リフレシア降雨装置をはじめ状況証拠が揃っていた現状に加え、秘密を保持する人数の少なさ。疑うための要素が足りなすぎた。

秘密を打ち明けられないのなら、それが結果的に間違いであつても気づくことは難しい。

この悲劇は必然。ボクらが気づいてしまったことこそ奇跡。

奇跡はやがて、世界に広がる。

パレルワールド平行世界というひとつの大きなカタチとなつて。

今年もいよいよ猛暑が終わる時期になった。

濡れると身体が冷えてしまうから、また雨除けの傘を差さなくちゃならなくなる。ボクは服を透かせないためにいつも傘を差してるから気にしないけれど、猛暑が終わるのを残念がるヒトはとても多い。

しかし今日、そんなヒトたちをハッピーにさせるだろう一大ニュースが伝えられた。

それは、一時的に雨が降らなくなる時間があるという初めての天気予報。

朝、学校への通学路でも、道行く人々はその話題で持ちきりだった。

まあ実際の反応を見てみると、ハッピーなんか実感する余裕もなく、ひたすらびっくり仰天してる感じだったけど。

「それにしても、実現するのにずいぶん時間がかかったよね」

ボクは一緒に登校してるカイドウに言った。

「いや、三ヶ月じゃ早いぐらいだぜ？ パラレルワールド 平行世界が本当に安全かどうか、念には念を入れて調べなきゃだからな。だいたい、今日の天候操作だってかなり実験的みてえだし」

「降らなくなる範囲はせまいし、時間も数分程度……物足りないなあ」

「ま、少しずつ慣らしていかなきゃな。いきなり環境が大きく変化したら、それだけ混乱もでかくなる。オレらだって姫ちゃんの一件で思い知っただろ」

「そうだねえ。　　っと、うわさをすれば、だ」

通学路の人ごみにさえぎられることもなく、スイスイと空を飛んで、姫ちゃんが傘の舟でやってくる。

いい加減この光景も日常的になってきたようで、みんなの視線を集めてしまっているものの、姫ちゃんのまわりに人だかりができ

るようなことはなくなっていた。

いやもう、最初はほんとに酷かったんだ。

どこへ行くにしても、“王女さま”を一目見ようと集まるヒト、ヒト、ヒト……。当の本人だけでなく、姫ちゃんと親しげに話すボクらも質問攻めにされるわ先へ進めないわで思いつきり巻き込まれた。

最近になってようやく沈静化してきたところだ。

あのタワーの事件からそんなに日数が経たないうちに、姫ちゃんは学校で自分の正体を明かし、また世間に対しても自分が学校へ通いつづけるいうことを公表した。

ボクやタキ子はなにも言っちゃいない。姫ちゃんが自分で決めたことだ。

どうやらタワーの事件があった日の夜、シオザキさんと徹夜で話し合ったのはこのことを説得するためだったらしい。

「やつほーい！ アーミヤ、カイドウー！」

姫ちゃんにはこやかに手を振って、傘の舟を着水させる。

「おいおい、降りてきて大丈夫なのかよ」

カイドウが心配そうに言う。

沈静化してきたとはいえ、まだまだ姫ちゃんは注目の的。

学校内ではそのままの姫ちゃんを受け入れてくれる友だちも多くなっただいぶ落ち着けるようになったけど、外では頻繁に見知らぬヒトたちに絡まれたりして気が休まらない。

いつもはずっと空を飛んだまま通学しているぐらいだ。

「今日は天気予報のおかげでみんな浮ついてるからね。へっへっ、わたしに構ってる余裕なんかないでしょ」

「おおー、あなたがあの王女さまなのですな。ようやくお目通りがかないました。ありがたやありがたや」

「……………」

言ってるそばからお年寄りに神仏のように拝まれる姫ちゃん。

普通の生活をおくるための前途は多難だ。

それでもまあ、すでに、学校に着いてしまえばだいぶマシになってはいる。

教室の前でタキ子に出会った。

「あら、お姫」

「グツモーニツ！ タキ子ちゃん」

姫ちゃんの耳元に口を寄せてタキ子は尋ねる。

「今日の天気予報って、裏ではタワーの話が絡んだりするの？」

「えっへっへ、内緒だよ」

「うわ、ナマイキ……」

タキ子は毒づき、姫ちゃんのほっぺをグリグリとひねりまわす。

じゃれ合う女子ふたりに構っていたら時間がなくなってしまう。うなので、ボクとカイドウは荷物を置いてすぐに教室を出ていく。

わりと早めに登校してきたつもりだったのに、屋上などの平行世界パラルワールドを眺めるのに良さそうな場所はもう他の学生に確保されていた。ていた。

そのなかに割り込んでもいいけれど……。

どうせなら学校内を歩きまわって、別の場所を探してみてもいいだろう。

まだ天気予報で発表された雨が止む時間帯までだいぶある。

だれも知らないような絶好の眺め場所を発掘できるかもしれない。可能性は無限大。

探さなければ、見つからない。

さあ 小さな冒険を、始めるとしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8984n/>

パラソルワールド

2010年11月23日20時08分発行